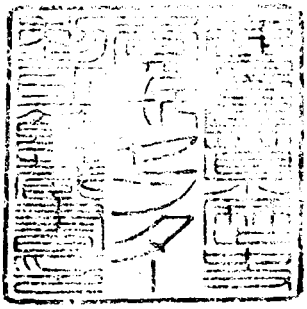
210
カ86

鹿児島県史料

旧記雑録後編六



鹿児島県歴史資料センター黎明館
昭和
60.12. 28
3864

題字

鹿児島県知事
鎌田要人

例　言

一　本書は、東京大学史料編纂所所蔵の島津家本（伊地知季安・季通自筆原本）「後編舊記雜錄」を底本とし、巻九十五から巻百二までを収めて、「鹿児島県史料旧記雜錄後編　六」として刊行するものである。本書に収載した文書の年代は寛永十六年から寛永二十一年までの六年間である。

一　収載された文書を、原文書や影写本等によって修正または補充する場合には次のようにした。

ア　修正される箇所は〔　〕で囲み、その右側に修正字句を記した。

イ　補充部分は▽△で示し、挿入にはくの記号を使用した。

ウ　修正や補充の典拠は次に掲げる記号で示した。

島津家重書　◎　　島津氏世録正統系図　○

島津氏世録支流系図北郷氏　㊥　　新納文書　㊨

一　文書・記録・記事を通じ、底本の順序に従い、通し番号を文首に付した。重出する文書にも番号を付し、重出の旨を注記して本文を省略した。

一　文書・記録・記事の内容が数種にわたる場合には、小番号を付した。

一　巻末には文書目録をかかげた。

一　刊行にあたって文書の体裁を、おおよそ次のように統一した。

ア　文書の所在などを示す原注は一字下げて首部におき、この原注や文書中の異筆・補筆は、原則として「　」（墨書）、『　』（朱書）で囲んだ。尚、重複・煩瑣にわたるものは、これを省略した。

イ　合点は、頭または右肩に「⌐」（墨）、「⌐……」（朱）で示した。

ウ　文書の年月日・差出書・宛所の位置などは、底本の体裁にあわせてある程度の統一をした。

エ　書状の封じ目は、底本にあわせて「／／」や「〆」を併用した。

オ　文書・記録・記事には、適宜に読点「、」および並列点「・」を付した。

一　原文の磨滅虫損は、字数を推して□又は▢を以て示し、墨抹等により解読困難な字は■又は■■を以て示した。

一　見せ消しは、その文字の左側に「ε」を加えて、右側に書き改めた文字を記した。

一　頭注や行間の書きこみは、底本の体裁にあわせたが、頭注の長い場合はその位置を示し、関連箇所の文末にまとめた。

一　編者の付した注は、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　原文中の返り点や送り仮名などは原則として省略し、仮名文書に付されていた底本の原注は、一部を残して省略した。

一　欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一　漢字は一部の異・略・俗体文字を除き原則として底本の用字に従った。

一　変体仮名は、現行の平仮字に改めたが江、茂、者、与など一部はそのまま用いた。

一　当時一般に使用された用字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

陳（陣）　蜜（密）　諏方（訪）　麑（鹿兒）　飛弾（驛）　太輔（大）　狼籍（藉）　百性（姓）　玄番（蕃）

愛岩（宕）　覚語（悟）　案堵（安）

旧記雑録後編六目次

例　言……一
目　次……四
巻九五　寛永十六（一六三九）年　正月―九月（光久公）……一
巻九六　寛永十六（一六三九）年　十月―十二月（光久公）……四九
巻九七　寛永十七（一六四〇）年　正月―十二月（光久公）……九四
巻九八　寛永十八（一六四一）年　正月―十二月（光久公）……一四七
巻九九　寛永十九（一六四二）年　正月―十二月（光久公）……一八四
巻百　寛永二十（一六四三）年　正月―十二月（光久公）……二二五
巻百一　寛永二一（一六四四）年中　御勘定所日記……二七〇
巻百二　寛永二一（一六四四）年　正月―十二月（十六日改元）（光久公・綱久公）……三一八
文書目録……三七一

（表紙）

光久公　寛永十六年　自正月至九月

後編　舊記雜錄　巻九十五

1

「光久公御譜中」

吉書

一神社佛閣修理興行之事、

一可專耕農事、

一可懲納國〻年貢事、

右任三ヶ條之旨、可有沙汰者也、

寛永十六年正月十一日　光久（花押）

2

「仝上」

毎歳正月十一日、於對面所、行吉書始之式禮、右筆書之、

太守加花押如右、下傚之、

「此年ノ御吉書ハ光久公御家督始テノ年頭ナリ、明治廿五年壬辰マテ屈指スレハ、星霜二百五十四年ナリ、昔時ノ式禮廻顧ノ參考ニ供ス、伊季通記ス」

3

「正文在大口郷二之宮氏」

高壹石五斗

右知行、飛諏訪爲御祭田、貴殿高ニ附置候間、堅固ニ祭可被相調候、諸出物等無油斷可被相閉目者也、

寛永拾六年卯正月十二日　新納加賀守印

二之宮伊與殿

4

目錄

原田村川くほ畦八ッ九畦之内
下田四畦拾五歩　　金助

籾貳表一斗七升五合

「外略」

合籾大豆四表四升

高ニメ壹斛五斗

右知行、飛諏訪爲御祭田、貴殿高ニ付置候間、堅固ニ祭可被相調候、諸出物等無油斷可被相閉目者也、

寛永十六年卯正月十二日　　新納加賀守印

二之宮伊與殿

5

「寫在新納氏」

里村之内麓御城内より「東共」未之方（ママ）

『本文永錄十年比ノ所ニ記し有之』

一飛諏訪大明神

御祭七月廿五日

右者大口御當家ニ不罷成内、新納武藏殿市山之城被責取在城之節、外廻ニ諏訪之鎌壹ッ飛來、飛諏方與崇、武藏殿以來代〻信仰ニ而、毎年新納『元禄ノ比』『久敬』刑部ゟ七月廿五日ニ祭有之候、

6

「雜抄」

猶〻手前難續候間、一文字之かたな刑部江持せ申候間、御校量を以可然樣御はなし候て可被下候、拙齋粉骨ニて持被立候知行賣可申儀も迷惑ニ存候間、萬事奉賴候、乍重言堺目ニ被召置候付、披官共抱置候へとも、次第ニ手をはなし候、道具等茂軍役ニあハせ召置、賣可申覺悟ニ候、誠以他國之聞得、衆中之心中茂めいわくニ存候、肥後表之商人出入多〻御座候處、失外聞申候、前〻加增御給之衆者外聞能、手前茂相續被成御奉公候、我等事者外城江被召移、失外聞候、前世之因果不及是非候、ヶ樣ニ申儀知行を望とも申儀ニ而茂無之候、外聞迄之儀ニ候、御一覽之後者火中〳〵、以上、

追而申候、弟子丸五右衞門殿當所ニ移御奉公ニ而候得共、子息右京亮殿吉田江被罷居候付、加增地于今覺悟ニ而候、ヶ樣ニ御座候儀ニ候處ニ、我等事失外聞申候、以上、

當春之御慶珎重〻〻、猶更不可有盡期候、仍其御地御靜謐之由、目出度存候、　光久樣被遊御參府、其許賑可有御座候、息刑部事茂御供申候間、萬事御指南之儀奉賴候、隨而者去秋貴樣御上洛以後、移加增之儀衆次ニ被仰付可被下之由申上候得共、于今兎角茂御返事無之候、遮而可申上覺悟ニ而茂無之候、乍去山民少老・伊地知杢右衞門尉殿・伊四郎兵衞尉殿・伊集院備後守殿移加增于今不相替覺護ニ而候、村田九郎左衞門殿・諏訪仲右衞門殿被給候移加增、兩人子共達不相替持留候而御奉公ニ而候、然時者我等申分ニ而、御返事者一途可被仰聞儀與存候、早竟拙子御奉公仕間敷ものと御沙汰茂御座候而、ヶ樣ニ候半與存候、大口國堺與申、衆中多人衆被居候之處、自他國之失外聞申候、　上樣御威光迄ニ而諸人萬事之下知茂承候、我〻式被召置候而者御爲ニ罷成間敷候、當夏中使を以御侘可申上覺悟之子細之段者、有川右近將殿江申達候間、被聞召屆候而可被下候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、

『十五六年比カ年間不知』
正月廿八日　　新納加賀守
　　忠清

伊兵少樣
參人〻御中

7

「北鄕久直譜中」

寛永十六年己卯正月、安置　黃門家久公尊牌於龍泉寺、而喜捨於香華料高三十石、

8

「御文庫廿三番箱廿一卷中」

猶以松平陸奥守殿へも、爲　上使能勢小十郎殿五日已前ニ奥州へ被相越候、是も御入國之爲御祝儀、霧御給之由候、以上、

急度致言上候、然者酒井讃岐守殿申之下刻爲御內意被仰聞候、今度初而被成御入國候、目出度思召候由御座候

而、御國へ上使被遣候、定而中途へ可有御座候間、若上使被成御行違候而者如何之儀候條、大坂へ上使三日御待候〱而、於彼地御參會可然之由、可被仰渡候條、其段早〻注進可申上之由被仰候間、此早打申付候、從御年寄者未被仰出候、是者讃州御蜜談ニ而御座候、上使大坂へ五三日も御待候て、御着船於無之者、定中途ニ而可有御逢由候而、可爲御出船候條、於路地被成其御心得、御行違無之樣ニ御心得尤ニ奉存候、此由可有御披露候、恐〻謹言、

二月四日　　伊勢兵部少輔貞昌

下野守　　久元

御供之
御老中衆

「封面ノ裏」
野州老兵部老書狀之寫

9

「御文庫拾九番箱三拾三卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

覺

一御國之御奉公方到萬民迄疎意無御座樣、連〻申付置候處、今度唐之仕合無然〻、千萬咲止令存候事、

一從前〻銀子多差渡候事無御座候故、銀子過分渡候者、若六ヶ敷事共出合候而者、爲後年不可成與存候處、從御國本、大國之儀者左樣ニ者有間敷與被　仰、銀子多被差渡候處、致首尾候之條、爰許僞之樣罷成候付、渡座之役者不念深重之至候、以輕重其科申付候事、

一琉球之儀從往古以由緒、御當家之屬御幕下候之處、中比遠嶋不如意之故、不意義絶之樣罷成候之故、軍衆被差渡候、先國司被致　上國候處、　黃門樣以御憐愍歸國被申、其上嶋〻拜領被仕、令安堵候、先國司依爲筋目、浦添按司跡目被〱(關字)仰付、我等事爲後見下知可仕旨被　仰下候處、結句從　黃門樣以　御意卽位仕、此等之御芳恩不淺之段、于今忘却無御座候、右之旨を以對御國、爲何可抽御奉公處、唐之仕合然〻無御座、却而

數年之御奉公疎意仕樣罷成、令迷惑候之事、
右條〻御兩使可有演說候、已上、
寛永十六年
二月八日　　琉國司尙豐◎(花押)〔判〕
御老中衆
▽◎御老中衆　　琉國司△

10

「光久公御譜中」
「正文在文庫」

覺

一琉球之儀、爰許就御奉公、連〻疎意有之樣ニ其聞得候、左樣ニ者有間敷與存候處、漸〻ニ其色致顯然、無心許存候事、
右、御國之御奉公方到下〻迄、無疎意樣ニ連〻申付置候處、今度唐之仕合惡敷罷成、何共迷惑千萬奉存候事、
一唐へ銀子百貫目之上者渡候事不罷成由、堅被申候、雖然大國之儀候間、銀過分ニ參候而も、目ニ立儀者有間敷かと候て、御物銀三百貫目之內外度〻被遣候處、其商買致首尾候、其上琉球より隱銀貳百貫目被差渡、其買糸も參候、然時者百貫目之外者商買不罷成由被申候者、妄語にて候、如右之唐へ銀子過分ニ參候而も商買相調候故、先年金武按司上國之刻、川上又左衞門尉・山田民部少輔・三原左衞門佐を以、唐へ銀子千貫目可被召渡之間、御奉公可被爲申由被仰渡候、金武按司も從琉球別ニ御奉公申儀者無御座候間、右商買入念可申付由、御請被爲申候處、于今其首尾散〻ニ罷成候、被仰付樣無心元存候事、
右段前〻銀子多差渡候事無御座候故、銀子過分ニ渡候ハ、、若六ケ敷事共出合候而者、爲後年之如何與存、御侘申候處、從　御國本、大國之儀者左樣ニハ有間敷與被◎〈闕字〉仰付、三百貫目之內外被差渡候處、致首尾候上者、畢竟爰許妄語之由被仰下候事、御尤奉

存候、先年金武罷上候刻、唐へ銀子千貫目可差渡之由可〈闕字〉仰付候、隨分御奉公可仕與存候而指渡候處、不致其首尾、何共咲止千萬奉存候事、

一子之年致渡唐候進貢船之買物糸・卷物、今度致上着候、以之外惡候、其上糸之中ニ物を入、糸をぬらしかゝらさる躰候を、高直ニ買取候、彼者共其科深重ニ候事、

右子之年渡唐之買物糸・卷物以之外惡候を高直ニ買取候儀、彼者共へ入念申付差渡候處、御買物散〻ニ御座候事、千萬迷惑仕候、就夫彼者共其科申付候事、但巨細別紙ニ有之、

一野村大學助於琉球、以與分糸可買取由、中城才苻官舍共へ堅被申渡候處、其定相破、才苻官舍共迄ニてかねを渡候儀、曲事千萬候、最前琉球にて此談合之刻、不致承引者共有之通相聞得候、畢竟琉球之內心可爲疎意かと存候、并代銀を糸差替ニ相渡候樣ニと、大學助被申渡候、是も相背事、

右野村大學助殿御下向之刻、渡唐御買物之仕樣、中城才苻官舍共へ、以與分糸可買取旨、又糸代銀指替ニ可仕由、雖被仰付候、相背候條、其科申付候事、付最前爰許ニて與分を以糸可買取由、御談合之刻不致承引者共別人ニ替可申候處、出船致遲〻、風をくれニ罷成候而者與存、差渡候事不念之至候事、

一中城主取として被差渡候處ニ、銀子之拂少も不存由申候、爲其之奉行ニ而候處不存儀、其科不輕候、殊ニ御物銀子者無分遣成、自分之商過分ニ仕候、其上御物銀唐へ過分ニ殘置候、就中先年御物取籠候者へ、かね相渡候儀、曲事深重ニ候事、

右中城主取として差渡候處、銀子之拂不存、并御物銀子過分ニ殘置候ニ付、曲事深重候間、其科申付候事、但巨細別紙ニ有之、

一戌年之進貢船にも銀子相殘、殊遣銀も多候、旁以仕樣惡候、譬者千貫目之銀子大分ニ候ニ付、手も不廻候者、半分にても買物者律儀ニ可相調處ニ、兩度共ニ少

分之御用物迄も散々のものを高直ニ買取候、〔早〕竟此方之御用を向後不被仰付様ニとの可爲隱謀與存候、金武按司・三司官何程ニ被存候哉、無覺束候事、

右戌之年進貢船ニ銀子相殘、殊ニ遣銀多候、旁以仕様惡敷候儀被仰下候、御尤奉存候間、役者共ニ其科申付候、就其向後〈闕字〉御用物不被〈闕字〉仰付様ニとの隱謀之由被〈闕字〉仰下候、曾以左様ニ無御座候へ共、御物方不致首尾上者、我々疎略之様ニ罷成、何共迷惑此事ニ候、唐へ御用之儀被　仰付間敷之由、迷惑千萬ニ奉存候、爰許より別ニ御奉公可仕事無御座候間、唐へ糸商買之御侘爲可申、去秋船差遣候、重而唐へ〈闕字〉御用之儀被　仰付候者、隨分御奉公可仕與奉存候、向後　大和御奉公方唐之手くたり〈闕字〉御爲ニ惡敷仕候ものハ、其科可申付候、又〈闕字〉御爲能御奉公仕候ものハ、其心付可申候、巨細者口上ニ伊東二右衞門殿・平田狩野介殿江申上候事、

勝連判

寛永十六年二月九日　　金武判

平田狩野介殿

伊東二右衞門殿

11

「光久公御譜中」

「寫正文在文庫」

覺　　寫

一子之秋走糸商買として、唐へ　大和之御物銀千貫目餘差渡候ニ付、別而中城爲主取差渡候處ニ、銀子之拂少も不存、又相定候與分も相破、糸代銀指替之儀も相背、殊ニ御物銀過分ニ殘置候、就夫曲事深重候間、闕所仕置候、當分大和へ罷居候間、身上之事ハ御下知次第ニ可申付覺悟候事、

一右同年平川通事・大嶺才苻渡唐之刻、相定候與分も相破、糸代銀差替之儀も相背、兩人之分別ニ而、渡間敷唐人へ過分ニ御物銀相渡候、其故を以糸之御法度稠罷成由候、其上殘銀四百貫目餘有之候事、右兩人爲仕出

通遂糺明候、曲事深重候間、闕所仕置候、身上之事者、歸朝仕候者、遠流可申付覺悟候事、

一右同年福治官舍・與那城官舍渡唐之刻、相定候與分も相破、糸代銀指替之儀も相背、御物銀過分ニ殘置、又平川通事・大嶺才苻兩人ニ而、渡間敷唐人へ御物銀相渡候刻、相役として不存由候、曲事深重候間、闕所仕置候、身上之事、福治官舍者久米嶋へ遠流、與那城官舍ハ與平屋嶋へ遠流申付候事、

一右同年安里才苻與分之談合之刻不致承引、其上相定候與分も相破、糸代銀指替之儀も相背、◎(闕字)又御物銀過分ニ殘置候事、曲事深重候間、闕所仕置候、身上之事者、歸朝仕候者、遠流可申付覺悟候事、

一右同年翁長脇通事・屋引大筆者・末吉大筆者・外間大筆者・舟越脇筆者渡唐之刻、相定候與分も相破、糸代銀指替之儀も相背、◎(闕字)又御物銀過分殘置候事、曲事深重候間、家屋敷召置寺領申付候事、

一戌之秋走中村かれ才苻渡唐之刻、御物銀殘置、遣銀も多候、旁以仕樣惡候事、曲事深重候間、闕所仕置候、當分大和へ罷居候間、身上之事者、御下知次第ニ可申付覺悟候事、

右之人數從唐歸帆之刻、則其科申付、御國本へ可申上處、唐へ御物銀過分ニ殘置候間、爲存人參候ハてハ首尾仕間敷與存、唐へ差渡候故延引仕候、右之樣子於御國本可然樣ニ御披露奉賴候、以上、

寛永十六年二月九日　　勝連判
　　金武判

平田狩野介殿
伊東二右衞門尉殿

12

「御文庫拾貳番箱三拾九卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

去歳八月廿五日之臺書、同十一月三日到來、欽拜誦仕候、抑琉球之儀、從往古屬　御當家之御幕下候、然處中比、或貴國被民羸、或遠嶋不如意之故、不縱志之所、如隣好之條役遲〻仕、不意義絶之樣罷成候之處、從　貴國

雖被催干戈勢候、固陋邦難成防戰、道既及破却之刻、前國主企蛙步致上洛、被降參候之處、　黄門家久尊君以御憐憫被爲　御赦免、加以如本之島〻被致拜領令安堵候、此等之　御厚恩不淺之段、到下〻迄曾以于今忘却無御座候、就中如先例之役義等可被　仰付之旨、謹而承知候、聊以不可有疎構候、猶萬縷讓于御兩使之舌頭、不能多毫候、誠恐誠惶敬白、

「朱カキ」
「寛永十六年」　二月十一日　　琉球國司　尚豐（花押）

進上　光久尊公

▽◎　琉球國司

進上　光久尊公　　尚豐　△

13　「御文庫拾二番箱三拾九卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

敬白　天罰靈社起請文之事

一光久様今度三州之被爲成任　太守職候間、諸事相隨　御下知、曾以不可存疎意候事、

一我〻儀若輩候之處、　家久様以御意卽位仕候、此等之　御厚恩不淺之事、于今忘却無御座候之事、

一琉球之儀自往古爲　薩州之附庸之條、諸事可相隨　御下知之處、中比依致無沙汰被成破却、始先國司・按司并侍衆ニ至迄被召寄　貴國之上者、再止歸國之思候之處、　黄門家久様以御哀憐被爲歸國、加之過分之御知行被宛行、開喜悅之眉候、以何如斯可奉謝　御厚恩候哉、永〻代〻奉對薩州之君、不可奉存疎意候之事、

一若球國之輩忘右之　御芳恩、企惡逆者有之而、縱國中雖致其旨同心、於愚拙者屬　薩州御幕下、毛頭不可相隨逆心之無道候之事、

一此靈社起請文之草案寫置、讓與子〻孫〻、奉對　薩州不可致不忠之旨相傳候之事、

右之旨若於僞申上者、

謹請散供再拜〻〻、夫惟寛永十六年己卯歳、月並者十二ケ月、日數者三百六十餘ケ日、撰吉日良辰而、致信心精誠請白、大施主等謹奉勸請忝上者、梵天　帝釋　四大天

王云ヒ「以下神名略ス」

豹尾◎　黄幡　歳德神　釋迦善逝　釋提桓因　奉宿却、四天　八天　十二天　三十三天　十二神將　七千夜叉　廿八部衆　第六天魔王　聖主　天之廿八宿　地之三十六禽　百億須旃　百億梵天帝釋　百億鐵圍山　百億閻魔法王　諸天　百億天衆　百億天人　百億天女　百億童子　百億大力夜叉　百億惡鬼　百億天上　百億閻浮提中所顯現之大小神祇、上者有頂天、下者到金輪際佛神、皆驚白言、堅牢地神　八海所備龍王龍衆　十王十躰俱生神　太山府君　司命司祿　冥官冥衆　有情非無情　辰星　南斗　北斗星　日曜星　破軍星　羅睺星　計都星　巨文星　明星　七夕星　八葉星　本命星　四方四佛　五方五佛　大聖摩利支尊天　太白神　太歳神　八將神　十二將神　天葬神　地葬神　阿豆知神　天神　地神　海木神　火神　金神　水神　風神　諸佛諸菩薩　諸善神　東方降三世明王　南方軍荼利夜叉明王　西方大威德夜叉明王　北方金剛夜叉明王　中央不動明王　大黒尊天　毘沙門天王　辨才天女　宇賀神　十五童子　三寶荒神　多婆羅天王　武答天神　頗梨采女　蛇毒氣神王　八王子　八萬四千六百五十餘神　金剛界七百餘尊　胎藏界五百餘尊　金剛藏王晃蛇帝主　大聖金剛童子　普天率土愛染明王　妙見菩薩　過去現在未來三世諸佛　一萬八千軍神　二萬八千軍神　三萬八千軍神　四萬八千軍神　五萬八千軍神　六萬八千軍神　七萬八千軍神　八萬八千軍神　九萬八千軍神　十萬八千軍神　二千八百師天童子　一萬燈明佛　二萬燈明佛　三萬燈明佛　藥師如来　寶生如来　無量壽佛　微妙身如来　文殊　普賢　觀音　勢至　十六善神　八萬四千夜叉神　忝日域崇廟天照太神宮四十末社　內宮　外宮　風宮　諸末社　八幡大菩薩　春日大明神　王城鎭守山王廿一社　根本中堂本尊　立塔諸堂諸坊之諸本尊薩埵　祇園牛頭天王　松尾大明神　吉田　立田　熱田（田脫カ）大明神　大原（野脫）大明神　稻荷大明神　賀茂下上大明神　三輪大明神　住吉大明神　三十番神　愛岩四所大權現　熊野三所大權現　九十九所權現　廣田大明神　金峯山權現　吉備宮津大明神　對馬天

王（羽黒カ）翼山大權現　葛城大權現　峯ゝ藏王權現　子守勝手大明神　梅宮大明神　法花廿八品　三藏法師　鞍馬毘沙門天　吉祥天女　雨寶童子　關東守護神　伊豆箱根兩所權現　三嶋大明神　鹿嶋大明神　富士大權現　白山妙理權現　立山大菩薩　諏（訪カ）方上下大明神　出雲大社大明神　多賀大明神　御靈八所大明神、殊者氏神、惣者大日本國中六十六ヶ國大社、二千小社、五百九十二所大小神祇　龍樹菩薩　虛空菩薩　梅檀香菩薩　大病神　八萬四千鬼神　大恩神　歲破神　天蘇神　大疫神　大歲神　夜氣神　妙鬼神　六百五十餘神　金山六十萬鬼神　刀八毘沙門天王　父天狗大郎房眷屬　九億四萬三千四百九十餘神　善貳童子　八所大明神　善害坊　次郎坊　八萬四千眷屬　飯繩大明神　四十四萬一千眷屬　大天魔三萬三千　小天狗三萬三千眷屬　智羅天狗　十二八天狗等、日域中山ゝ峯ゝ嶽ゝ所居住大天狗　小天狗等、作群集而正路之旨照鑑給、別者琉球之鎭守七宮大權現并辨才天女十五童子御部類眷屬　若僞心於在之、立處受白癩之重病八萬四千毛吼、四十二之骨節、日ゝ夜ゝ苦病無止、深厚蒙御罰、弓矢冥加未盡、佛神三寶雖作祈願、不可叶、於後世者、墮八寒八熱阿鼻無間大地獄、到未來永劫不可有浮期者也、

仍靈社上卷起請文如件、

寛永十六年己卯二月十一日　琉球國司　◎（花押）（血判）　尙豐（判）

「末紙ニアリ」
靈社起請文

14

「在三拾九卷中」「光久公御譜中在リ」

舊多御書到來、謹拜覽仕候、然者薩隅日三州之被爲成任太守職、珎重多幸目出度奉存候、到此邦迄祝泰平安堵仕候、何幸如之哉、至祝至禱、因茲御太刀一腰・御馬一疋黃金壹枚、珎肴三種・御樽十荷・御茶一壺、欽拜受奉忝存候、猶委曲御兩使可有演說候之條、致省略候、誠恐誠惶敬白、

「朱カキ」
「寛永十六年」
二月十一日　琉球國司　◎（花押）　尙豐（判）

進上　光久尊公

▽◎　　琉球國司

進上　光久尊公　　尚豐　△

15

「御文庫拾九番箱三拾三巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

先日預御狀、立野御事、不斷光院檀那之儀候へ共、種子嶋へハ他宗無之間、御祈念なとも不罷成、御老年之儀ニ候間、別之御宗旨ニ而者御心持惡敷候條、法華宗ニ被爲成度由被仰候哉、其段自左近殿貴老迄御内意之旨、伺御意候處、法華宗ニ被爲成度由候ハヽ、其段可然被　思召候由候、如御存きりしたん宗之儀者、他宗ニ爲成由〔十候て分〕も、本心者不相替由皆〻申候間、左様之儀者不相知事ニ候得共、先法華宗ニ被爲成由候へハ、本心者如何様ニも候へ、當時者法華宗にて候間、可然仕合ニ候、尤本心之被相替眞宗を法華宗ニ而候へハ、無申事候、兎角先法華宗ニ被爲〔出〕候へハ可然由　御意候間、其段左近殿へ御内談候て尤ニ候、尚期後音候、恐惶謹言、

「宋カキ」「寛永十六年」三月九日　　伊勢兵部少輔〔花押〕貞昌〔判〕

川上左近將監様　參人〻御中

▽◎　川上左將様　參　　貞昌

伊勢兵部少輔　△

「末紙ニアリ」寛永十六年御狀但立野法花宗ニ被爲成候儀也、

16

「御文庫拾九番箱三拾四巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

已上

一書令啓候、然者從　薩州様被　仰出候、相良殿此前者大略自出水舟にて被成上洛候、就其米之津へ屋敷一ヶ所被進置候、今程者遮而あなたの用ニも不入候哉、自然まきれ者なと罷居儀も可有之候間、先彼屋敷之儀者被仰理候而、此方へ被請取候而尤ニ　思召之由候、又鹿兒嶋へも一ヶ所御座候、是も先此方へ被請取候様ニと〈闕字〉御意候、能様可有御談合候、先年も從其許彼屋敷之儀、先〻此方へ御請取候而可然候ハん由被仰越候つれ共、あなたの心持如何候ハんかと候て、先不被仰候つる、彼屋敷之儀

者、あなたより懇望にて、卽屋作なとも結構ニさせられ、數寄屋迄立候て、　惟新樣　黃門樣へ內藏助殿御茶進上被申候つる、其後大風ニ而悉吹つぶし、それより以來者作事も無之候、世上弥在江戶題目ニ罷成、左兵衞殿御內儀も在江戶ニ而被爲煩、遠行候、左兵衞尉殿儀も御同前ニ候、其後今之壹岐守殿御內儀、在江戶之內藏助父子之儀も、替ゝ在江戶之躰ニ御座候故、其元之屋敷遮而不入與相見得候、乍去求麻よりの使なとハ、彼屋敷へ宿被仕由相聞得候、我ゝ存候者、出水も鹿兒嶋も一度ニ御取返候而者、あなたの心持如何ニ候間、出水之儀者先御內談ニ而被成御請取候ハヽ、鹿兒嶋之屋敷者、若あなたより被申樣歟候ハん間、今ちと被聞召合候へかし與存候、心中者更不知儀候へ共、從相良殿者被對　御當家、少も無別儀との儀ニ而、向後◎(闕字)御家を可被賴入與之事ニ候間、其御心得可入候、彼家之儀者、從本ゝ信心專之儀ニ候間、ていうす宗なと隱置事者有之間敷與存候、乍去屋敷守なと分もなき者共ニ而、若左樣之儀も候ハん哉、其段被仰理、屋敷守之者へ能ゝ被仰付候樣ニと候ハヽ、其上ニ而あなたより被仰樣可有之と存候、兎角從此方之被仰樣、能ゝ御念可入候、從其元被仰越候ハヽ、彼屋敷ニ人を被置候而、御國之樣を見聞させられへく候間、屋敷者被召返候而可然候ハんかとの儀にて候つる、其時分爰許ニ而之出合者、物を被聞候ハん與存候ハヽ、あなかち屋敷無之候而も、商人之往來者每日有之儀ニ候間、不及御用心候、其上伊東殿、秋月殿肥後なとよりも被見聞候事者可有之候條、其御用心者不罷成候、江戶又豐後之御目付衆より者、國ゝへ物見を被遣置之由候、其許へも不斷可罷在候、御國之行儀さへ御念入候ハヽ、縱如何樣之事を御沙汰ニ而も、可被仰分候、左樣之段御油斷候而何事も與所ニ者知間敷なとゝ思召、後ゝたゝり候樣成儀者、能ゝ御遠慮可入事ニ候、如此候時者、必相良殿屋敷を一ヶ所被召返候とて、それ故ニ物之隱候ハんニ而も有之間敷候、自然　黃門樣之御時ニ相替、御隔心之樣ニ被成候なとゝ、從彼方被存候ハヽ、結句如何候ハん哉、右

ニ如申、先出水之屋敷之儀者、あなたへ被仰理、當時不入様ニ候間、御請取候而、鹿兒嶋之屋敷者、あなたよりの被申様被聞召合候而者如可候ハん哉、若き　殿様之被仰儀ニ候間、先　御意之旨申越候、我ゝ存旨、於御同意者重而其段可承候、若又子細共有之儀候ハ、不及申候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」
三月十二日　　伊勢兵部少輔◎(花押)
貞昌(判)
下野守
久元(判)◎(花押)

三原左衛門様
鎌田出雲様
山田民部少様
川上將監様
彈正大弼様
人々御中

「寛永十六七年比カ」

17

「御文庫拾二番箱四拾卷中」

今度爲　上使、佐ゝ權兵衛被仰付、并御鷹之鶴被遣候儀

忝被存付而、被差越使者候、右之趣達　上聞候處、使者御前へ被　召出、無殘所仕合候、猶可述口上候、恐ゝ謹言、

「十六年」
三月十六日　　阿部豐後守◎(花押)
忠秋(判)
松平伊豆守◎(花押)
信綱(判)

松平薩广守殿

▽◎　松平薩广守殿　　松平伊豆守
阿部豐後守
「光久公御譜中ニ無之」　△

18

「載殉國名數中」

寛永十六年己卯
四月九日、横山豐前守殉死、汾陽理心家臣にて

19

「光久公御譜中」

江戸公儀御評定所伊勢兵部少輔持參被申候、又琉球之

様子爲存由候而、竹下助太夫付候而參候、先前之日御用之間一人可被罷出由候而、兵部被罷出候處、琉球之儀御尋ニ付如此候、

従琉球渡唐之進貢船積荷之覺

一唐ニ而買物之代者銀子一色積候而渡申候事、付おくの積物者唐ニて琉球之遣物ニ成由申候事、

一芭蕉○布之事、

一上布之事、

一眞苧白布之事、

一金銀之扇・なゝの扇之事、

一筆之事、

一小刀之事、

一かめのこうの事、

一かつおのふしの事、

一燒酒之事、

一うにの鹽からの事、

一しよくの鹽からの事、

一ふくりやうの事、

一木くらけの事、

一紙摺具之事、

一ほらの貝之事、

一干鮹之事、

一あらふうなきの事、

一鹽漬ふたの事、

一つのまたのりの事、

一硫黄之事

一やこ貝のからの事、

一綿之事、

一馬之尾之事、

一銅之事、

一鞍一口之事、

一金之屏風二双之事、

一馬拾疋之事、

右之外前ゝハ渡り候へ共、于今者御法度之故相留候物

之分、
一太刀之事、
一長刀之事、
一鑓之事、
一添さしの事、
一糸おとしの腹巻一領・同甲之事、
右之五色ハ近年相留申候、
　　從唐琉球へ積來り候荷物之覺
一生糸之事、
一巻物少ゝ之事、但さやちりめんなとの類、
一藥種少之事、
一書物少ゝ之事、
一椀・折敷・盆、其外遣道具之類あつらへ候へは、少ッ
、者參候事、
一皿茶碗之事、
一墨之事、但あしく候、
一せん香之類之事
一しやんひんの事、
一唐扇之事、
一もうせんの事、
一とうたんの事、
以上
寛永拾六年卯四月廿日
右書物御公儀へ被召留候、

20
「光久公御譜中」
態申候、吉利織部佑へ□(定傳カ)慥承屆候、彌其許入念候而、可被爲聞候、仍我等御暇不出候間、如何與存事候、其方煩何程候哉、涯分養生尤候、少能候由承候間、我等滿足存候、其元式部若輩候間、氣遣存候、貴所存寄之通被申候而尤候、賴入候、恐ゝ謹言、
「朱カキ」
「寛永十六年」四月廿四日　　光久(御判)○(花押)
彈正大弼殿

21 『兒玉利昌譜中』

寛永十六年己卯五月二十日遂病卒、年六十七、葬于興國寺、法號壽山源量居士、而世相傳、其在世時自命畫工、寫其眞像、請重位先生、題之歌云、

22 『兒玉氏家藏掛軸』

天地をふきわかつ風にをく露の
いろかへぬまそわかすかたなる

壽山源量居士

23 『眞本兒玉氏家藏』

五百疋御茶とふのためにもたせ申候、
さても〳〵我等かきハをこそ筑州『利昌』を頼可申與、頼母敷存候而罷居候處ニ、我よりさきに立せ給ふ事、誠に〳〵力をおとし申候、此後者世になからへても誰を頼可申かと、心細く存候、『根占氏之女』御懐様さこそ御なけきにて候覽、御心得頼存候、恐々謹言、

『寛永十六年』五月廿日　重位（花押）

『時年七十九歳』東郷肥前入道

『時年三十九歳』兒玉四郎兵衛尉『利實』殿

参人々御中

24 「光久公御譜中」

寛永十六己卯歳四月二十九日、以阿部豐後守忠秋爲　上使、賜告惠給御時服百領・白銀千葉、而后光久登　營奉謝之、　家光公口自謂、拜領御馬一匹、五月七日發于江戸、從大坂駕舟、著日州細島津、六月十六日歸麗府、家老伊勢貞昌從駕也、卽馳家臣北郷佐渡久加于武城、奉謝賜暇而歸州之辱、獻御肴・琉球酒・絹若干卷、

25 「北郷久加譜中」

寛永十六年己卯、　太守光久公御家督之後、初賜暇入國、久加爲御禮使詣武城、賜單衣四而歸國、在江戸之中被補伊集院地頭職矣、北郷吉左衛門忠盈從之、

26 「光久公御譜中」

薩摩・大隅・日州諸縣郡年行事職之儀、　聖護院御門跡以御許容被仰付、御書物頂戴之上者、大峯修行毎年無懈怠相勤、當家之祈念可被抽誠精者也、仍狀如件、

寛永十六年六月廿四日　　侍從　光久〔御判〕○〔花押〕

飯隈山

仙光坊

27 「御文庫拾二番箱三拾九卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

欽奉呈一翰候、抑　御相續之爲御祝儀、御太刀一腰・御馬一疋奉進上之候、并不腆之御祝物錄于別楮候、猶委曲北谷按司有演說候之間、奉省略候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」「寛永十六年」六月廿四日　　琉球國司　尚豐〔判〕◎〔花押〕

進上　光久尊公

▽◎

琉球國司

進上　光久尊公　　尚豐　△

28 「正文在文庫」

進上

香餅　一箱

壽帶香　一箱

玉蘭香　一箱

燒酎　二壺

漬物　二壺

已上

29 「御文庫拾九番箱三拾三卷中」

靈社起請文前書之事

一上樣至御兄弟樣ニ、又者下々ニ至迄、咒詛調伏之儀、曾以申間敷事、

一殿樣ヨリ自然咒詛調伏之儀、被　仰付候時分ハ相勤可申候、於餘ニ者曾申間敷事、

一入峯之時分、於峯中咒詛調伏之儀、又者種々惡心之旨御座有間敷事、

右之旨條〻相違之儀於有之者、蒙神罰冥罰可申、故

二前書如件、

▽◎「牛王神文略」

敬白天罰靈社上卷起請文之事

謹請散供、再拜〻〻、惟當來年號寛永十六年太歳己卯六月一日月並者十三箇月、日數凡三百八十餘箇日、撰定吉日良辰致信心、謹奉勸請、掛忝百億須旃山　百億鐵圍山旃樓山摩訶　旃樓山等　各奉始梵天　帝釋　四大天王　日光菩薩　月光菩薩　諸宿曜等欲界　色界處有天王天衆三千星宿却　四天　八天　十二天　卅三天　諸天　三寶廿八部衆　七曜九曜　南斗　北斗　三臺玉　廿幻星　百官星五鎮大星　一切國主星　廿八宿南閻　俘提十六大國五百中國　十千小國元量　粟散國　中至于山川谿谷　大海江河等、仁在〻天童部　金剛部　聲聞部　緣覺部　如來部　諸夜叉部　天神　地神等　悉混亂而　奉請敬焉下者堅牢地神　上者卅六禽　八海所栖龍王　龍衆　談魔王界焰魔法王　十王十躰俱生神將　太山府君　司命司祿摩利支尊天　天一神太白神　太歳神　八將神　十二神將十二月將　十二天將　天荒神　地荒神　阿豆神　山神海神　風神　法華　守護　十羅刹女　卅番神　般若守護六善神　五大力菩薩　東方降三世明王　同提頭吒天王八萬四千眷屬　南方軍荼利夜叉明王　七萬七千眷屬　西萬大威德明王　同毘留博叉天王　六萬六千眷屬　北方金剛夜叉明王　同吠室羅摩那耶城　毘沙門天王　九萬九千眷屬　中央大日大聖不動明王　十萬八千眷屬　愛染明王焉悉沙摩明王　金剛藏王　深砂太王　大聖金剛童子　大菩薩　功德天王　大吉祥天　大聖歡喜天　荒神　麁亂神多婆天王　那行頭佐　毘那耶迦等、九億四萬三千四百九十之荒神　特者九萬八千軍神乃至　十萬八千軍神　二千八百師天童子　惣而普天擧土　五道具官有勢　無勢　殊者、法報應三身如來　金剛界七百餘尊　胎藏界五百餘尊二萬燈明佛　三萬灯明佛　過去千佛　現在千佛　未來千佛　惣而、十萬恒沙諸佛　善逝普賢　文殊觀音　地藏龍樹藥王　藥上梵盡意得大勢不休息大力法　誦常燒妙見音寺乃至　微塵數菩薩　摩訶薩埵　悉奉勸請　別而日城崇

朝天照太神　內外兩宮　諸末社等、八幡大菩薩　王城鎭守　賀茂下上　松尾　平野　稻荷　祇薗　春日　住吉　丹生　貴布禰　天滿　太自在天神　御賴眷屬　吉田　廣田　立田　梅宮　山王廿一社、多賀大社　諸神　赤山　新羅大明神三保五所　八所大明神　護法善神　建部兵主三上　白髻　諸大明神　大和三輪　石神　布留水分出雲大社　備前　備中　吉備津宮　宇佐八幡宮　嚴嶋等、諸大明神　熊野三社十二所權現　若一王子九十九所　一萬金剛童子十萬眷屬　山內諸神　金峯山藏王權現　三嶋　鹿嶋　熱田八劔　諏方上下大明神　子守勝手　殊者　關東守護　伊豆　箱根兩所權現　富士山大權現　立山大菩薩　白山妙理大權現　月山　朝界羽山　羽黑　特者　飯綱大權現　油日大明神　河合牛天王　檜尾明神　櫻宮和光利物　荒木一宮大明神　物(惣)而吾國六十餘州　郡數五百九十二鄕數四千三百四十二鄕等、所有影向勸請之諸神祇衆、十七萬一千卅一社　上者、有頂天　下者、金輪際　至迄悉奉請驚兼亦魔王　魔民者雖爲國家之外道　歸邪正一如无鬼神横道故先　比叡山大天狗之父好善月光王十萬五千眷屬熊野山大天狗之母金毘羅赤女九萬九千眷屬　愛宕山太郎王子榮術房九億四萬三千四百九十眷屬　鞍馬山榮威僧正房六萬八千眷(ママ)　筑波山戶隱神通智羅天狗四十四萬一千眷屬　富士箱根九郎王子尊俗天狗五萬千眷屬　白山立山通達天狗六萬一千眷屬　羽黑山伯耆之命師天狗七萬三千眷屬　相模大山彥山仁迷天狗五萬四千眷屬　日光淺間嶽飛長天狗二萬五千眷屬　金峯山道俗天狗八萬三千眷屬　其外東方八萬四千眷屬　南方八萬四千天狗　西方八萬四千天狗　北方八萬四千天狗　中央八萬四千天狗　善皆房善智房　摩訶智房　大天魄　三千三百視目駒刑酒王子等至迄、各令招請皆指集而垂照覽鑑正路給然則此旨僞私曲有之者、今生而者白癩黑癩、重病八萬四千毛孔　四十二骨節　蒙御罰　弓箭冥加盡七代　子〻孫〻至迄　沒終來世者爲先等　活地獄衆合獄　叫喚大叫喚焦熱　大焦熱无間地獄被墮　右而雖經未來永却深出事不可有者也、

仍靈社上卷起請文狀如件、

△

30

寛永十六年己卯六月吉祥日

連光院〔判〕◎〔花押〕

「雑抄」

光久公御家督以後、初而御下國之節被　仰出候條々

一今度歸國以前、　於　御城　公方様御直ニ被〈〔闕字〕仰聞候趣者、國中不奢、萬花麗之儀無之様ニ可申付之旨、御諚候之間、各可得其意事、

一國中諸沙汰之儀、　黄門様御時ニ不相替様可申付事、

一諸士諸事氣任之儀於有之者、曲事之段稠可申付事、

一きりしたん宗之儀、當家代々禁制候處、近年者天下之御法度稠被仰出候〈ニ付、弥令其沙汰候間、此宗躰之儀、片時も不差置、不可有緩事、

一於江戸被　仰出御法度之趣、不相背様ニ連々心懸可入念事、

一自然天下御弓箭共於有之者、別而可致御奉公候間、諸士連々武具馬鞍等之嗜、軍役可相勤心懸可爲肝要事、

一酒女之儀、能々可相嗜事、

一黄門様被　仰置候儀不相違可申付候、自然其旨相背之輩於有之者、少も無用捨其科可申付候間、能々可承置候事、

一諸士知行ニ相懸出物、未進無之様ニ可相調儀肝要候、然者連々不入儀ニ〔貫〕米錢、花麗かましき儀一切令停止、出物・軍役等可相勤心懸不可致油斷事、

「朱カキ「江戸御條書之内」」

「朱」

○一刀之尺貳尺八寸より上、脇差之尺壹尺八寸ゟ上、同朱〔鞘〕大かくつハの事、

「朱」

○一下々のもの下〔髭〕・つり〔髭〕并〔額〕大なて〔つけ〕大そりさけの事、

「〃」

○一小者共袖へり上下之帶絹之事、

「〃」

○一結徒黨致荷擔、或妨をなし、或落書張文、博奕、不行儀之好色、其外ニ不似合事業不可仕事、

「〃」

○一大身小身共に自分用所之外、買置商賣利潤〔之構不可致〕事、

「〃」
○一陸若黨衣類、さや・ちりめん・平嶋・羽二重・絹・紬、布・木綿之外、停止之事、付弓鐵炮之者絹・紬、布・木綿之外、不可着之、小者中間衣類萬可用候事、

「〃」
○一物頭諸役人萬事ニ付而不可致依怙、并諸役者其外之品々常ニ致吟味、不可油斷事、

「〃」
○一上意之趣、縱如何樣之〔者〕申渡といふ共、不可違背事、

右〔条〕々無緩疎可相守者也、

寛永十六年七月朔日

「此御條書、光久公御譜中ニ在リ、糺合ス」

31

「光久公御譜中」

猶以從讃岐守樣、度々御念比之儀共被仰聞候間、御書を以被仰候而可然存候、以上、

急度申入候、

一太田備中守殿長崎へ御下ニ付而、何そ從御國御馳走之儀も御座候ハヽ可申遣由、讃岐守樣へ得御内意候得ハ、我等へ御捻被下候、則差下申候間、御覽候而可有御披露候、備中守殿御打立、來ル五日六日與申候事、

一一昨日以前、細川越中殿へ參候へハ、備中守殿長崎へ御下之儀存候哉與、御尋候、内々及承候通申上候得ハ、是者がりうた船後年者不參候而も、御事闕ニ者有間敷與御沙汰候上にて被遣、長崎にても被聞召合、何樣候て可相究與爲被聞召由候、其外別ニ者題目之儀無之與御物語候、色々被仰候儀御座候得共、書狀ニてハ難申述候、二阿波守殿下ニ巨細可申入事、

一御國之古城之屏・矢藏之道具、其城々之近邊ニ爲被召置由申候、誠にて候哉與越中殿御尋候、我等申上候ハ、先年城割申候而ゟ後、終ニ屏・矢倉之道具用意爲仕儀無御座與申候へハ、横目衆申候間、別儀有間敷與重而被仰聞候、大隅守存生之時分、國府與申所之城を被成　御免候、其時被申上候ハ、兩口ニ門二重ッヽたて可申候、屏なとかけ申城にてハ無御座由被申上候ニ付而、門之道具國府與申所へ用意仕置候、左樣成を申候

哉、別ニハ不存由申候、扨者其儀〔候て〕○ニて候覽與被仰候事、

一高岡・大口・出水なとゝ古城之門道具、爲被召置儀も哉候覽、御沙汰候而其御覺語可被成事、

一九月之御祝言ニ付而從諸大名之御進物ハ、八月之末ニあかり申之由、物沙汰候、此方之御進物之儀京都へ申遣候へハ、從其許御到來を待相調申候ハヽ、此方之かけ合ニ罷成間敷候、題目から織之類、從諸大名も御買せ可被成候、一刻も早ゝ調度由申來候間、乍理口御夜之物五ツ之内、から織にて貳ツ、染物にて一ツ、金糸入之唐物にて貳ツ、御枕・御ふとんハ、其相應ニ宗順なとゝ御談合候而、内ゝ可被調下之由申上せ候、左樣ニ申内ニ、從其元も可有御指圖與存候、未被仰上候ハヽ、被仰上尤存候事、

一此許御仕銀無之ニ付而、他へ借銀仕候得ハ、千兩ニ付而一月ニ拾兩ツヽ之利足にて候間、御私之小判金貳千三佰兩程借用申上候、今度狩野法眼兄弟へ銀子三百枚ツヽ、不被下候而ハ成合申間敷與出合候、勿論方ゝ承合候而、此分ニ談合申候、少成共銀子ハ追ゝ御上せ可被成候、先日吉田次郎兵衛殿歸國ニも其由申入候、定而可相達候事、

一從松平河内守殿御狀、去月晦日之畫請取申候、只今進上申候間、御披露可然候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」七月三日　　下野守　久元〔判〕○〔花押〕

三原左衞門佐樣
鎌田出雲守樣
山田民部少輔樣
伊勢兵部少輔樣
河上左近將監樣
彈正大弼樣
人ゝ御中

32

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

尙ゝ一昨日以飛脚如申入候、御前樣御氣色之儀、弥相替儀無御座候、次第ニ御快氣候、乍去御藥者曾而

不參候、次ニハ備中守殿御下ニ付而、長崎へ家老衆被指出儀、一昨日も申遣候へ共、越中守殿被入御念候間、又〻申入候〔間〕◎以上、又申候、御條書之寫二ツ進入申候、以上、

一書令啓候、仍昨日暮時分、上御屋敷へ從細川越中守殿御使被下候、我等者宿へ罷在、新納右衞門佐殿被爲出合候へハ、今日諸大名　御城へ召候而被〈◎〔闕字〕仰出候者、今度太田備中守殿長崎へ被爲下候ニ付而、御條書出申候、惣而九州之御仕置與聞得候與被仰聞候間、今朝越州へ致伺公候へハ、御條書之寫早朝我等所へ被遣候、樣子者中國之大名衆之家老衆〔與〕◎者室津・上之關へ被出合、可被相待候、長崎近國之衆者、長崎へ可被參候由候間、從肥後も家老衆一人ニ、よく物覺なと候て慥物を申人被相付候而、可被遣之由候、從此方も得其意、可申越之由候、かれうた船當年よりハ御法度ニ被仰付候通被仰聞候、御條書者道春被讀候を被聞召候、何そ口能無之由事細ニ被仰聞、只今肥後へ飛脚被遣候、兵少老へも右之段被仰遣之由候而、其狀被成御見候、定肥後よりの到來はやく可有御座與存候、當時之御咄ニ　御城方之御沙汰候かれうた船長崎へ三百艘參候、是者南蠻國へ弓箭出合候て、日本方を引候由、依稠沙汰、爲參之由申候、小笠原右近殿御咄ニ、かれうた船七十二艘參候與御申候、爰元町方之沙汰ニも唐物殊外下直候由申候、ケ樣ニ色〻申候へ共、かれうた船一艘も不參儀必定之由被仰候、とかく當年かれうた參はすにて候、其子細者、去年參候かれうた船より、主取分之者を被召留候、此者を捨置儀にてハ有間敷與聞得候なとゝ、種〻被入御念候而承候、重而以御直書御禮被仰候而尤ニ奉存候、將又備中守殿此地御打立之儀、三日中與申候、道中もいかにもゆる〳〵と御出候由、これも從越中守殿被仰聞候、猶承付候儀者重而可申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」七月五日　　下野守　久元〔判〕◎〔花押〕

彈正大弼樣

川上左近將監様
山田民部少輔様
鎌田出雲守様
伊勢兵部少輔様
三原左衛門佐様　人々御中

彈正大弼様
川上左近將監様　久元
伊勢兵部少輔様
太田備中守殿長崎へ御下之儀也、
下野守

「寛永十六年比カ」

33

「御文庫拾二番箱三拾九巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

存所へ人を下候間申入候、

一上様弥御息災、此比者古之ことくニ替事無之と申程に御入候事、

一七月四日諸大名不殘被召出、如此書付被仰出候、口上茂無御座候、此書付を道春讀申候迄ニ而候つる事、

一太田備中殿爲上使、長崎へ被遣候、一兩日之内ニ爰元を被立、かれうた、以來不參様ニ、當年長崎ニ而被仰付候御用與聞候、尚又九州衆家老衆長崎へ被召寄、右之御書付之通被仰渡候筈ニ而候、中國・四國之衆へハ室・上關兩所ニ而御申渡候由候、就其我等家老之者、今一人若キもの相添、長崎へ參候へと申付國へ遣候、備中殿御路次を緩ゝ與被參候事、

一薩摩殿へ以書狀可申入候へ共、此使事之外急下候間、貴殿まて如此候事、

一其元へ御下着之御左右承度候、船中御難儀由、更共ほそ嶋へ無事ニ御着之儀者、下野殿御物語ニて承候、かご嶋へ御着之御左右承度候事、

一爰元替儀無之候事、

一我等弟立允（細川立孝）事、頓而召下　御目見をさせ、三齋（忠興）一代者

唯今之ことく、一代之後者都合六萬石ニ知行を仕、役儀以下此中ニ不相易埒明申候、三齋も滿足ニて候、加様ニ仕事も如何與存候へ共、事之外之不便かりにて候故、無是非右之通候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」七月五日　　細越中（忠利）（花押）

伊勢兵部殿御宿所

▽◎

七月五日　　細越中

伊勢兵部殿　　△

34

「御文庫廿三番箱廿一卷中寫」「光久公御譜中ニアリ」

條々

一日本國被成御制禁きりしたん宗門之儀、乍存其趣弘彼法者、于今密々差渡之事、

一宗門之族結徒黨企邪儀、則誅罪之事、

一伴天連同宗旨之者、かくれ居所へ從彼國つゝけのもの送あたふる事、

右因茲自今以後哦流「カルタ」陀渡海之儀被停止之早、此上若於差渡者、破却其船、并乗來者悉可處斬罪之處被　仰出也、仍執達如件、

寛永十六年七月五日　　對馬守
豐後守
伊豆守
加賀守
讃岐守
大炊頭
掃部頭

上使大田備中守殿於長崎南蠻人へ被仰渡條目也、

35

「光久公御譜中」

條々　太田備中守爲上使長崎へ被召下、諸大名衆へ被　仰出候、

一貴理師旦宗門雖爲御制禁、今以後彼國密々伴天連を指渡ニ付而、かれうた船着岸之義御停止之事、

一領内浦々ニ常々慥成者を付置、不審有之船來におゐてハ、入念可相改之、自然吳國船着岸之時者、從先年如御定、はやく船中之人數を改、陸地へ不上して、早速長崎へ可送遣之事、

一自然不審成者船乘來、又者密々其船中之者を陸地へ上之輩あらハ可申出之、隨訴人之高下、急度御褒美可被下之、若以屬詫於賴者、其約束之一倍可被下事、

右條々所被　仰出也、仍執達如件、

寛永十六年七月五日

對馬守
豐後守
伊豆守

36

「光久公御譜中」

覺

黃門樣御袖判之御條書之內

一藏入并諸役人算用之上を以、押米・押銀等之上納物之儀、先年已來より干今不相濟衆、曲事甚重候之間、任先例於無沙汰之人者、知行可召上事、

一於算用所日記を不出衆、自由之至曲事ニ候間、右同前之曖たるへき事、

如右之先年より被仰出候間、此節相究、或上納物延引、或算用帳不出衆、當時役ニかゝり罷居候ハヽ、早々役を被召離、上納物算用帳八朔より內ニ相濟候樣ニ可被仰渡候、若於緩者右兩條之如御意趣、可有其沙汰者也、

寛永十六年七月八日

民部少輔〔判〕（花押）
左衞門佐〔判〕（花押）
治部少輔〔判〕（花押）
兵部少輔〔判〕（花押）
因幡守〔判〕（花押）
彈正大弼〔判〕（花押）

喜入攝津守殿

新納加賀守殿

37

「光久公御譜中」

覺

御荷内所銀子申請候衆、利足三わり付たるへき由被　仰出候條、如其堅可被仰付者也、

寛永十六歳七月十一日

三原左衞門佐〔○〕(印)

山田民部少輔〔○〕(印)

伊勢兵部少輔〔□〕(印)

顯娃主膳正殿

新納勘解由次官殿

38

「光久公御譜中」

猶〻右衞門佐如此中、諸事其元へ物奉行手前ニ物入候間、不入儀なと無之樣可申候、諸事役人緩成儀、其外抑留なと仕候而、御物可入儀あるへく候、左樣之所不指置可申樣ニ、下野前ゟ右衞門佐へ可被爲申聞候、用捨無之樣ニ可被申候、以上、

態申候、其元御年寄衆、兩越中殿・久志元式部少輔殿ニ節〻參候而、可有得其意候、又承付儀共無由斷被聞合、餘人ニをとらす可被仕候、又下屋敷之前之儀いかゝ候哉、無心元候、樣子承度候、又下屋敷之普請如申置候、無油斷可被申付候、恐〻謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」七月十四日　光久〔御判〕○(花押)

下野守殿

39

「御文庫拾二番箱三拾九卷中」「光久公御譜中ニ至リ」

尊書致拜見候、如仰今度者御仕合能御暇被遣、海路無吳儀至御國、被成御着之由、奉得其意候、就夫各迄本郷佐渡守方を以被仰入、御國之肴・琉球酒并卷物御進上被成候、阿部對馬守披露之處、御機嫌之旨御座候、將又其表別條無御座候由、珎重存候、貴殿御代罷成始而之御入國、目出度奉存候、委曲期後喜之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」七月廿六日　　酒井讃岐守
忠勝（判）◎（花押）

松平薩广守様
尊報

▽◎松平薩广守様
尊報

〆酒井讃岐守　△

40

「光久公御譜中ニ在リ」

一今度琉球へ爲御使罷渡、唐へ參候銀子之儀委申渡候、就其從琉球使者兩人被罷渡、其首尾被申候事、

一琉球嶋ゝ不殘見廻申候而、繪圖細ニ仕置候、前琉球より參候繪圖ニ少替申候事、

一國司へ罷出候時進物、前ゝゟ被參候衆之進物、承合相調申候、別紙ニ有、

一琉球へ參着ニ國司より米・野菜・薪・味噌・しほ御取合被遣候へ共、請取不申候、

一國司我ゝ宿へ御見廻可被成由被仰候、色ゝ斟酌申候へ共、前ゝ被罷渡候衆へも御出被成候間、是非御出可被成由候、左様ニ候へハ、前ゝ衆も御振舞被成由候間、同前ニ振舞申候、五ツめ迄ミかきもの仕候、其時國司より銀子拾五枚・燒酒壺貳ツ被下候、

一琉球出船之時、國司より上布三丸・はせを布廿端・菓子盆三束・燒酒貳壺被下候、

一道嶋へ船懸り仕、逼留之内嶋ゝ見廻申候、間切ゝニ假屋御座候、こと〳〵敷大家作ニて候、ケ様之大宿入事有間敷候間、ほそめ可被申由、取納奉行有川五左衞門殿へ申置候、

一大嶋へ廣さ貳三尺之板可有之桑有之由申候間、厚さ三寸ツヽニとらせ、船一艘ニ一枚ツヽ、さし荷ニて御上せ有へき由申置候、付七八端之船ほはしらニなるへき程之桑有之由申候間、能ゝ可被立置由申置候、

「朱カキ」
「十六年」卯七月廿日　　伊東二右衞門尉

41

「光久公御譜中」

同八月三日、太田備中守佩七月五日之奉書、到肥長崎、

示嚴令於哦流(化)人、禁日本渡楫之事、且招九州諸家之家老、諭此旨、因家老川上因幡久國・使役鎌田源左衞門政有謁長崎、

42

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニアリ」

以上

去月廿八日之御狀今朝到來、具令拜見候、

一去四月、八重山嶋之內はてるまへ、何所共不知小舟壹艘ニ人二人乘來候、彼者共琉球ゟ參次第、長崎御奉行衆迄可被成御披露由候處、はや此舟之沙汰世上ニ有之由候條、先可被成御披露由候而、巨細被仰越候、御尤ニ存候、其元之儀何事も隱間敷樣子と承及候、則鎌(ナシ)〔田〕源左殿へ致相談、自琉球參候條書之內、吳國舟之儀迄を書拔候て、今日政所へ持參申候、三郎左衞門尉殿・善兵衞尉殿直ニ被聞召、いかにも細ニ被成御尋、又先年琉球へ參候南蠻人口柄之樣子共、具ニ御物語被成候、呂宋ゟハ先琉球へ宗旨を廣め候て足次ニいたし、日本をうかゝい可申與談合之由申候、其筋ニ而于今人を渡し候らん、舟之繪圖者呂宋舟ニ而候、南蠻人も近年ハ何之國之者共不知躰ニ仕候、多分はてれんたるへきと被仰候、彼者何とそ不相果樣ニ被仰付候て、此地へ被召上せ候へ、南蠻人たくミ之淵底可被聞召由候、御國者別而鬼利死丹之改入御念候間、心遣無御座由被仰候、巨細ハ歸宅之時分、源左衞門尉殿同前ニ可申入候事、

一青山大藏殿・曾俄(ママ)又左衞門尉殿・太田備中殿御下向之由、田中善兵衞尉被申ニ付、御書并爲御音信御看被遣候、相屆申候、大藏殿・又左衞門尉殿者、前ニ者左樣ニ爲申由候へ共、今度ハ無御下向候間、御書返上申候、御看ハ自然可被遣方茂御座候ハヽ、談合申候而遣可申事、

一先書ニ如申、昨日ハ南蠻人へ仰出御座候、江戸ゟ參候御條書之趣と申候、今日ハ唐人おらんたを被召寄候て、仰出御座候、明日ハ長崎衆へか、諸國之家老衆へ

か可被仰出由ニ候、かりうた舟ニ爰許之衆年ゝニ投銀相渡候分を被下候様ニと、御侘申之由候、御返事ハ未無之候、將又備中守殿も御隙明候ハヽ、急度可爲御上洛様ニ申候、今少承合、追ゝ可申入候、恐惶謹言、

「寛永十六年」「朱カキ」八月六日　川上因幡守久國（花押）

三原左衞門佐様
鎌田治部少輔様
山田民部少輔様
伊勢兵部少輔様
彈正大弼様　參貴報

◎〆　川上因幡守

彈正大弼様
伊兵部少様　久國
山民部少様
三左衞門佐様

鎌治部少様　參　△

「寛永十六年カ」

43

「光久公御譜中」

寛永十六年己卯八月十一日、武城本丸失火矣、光久走家老川上將監久國、獻呈御鐵炮袋二百猩々羅紗、皮毛氈百、

44

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶ゝかれうたの儀ニ付而、色ゝ風聞申候而、細川越中守殿へ今朝我等參上候而、昨日被仰出候様子得御内意候へハ、久右衞門尉爲被承相違無御座候、乍去長崎御奉行衆へ人を被付置、御用等も候〔ハヽ〕、越中守殿可被聞召候由御奉之由御咄にて候、此度之儀、肥後之家老衆より被仰通候様ニと、被仰遣候由候之間、從彼方も可申來與存候、以上、

急度以飛脚申入候、昨日從松平伊豆守殿、我等可致登城之由、被仰聞候、頃者耳一圓聞不申候、新納右衞門佑

儀者被相煩候條、大事成御意趣を承違候而ハ心遣存、喜入久右衞門尉　御城江祗候被仕候へハ、かれうた船之儀、先日被〈闕字〉仰出候、是者來年之儀にて候、若御國へかれうた船并黑船乘來、訴訟なと於申上者、其湊へ番を被付置候て、長崎之御奉行衆、又者高力攝州へも被仰理、早ゝ江戸へ御注進可被仰上候、自然右之船到其所、石火矢を打懸於戰申者、成程可被仕詰之由、御奉行衆御三人・酒井讃岐守殿御同人、久右衞門尉へ被成御逢、讃州之御意趣にて被　仰出候由候、隨者從松平河内守殿被仰聞候　御姫君樣之御祝言、九月廿二日ニ相定候、次者兼松弥五左衞門尉殿長崎へ爲　上使、五三日中御下にて候、此等之段可申上候由候條、可被成御披露候、猶期後音之時、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」
八月十日　　下野守　久元〈花押〉

三原左衞門〔佐〕〈佐〉〔佑〕様

鎌田治少輔様

山田民部少輔様

伊勢兵部少輔様

川上因幡守様

彈正大弼様

人々御中

45

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

尙以　將軍樣者西之〈闕字〉御丸之樣ニ御移候而、松隱岐守殿御屋敷へ、讃州御宿より御注進之由候、今度之就火事、御在國之御大名衆御參府之物沙汰も候ハ、、追ゝ可申上候、

急度申入候、仍今朝四時分、〈闕字〉御城ニ火事出來仕、　御本丸天首者殘、一之〈闕字〉御丸ニ懸燒申候、火本者奥方之御臺所より出申たる由承候、我等も最中燒申候中ニ、酒井讃岐守殿、松平伊豆守殿へ參、咲止之由申入候、四時分より九ツ半時迄、事ゝ數人數之續ニ而候つる、定何そ可被成御進上候條、讃州樣へ得御内意、相調可申與存候而、新納右衞門佐殿・喜入久右衞門尉殿へ内談申候へ

ハ、材木ニ而も候ハん歟與被申候間、其許御差圖相待申候ハヽ、をそなハり可申候間、内ゝケ様ニ存候、とかく此元巨細之儀共承合、追ゝ可申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」八月十一日　　下野守久元〔判〕◎（花押）

彈正大弼様
川上因幡守様
伊勢兵部少輔様
山田民部少輔様
三原左衛門佐様
鎌田治部少輔様　人々御中

46

「御文庫拾貳番箱三拾九巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

一書申入候、

一八月十一日、江戸御本丸火事出來候て不殘やけ、御天主計のこり申候、

一上様にしノ丸へ御うつり被成、何も下ゝの衆迄無事ニ御さ候よし申候事、

一扨も〳〵進物事、萬事下つけ殿へ申入候、早ゝ御使者御下候て御尤ニ候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」八月十二日　　細越中〔判〕◎（花押）

松さつま様　人々中

松薩广様　　細越中
封　　江戸より

47

「御文庫拾九番箱三拾四巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

尚以松平河内守様只今此方へ御出被成候而、昨日之火事之様子共御物語被成候、此狀之趣ニ少も不相易候、爲御存知候、以上、

昨日之火事之儀、則以早飛脚申上候、猶も慥ニ可承與存、今朝深栖九郎右衛門尉殿へ尋候て申上候、

一火之出所、前ニ如申、奥方次之料理之間ゟ出來、　御

本丸御殿不殘燒、ちうじやくの御門より又北之方之御門并屏、北西富士見之矢倉迄、悉燒申候、　公方様者西之御丸、　姫君様御事ハ、松平筑前守殿へ御出被成候、春日殿ハ如下屋敷のかせられ候、乘物廻ハ無之候て、御女房衆達あはてられ、或せをはれ、或手をひかれ、無正躰様子ニ而候つると承候事、

一二之　御丸御殿并御宮御天首、其外之矢倉者殘候、二之　御丸最前者燒候由申候へ共、今朝右之通承候事、

一御火事ニ付、　薩州様御上洛茂可被成哉與、先書ニ申入候ニ付、松平伊與守殿（ママ）・松平陸奥守殿御留主居衆へ相談仕候へ者、如此返狀參候間、爲御覽持せ申候、夫ニ而も無心元存、深栖九郎右殿へ如何様ニ候而成合可申哉與尋申候へハ、早々御使者被差上可然由候、御自身之御參勤者御無用與存候、讃岐守今度火事之儀、備後守へ申遣候哉與尋被申候間、爲申遣由申候得者、此儀を聞候而、備後守與風參府之儀も可有之候間、此様成時分者、國へ然與被居候て可然候、其通又々可申越由、讃州爲被申聞と被申候、然時者弥御使者にて成合可申與存候、替儀承付候者、追而可申入事、

一就御火事、從　虎壽様何そ御進上候而者可有如何哉與、新納右衞門佐殿談合仕方々立聞申候、此儀も伊與守殿御留主居矢嶋七右衞門尉殿返書御覽候而、御心得可參候、其故者伊與守殿も御幼少之御息様此元へ御座被成候、未無　御目見得由候間、以て同前歟與我等者存候、乍去いか様の出合もや候覽と存、九郎右殿へ尋申候へハ、　虎壽様茂（◎〈闕字〉）御目見得無御座候間、必無用ニ可仕與被申候事、

一御火事ニ付、御進物者其許より何色を御進上なさるゝと（◎〈闕字〉）御書被相付、　御奉行衆迄被仰入可然與、九郎右殿被申候、若材木なと御上も可被成哉與存、材木屋へ尋候へハ、當時者直成大形しれ申候、雖然其元へ相聞得候而こそ何色と可有御定候、其内ニ御作事方多分半造作ニも成可申候間、懸合ニも成間敷候と存候條、能々御相談候而何色と早々可被仰上事、

一火事之時、諸大名衆何茂被爲續候得共、三之〈(闕字)御丸之外の御門にて關留候て、昨晩日記ニ而爲懸　御目與申候、兩　大納言様　水戸様者　御城江御あかり候由申候事、

一今度之御進物ニも可罷成哉與存、御成藏へ有之黃御紋之御道具共書寫差下候、於其元御沙汰候て、早ゝ可被仰上せ候、委者四本久馬助可申達候、恐惶謹言、

「寛永十六年」「朱カキ」八月十二日　下野守　久元(判)◎(花押)

三原左衞門佐様
鎌田治部少輔様
山田民部少輔様
伊勢兵部少輔様
川上因幡守様
彈正大弼様
人ゝ御中

以上

去六日之御狀、從長崎歸宅之刻、於川内具令拜見候、

一御前様御氣色于今すき〈共無御座、御符・御藥なとも參かね候、左様之儀、貴老御上洛候て御申被成候ハてハと、野州被仰下ニ付、御暇御申候へは出申候故、俄御上洛之由、乍御大儀目出度申候、涯分御養生之儀能御申尤ニ存候、追ゝ御吉左右待居申候、

一長崎へ七月廿七日ニ致着船候、其晩馬場三郎左衞門尉殿、大川内善兵衞尉殿へ源左衞門尉殿同前ニ罷出候處、御機嫌能候て、御進物も初而之儀候間、御請取被成由候、

一八月三日ニ太田備中守殿被成御下着候、同四日ニ源左殿・我等罷出候、御進物者無御請取候、同五日ニ南蠻人へ仰出御座候、其御條書者、御年寄衆掃部助殿・大炊頭殿なと七人御連署御條書之趣と申候、

一同六日、三郎左衞門尉殿・善兵衞殿・源左衞門尉殿・我等參候而、琉球八重嶋之内、はてるまと申嶋へ、吳

國人爲參儀細ニ申上候處、舟之繪圖を被成御覽、不紛呂宋之舟ニ而も、道具もはてれん道具にて候、早ゝ吳國人兩人共差上候へと被仰候、其次ニ御咄被成者、先年琉球へ南蠻人參候を搦捕、長崎へ被遣候、其南蠻人本國へ可遣と認置候狀ニも、琉球ロ〻きりしたん宗を廣め、次第ニ日本へ廣め可申と談合之上ニて、琉球へ被差渡候へ共、琉球へ薩广〻之禁制稠候て、我ゝも被搦捕候、向後者琉球ロへ南蠻人被渡候事も成間敷由、狀を調候へ共、其狀者長崎ニ而御取候故、呂宋へ不參候、定而其筋ニて、又ゝ宗をひろめ候者差渡候らん、御國〻被入御念儀者、右南蠻人之狀ニ御座候間、江戸ニ而も御申候由、三郎左衞門尉殿御物語候、

一同七日、諸國之使者被召寄、備中殿被仰出候趣者、日本國きりしたん宗御停止之由被仰出候處、乍存其旨宗を廣め候者を、南蠻〻折ゝ差渡候、去ゝ年彼宗躰之者前有馬起一揆候へ共、則被爲誅罰候、殊彼宗門隱居之所へ、南蠻〻つゝけ共仕候、彼是曲事之儀候間、向後かりうた舟日本へ御着被成間敷候、若背御法度出來候ハヽ、破却其舟、并可乘來者共悉可爲斬罪候、就其諸國へ被　仰出御條書御出し候、對馬殿・豐後殿・伊豆殿御連署之御條書にて候、定御方へも可有御座候、其趣　薩州樣へ申上候、急度諸浦并嶋ゝへも、稠可被仰付と存候、

一鹿兒嶋御屋敷之御殿悉古罷成、虫付候間、新可被成御立替由、三郎左衞門尉殿・善兵衞尉殿へ申置候、城普請ニハ相替候間、被聞召置由候、其次ニ國府之御城黃門樣御存生之內ニ、　薩州樣移被成度候由、酒井讃岐守殿を以被成御申候、其刻先城戸二重ッヽ可被立置由被仰上候故、城戸二重之道具取せ候而、國分へ召置候、是も世間〻いかやうニか可申候間、可被聞召置由申上置候、今度之長崎之御仕合、一段能御座候間、可御心安候、彼是爲御心持申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」八月十五日　　川上因幡守　○（花押）
久國（判）

「御文庫拾九番箱三拾四巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

伊兵部少様
參人々御中

以上

追而申候、

一昨日細川三齋様より以御狀被仰聞候、様子者、今度就御火事ニ、從方々御進物あかり申候、自　薩州様茂何そ御上候様ニと可申遣之由被仰候、則我等參候て忝之由、御禮申上候、後日以　御書御禮被仰候而尤候事、

一諸大名よりあかり申候御進物、西之◎(闕字)〈御丸せばく御座候とて、以注文被成御披露、御進物者大名衆へ御預置、御用次第可被召寄與、奏者御番衆へ從御年寄衆爲被仰渡由候、長悅物語ニ承候事、

一大廻之御舟歸帆仕候、自此元伊豆國下田ちかく乘懸り候處、去七日ニ大風ニあひ、沖のことく被吹出候處、諸船も沖中ニかゝり候、此方之船頭清兵衞與申者之乘船ニ、松平隱岐守殿御荷物舟も同所ニかゝり候、風つよく候而、隱岐様御舟、此方之御舟ニ流懸り、摺合候而双方共ニ、墻其外諸道具等悉すて申候、隱岐様御舟者杉舟、此方之者楠木舟にて候、杉舟者よハく候て散々ニ罷成、伊豫之加子・船頭ハ此方之御舟ニ助り、伊豆の下田ニ參たる由候、從爰元檢者をつかハし、歸帆不罷成候ハヽ御船者賣せ、船頭・水手者陸路を可差下候、就其松平河内守様より御使被下、國元之船と伊與之舟と、下田浦にて押合、伊與之舟ハ損候處、加子・船頭此方之舟ニたすかり候事、御滿足之由被仰聞候、隱岐守様御留守居山田喜兵衞尉殿我等所へ被參、同前之一禮被申候、將又殘三艘御國舟之内、善左衞門◎(尉)〈乘船之儀者、行方不相知之由申候、二艘者自下田、無恙出船仕たると申候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」八月十五日　　下野守　久元◎(花押)〔判〕

鎌田治部少輔様
山田民部少輔様

三原左衞門佐様
伊勢兵部少輔様
川上因幡守様
彈正大弼様　人々御中

彈正大弼様
(印)
○川上因幡守様　久元
伊勢兵部少輔様　参
〆　下野守

(印)
○八月十五日ノ狀、九月朔日肱岡久賀之介被持下候、
一細川三齋様ゟ江戸御火事ニ付、諸大名衆進物之御注進之事、
一大廻舟歸帆之刻、破損仕候由申候事、
（○印は島津家重書ニヨリ補フ）

50
「御文庫拾二番箱三拾九卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

印判可有御免候、以上、

一筆申入候、然者去十一日之晝、御本丸火事出來、御殿主計殘、悉燒失仕候、更共　上様　姫君様御機嫌能、其上名物之御道具共不殘出申、下々迄無事ニ御座候、其元へもはや疾相聞可申候得共、如此ニ候、拙者儀、去比御暇申、在所古河へ參候處、右之火事ニ付驚、去十二日ニ夜通江戸へ罷着候、隨而爰元ニ被相詰候大名衆ゟ、當座ハ御夜物御寢卷之様成物二ツ・三ツ・五ツ迄、たうけニ上り申之由承候、薩摩殿茂兎角御作事之時分、御進物御用意各御聞合可然存候、路次中御無事ニ御歸國珎重存候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」
八月十七日　土井大炊頭
利勝（印）
伊勢兵部殿

▽◎
伊勢兵部殿　利勝
封　土大炊頭
△

51
「光久公御譜中」

條々　諸國へ被仰渡候

52

一鬼利死丹宗門雖爲御制禁云々

一領内浦々ニ常々慥成ものを付置云々

一自然不審成もの舟乗來云々

右條々所被　仰出也、仍執達如件、

寛永十六年七月五日

對馬守

豐後守

伊豆守

「此條書、七月五日ノ場ニ全文アリ、略ス」

右之趣、今度爲　上使太田備中守殿長崎へ被召下、諸國へ江戸從御年寄衆被仰渡候旨、堅固ニ可相守者也、

「朱カキ」「寛永十六年」八月廿三日

薩摩守

右高札ニ相調、御家中諸所へ立置申候、但肥後國中ケ様ニ爲被成由候、

以上

一書申入候、

一相良狩野介爲　御使被罷上、其地無御何事由、此方同前候、　御前様御氣色も、頃者次第御快氣被遊候間、目出度存候、

一中務少、去十七日此地へ致參着候、就其方々承合、酒井讃岐守様へ得御内意候へハ、彼御差圖にて、御進物之御注文、昨朝阿部豐後守様へ、中務召列持參仕候、

一御進上之鶴、去十八日ニハ可致參着之由、中務少申候間、今度之御祝言之御使にて、鶴・御樽・御肴・蜜漬・硫黄御進上候て成合可申哉與、新右衞門佑談合仕、松平河内守様へ、我等祗候仕得御意候へハ、鶴其外之御進物者、御祝言之御使にてハ成合申間敷候條、誰そ申付候へと被仰聞候間、堀弥右衞門尉へ申付、相持せ候處、十八日之曉鶴參着仕候間、十九日之朝弥右衞門尉同心仕候而、酒井讃岐守様へ罷出、從其元之御目錄御書持參申候、被成御逢候而被仰候者、鰹節并御

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

樽上候事無用候、鶴・硫黄十桶・蜜漬二壺御進上可然候、當月者松平伊豆守殿御當番ニ候間、注文可懸御目由、被仰聞候ニ付而、伊豆守様へ御目錄御書持參申候へハ、明廿日◎〈闕字〉西之御丸へ持參可仕由承、如其上り申候、其後伊豆守様御逢被成、即御披露候へハ、異國之鶴、殊年ゝ子をそたて候由、別而御感之由被仰聞候、從其元者蜜漬一壺與被仰聞候へ共、讃州様へ得御内意、任御指圖、金柑梨子之蜜柑上り申候、定御奉書出可申候間、委儀者重而可申入候、

一今度御姫様へ上り申候御祝物、松平出雲守殿・安藤右京亮殿御請取由、頃承付候間、昨朝雲州へ參得御意候へハ、明廿七日御祝物西之御丸へ持參可仕候由、被仰聞候間、其覺悟仕候、御夜物・御蒲團・御枕・中綿迄之入目、大方銀子拾八貫八百目程歟與算用申候、

一頃酒井讃岐守様へ懸御目候處、大引物之儀國本へ申遣候哉與被仰聞候間、御注文被下候へハ、即早飛脚爲遣由申上候、引物之數十四本被遊付候、其内五本歟七本歟可被成御上候、大臺所御門惣様ニ、大引物十四本入候ニ付而、方ゝへ被仰遣候、必ゝ從御國者五本か七本か御進上尤候由、返ゝ被仰聞候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」八月廿六日　　下野守久元〔判〕◎〔花押〕

三原左衛門◎佐〔佑〕様
鎌田治部少輔様
山田民部少輔様
伊勢兵部少輔様
川上因幡守様
彈正大弼様
人ゝ御中

53

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」

起請文前書之事

一知音念者向後御座有間敷候事、

一御前方之儀取沙汰申間敷候、縱雖爲親兄弟親類、他言

申間敷候事、

一對御奉公、惡心之心を持、野心不忠をたくむ儀有間敷候之事、

右條〻若於偽申上者、

奉始上梵天帝釋四大天王　下堅牢地神　冥官　冥衆　惣者日本六十餘州大小神祇　別者　當國鎮守　新田八幡大菩薩　開門正一位　鹿兒嶋擁護諏訪上下大明神　稲荷大明神　戸柱　春日　若宮勸請等　殊者　愛岩大權現　太天狗　小天狗　山〻峯〻所有天狗　取分天滿大自在天神御部類眷屬等　神罰冥罰　身上可罷蒙者也、仍起請文如件、

寛永十六年己卯八月吉日

津田利兵衛〔判〕◎（花押）
廣瀨吉左衛門尉〔判〕◎（花押）
竹下前後〔判〕◎（花押）
肥後與五郎〔判〕◎（花押）
新納地介〔判〕◎（花押）
新納仲次郎〔判〕◎（花押）
宇都八弥〔判〕◎（花押）
弟子丸門弥〔判〕◎（花押）
東郷弥十郎〔判〕◎（花押）

「宛ナシ」

（張紙）
「光久公御譜中ニナシ」

54

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

追而之御狀ニ、

一今度大田備中守殿爲　上使、長崎へ御下向ニ付、川上因州・鎌田源左衛門尉殿被相越、七月廿三日ニ長崎へ着船候て、其日追付馬場三郎左殿・大川内善兵衛殿へ被差出、　御意趣被仰入候處ニ、　御進物者何方えも被成御返候へ共、初而之儀ニ御座候間、被成御請取候哉、一段目出度候事、

一備中守殿去月三日ニ長崎へ被成御下着候ニ付、同四日

因州・源左衞門尉殿御差出候處ニ、即被成御對面、自遠國早ゝ被相越候由被仰、御進物者何方より參候も不被召留由候て、無御請取候由承屆候事、

一同六日、唐人おらんた被召寄、哦流他舟着岸之儀、自今以後可爲御停止候、唐船おらんだ船者、如此中可參候、自然貴理師旦宗乘來候ハヽ、曲事ニ可被召曖由被仰出との由候哉之事、

一同〔曉〕、三郎左衞門尉殿・善兵衞殿へ因州・源左衞門尉殿被爲參、琉球八重山之內、ばてるまと申嶋へ異國人參候通、細ゝ御申入候て、即船之繪圖諸道具被成御覽被仰候者、呂宋之川舟にて候、銀之くさりハばてれん何そ惡念起り候時、はだより帶ニ仕、身を痛候道具ニ而候、從呂宋ばてれんの爲渡儀無疑候、早ゝ彼者召上候樣ニ與被仰、其次而ニ三郎左衞門尉殿御物語ニ候者、先年琉球にて搦捕、長崎へ被遣候ばてれん、琉球にて籠舍之內ニ文を認、呂宋へ可遣與仕候哉、はだニ付致格護候を見出シ候て、通事ニ被仰付、日本ノ文章ニかゝせ御覽候へハ、於呂宋談合申候ハ、琉球國程ちかく候間、先彼嶋ゝへ宗旨を廣め置、次第ニ日本へ可相廣由、談合仕相渡候、琉球人者無力之躰にて、一段心易見得候へ共、日本人參候て稠相改候間、向後琉球へはてれんを渡候事も可難成候、可有其心得由、いかにも細ニ書盡候、其趣於江戸も被仰上候、琉球へ宗を廣め候儀、可難成通之狀を被召取候間、呂宋へ聞得間敷候、前ゝの談合之筋にて、又ゝ琉球へばてれん渡候ハん、弥稠被仰付、可爲肝要候、御國者貴理師旦宗之改、御念入候通被仰候哉、就其今度猶ゝ琉球へ可被仰遣之旨、御談合之由尤ニ候事、

一同七日、諸國之使者被召寄、備中守殿・三郎左衞門尉殿・善兵衞殿御同前ニ御差出候、備中守殿　上意之趣被仰出候、日本國數年きりしたん宗被成御停止候處ニ、ばてれん共蜜ゝニ差渡候、又彼宗門之族於有馬結徒黨、企邪儀候、即被爲誅伐候、ばてれん隱居候所へ、彼國よりつゝけの物送與、段ゝ曲事深重ニ候間、

自今以後哦流他舟着岸御停止之由、今度被仰放候、就其諸國浦〻入念候様ニ與被仰出候哉、委御書面之趣得其意申候、將又琉球へ異國人爲參儀、早〻三郎左衞門尉殿江戸へ被仰上候由、彼是御念比之被仰様共にて御座候哉、目出度候事、

一鹿兒嶋御殿作ふり候間、新敷御立替被成之由、三郎左衞門尉殿・膳兵衞殿へ御理候處ニ、被聞召置之由候哉、是又承屆候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」九月七日　　伊勢兵部少輔◎(花押)貞昌(判)

下野守　　久元◎(花押)(判)

鎌田治部少様
三原左衞門佐様
山田民部少様
川上因幡守様
彈正大弼様　參御報

55

「御文庫拾二番箱三拾九巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

御使札致拜見、忝奉存候、如仰之江戸御城不慮之火事出來、笑止千萬御同前ニ存候、乍去　公方様千代姫様◎(闕字)〈西之丸江〉被爲◎(闕字)〈成〉、御機嫌被成◎(闕字)〈御〉座之由、目出度奉存候、然者哦流佗船渡海就御停止ニ、從流球(ママ)口糸・卷物・菜種等相調候様ニ與、於江戸ニ御年寄衆被仰渡之由、就夫ニ御内證之通得其意存候、今程着岸之唐船共、當地ニ罷在候間、流球船ニ渡海之便ニも可罷成儀ニ御座候ハん哉、様子御尋候へと、御使者へも申渡候、併相替儀も御座有間敷與存候、委細江左馬助・相良權兵衞方可被申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」九月十一日　　大河内善兵衞◎(花押)正勝(判)

馬場三郎左衞門利重◎(花押)(判)

松平薩摩守様　尊報

56

「御文庫拾二番箱三拾九巻中」

一筆令啓達候、當年入津之哦流佗船、日和次第出船可申付候、於浦〻ニ飛乗之者無之様ニ、自然風惡敷候而、湊近ク參候者、番等堅被付置、出船仕候様ニ可被仰付候、恐惶謹言、

九月十一日　　大河内善兵衛正勝（花押）〔判〕
馬場三郎左衛門利重（花押）〔判〕

松平薩摩守様

（貼紙）「廿一」通御譜中ニ不見得候得共、十六年同日ノ狀ナラン」

57

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

御火事ニ付各御進物之覽

一御蚊屋　一つり
一手燭蒔繪　十ヲ
一御料理なべ　五組
一御行水桶　御たらい　御おり湯桶黑ぬり御もん
一九間ニ十一間之御座敷、其まゝ立候様ニ出來有之、右者松平阿波守殿より、
一御屏風墨繪　五双
一御夜物　五ツ
一御重箱梨子地　十組
右松平長門守殿より、
一御夜物　五ツ
一御しとね　三ツ
一御湯とう梨子地并御たらい二通
右鍋嶋信濃守殿より、
一御夜物　三ツ
一金屏　十双
内狩野ほうけんの繪も有之、
一椀　二三共ニ　二百人前
右松平安藝守殿より、
一御夜物内二ツ唐織　三ツ
一御蒲團　二ツ
一重箱梨子地金具有之　十組

右者松平土佐守殿より御進上之由承申候、

一御夜物但から織　五ツ

一毛氈　百枚

右者　上様へ

一御夜物　三ツ

一御蒲團　二ツ

右者　千代御姫様へ、細川越中守殿御進上物之由被仰聞候、

一毛氈二十枚　稲葉民部少輔殿

一鈴鉢五ツ御紋付　木下右衛門大夫殿

一鈴鉢十ヲ御紋付　秋月長門守殿

一毛氈十枚　嶋津萬壽殿

一御夜物三ツ内一ツ戻リ候　寺澤兵庫頭殿

御姫様へ參候御進物者、惣別戻り候、

「朱カキ」「寛永十六年」九月十七日

「末紙ニ」御火事ニ付、各御進上物之書立、

〇「本マヽ」

58

「御文庫拾九番箱三拾四巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

急度令啓候、

一今度　御城火事之儀ニ付而、大引物可有御進上之由、従酒井讃州被仰候趣、下野守所より兩度申下候、定而無油斷可被仰付候、就其兵部少輔此元へ參着候而ゟ、松平伊豆守殿へ參候處、御國ゟ之大成物者、迚今度之御作事ニ者調申間敷候間、不被成御待之由被仰聞候旨、先日申下候、可被聞召達候、雖不及申候、如斯松伊豆守殿被仰候とて、不可有御油斷候、於罷成儀者成候程被入御精、先大坂迄參候ハヽ、則達　上聞候様ニ

可有御座候、此引物之儀者、今度之御用ニ立候得ハ幸之御事候、若御用ニ不立候共、大坂迄御上候而、菟角御進上ニハ可罷成候、然者諸大名之被成様、先火事之時分、或御夜物・御蒲團・御屏風・蒔繪之御仕道具などの類、殊外被入御念御進上候而、其外ニ又御作事之御材木、又　御城之石垣火ニ當候分、被召直候、其角石・大小つき石等、過分之御雑左にて、右如申二重ゾ、之御進上にて候間、從　薩州様も大〔御〕(ナシ)引物御進上迄にてハ、中ゝ諸大名之被成様ニ不可致相應候間、此方にて致談合、御材木相調、其許ゟ爲被仰上由申候而、御注文指上可申覺語ニ候、其注文之下書爲可懸御目差下候、御國へハ早晩御普請をも御免にて候間、餘之大名衆よりハ一位も御進物重候而社可然候ハんすれ共、皆ゝ過分之御進物にて候間、漸皆之御進物ニ御追付候程之御様子ニ御座候、大引物なとハ他國ニ有之間敷候間、ケ様成もの〔ニ〕(ナシ)御進上候ハ、、一廉之御進物ニ可罷成と存候處、今度之御作事ニ御用ニ不立候得ハ、殘多儀候、嶋津萬壽殿大引物、兼而江戸へ三本、大坂へ七本被召置候を、今度　上様へ三本可有進上由御申候へハ、殊外之御感にて、三本迄者分現ニ不致相應候間、一本可被召上之由被　仰出候得共、當所にて〔弐〕(貳)本、大坂ニ而壹本、合三本是非ニ可致進上由、被仰上候、彼御小身にてさへ如斯候間、御引物御進上迄にてハ、　薩州様御分現ニハ成合申間敷候、右之材木御進上候ハてハと致談合、急度注文可差上覺語候、最其許へ得御意候而より、御注文可差上候得共、火事〈出〉來候而ゟ、其元へ注進申上候、往還餘程延候得者如何候間、如斯候、又別色ニ御進物有之間敷候、材木なとの儀も、從其許御量之儀可難成候間、爲指過様候〔へ〕(得)共、如此候事、

一右御進上之材木之代銀別紙ニ申候、此代銀ハ差替ニ與材木之主共申候間、方ゝへ銀子之儀致才覺候、銀子於無之者相調申間敷候間、不及了簡候、町方へハ連ゝ過分之御借銀被成置候、其御返辨當年中之約束にて候

間、又ゝ申儀不罷成候ニ付、井上新左殿へ申候ハヽ、當時御手前ニ銀子無之候、方ゝへかしをかれ候間、其銀子參次第可被借進候、材木賣主共へ新左殿〔談〕合ニ而、材木渡候者、代銀之儀ハ必新左殿ゟ可有御渡由申談、於被成〔者〕先材木を請取候樣ニと、新左殿御悃ニ被仰候間、材木之主共へ內談候而見可申候、過分之材木之儀ニ御座候間、新左殿御一人ゟ出候銀子迄ニてハ成間敷候、山崎孫右方へも賴申候、隨分調候而見可申由被申候、此等之儀ニ付而、京都へも銀子借用候而、早ゝ可被指下之由、御藏奉行衆へ申遣候、從其許も急度京都へ被仰上、銀子被相調被指下候樣、可被仰遣候、上方へ被召置候藏役人衆、何も手前ゝゝ之究を被致題目ニ、誰ゝニ奉行之代ニ者、借銀如何程被仕候、又返辨方如何程被仕候との究を肝要ニ被存、借銀無之樣ニ、其代ゝ之衆皆ゝ借銀被仕儀を遠慮深由及承候、左樣之手前之嗜を專ニ被存候而者、御用不相達候間、縱如何程借銀多候共、御用ニさへ達候〔へ〕ハ、一段之御奉公ニて候條、左樣ニ被心得候樣ニと、奉行衆へ被仰遣肝要存候、此方よりも其段申遣候事、

一於江戶御借銀之高過分之儀候、當年中ニ可有御返辨との借狀過半有之儀候、其返辨之銀子可被成如何候哉、〔莵〕角京都ゟ出候ハてハ罷成間敷候、御借銀之高別紙ニ申候間、被成御覽、遮而御談合尤候事、

一江戶之御借銀之儀、頴娃左馬助殿・新納右衞門佐殿同前ニ存之外ニ、　薩州樣御歸國之後貳千兩借金有由候、此金之儀、新敷被仰付候御書院之入目之內之由、新右衞門殿被申候事、

右條ゝ能ゝ相達候ハてハと存、態〔便〕差下申候、猶口上ニ申候、恐惶謹言、

「寛永十六年」九月十八日　「朱カキ」

伊勢兵部少輔貞昌〔判〕

下野守久元〔判〕

三原左衞門佐樣

鎌田治部少輔樣

山田民部少輔様
河上因幡守様
彈正大弼様
人々御中

九月廿一日

八木長次郎
新納勘解由次官

◎彈正大弼様
川上因幡守様　久元
参
下野守
○　伊勢兵部少輔

59
『(飯)□野大戸諏方大明神ニ在リ』

高五拾石　神領座主検校

知行目錄奥書

右之知行之儀、眞幸諏方　家久様御氏神之由候而、先年知行五拾石被付置之旨、圖書殿・平田太郎左衞門殿・比志嶋紀伊殿・鎌田出雲守殿證文慥ニ在之候條、右之分令支配者也、

寛永十六年　御支配所

（表紙）

光久公　寛永十六年　自十月至十二月

後編　舊記雜錄　巻九十六

60

「御文庫拾九番箱三拾四巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶以内藏助殿より阿久根へ我等書狀之返書被持せ候處、はや致出船候ニ付、態便被差上、右ニ如申三高と申彼家中之長老、相良喜平次殿兩人にて承候、ケ樣ニ慇懃ニ不及被仰、内藏助殿返事にて可相濟候處、御慇懃之至ニ候由申候つる、兩人之口から承候樣子者、ケ樣之屋敷なとを當時遮而不立用とハ有なから、返進候へハ御家へうとく成候儀を大形ニ返事候てハ、いかゝニ有之との心遣かと承得候、爲御存知候、已上、

一書令啓候、然者相良内藏助殿鹿兒嶋へ格護候屋敷之儀ニ付、書狀遣候、某案書相添御覽候而、求广へ可被遣之由、阿久根より山民部殿・三左衞門佐殿へ申入候、其後とかく樣子不承候〔而〕（◎間）いかゝと存候處、二三日以前、相良喜平次殿又三高と申長老兩人にて、壹岐守殿より被仰候者、内藏助所より屋敷之儀申越候、内藏助存候も最前屋敷申請候時分者、當時のことく可致在江戸儀も不存候て、節ゝ鹿兒嶋へ可參格護にて、一旦者作事をも仕候而、　惟新樣　黃門樣へも御茶進上申候へ共、それより以來諸大名皆御妻子等迄御在江戸之躰ニ罷成候て、内藏助なともひたと在江戸仕候故、何事も最前之樣子ニ相替候而、鹿兒嶋へ被下候屋敷之作事等も不仕候、此屋敷之儀者所からも歷ゝ衆御座候て可然所にて候間、先ゝ可致

返進候、とかく鹿兒嶋内にてさへ御座候ハヽ、何方へ成共一ヶ所被下候ハヽ、其屋敷にて　薩州様へ御茶を進上申度と、内藏助存候間、左様ニ申調候而可進之由候、又出水之屋敷之儀者、加藤殿と儀絶ニ付、求麻中之者共海邊之通用不罷成、鹽之調儀難成候て、出水より左様之調仕、求麻之鹽相續候、其上相良殿上洛之時も、彼地より出船候而萬御恩忝儀不淺候、當時者細川越中殿と御當家も別而被仰談候、相良殿之儀も加藤殿之時代ニハ相替、自佐敷船ゝ出入有之ニ付、近年者從出水出船無之候へ共、出水へ被下置候屋敷之儀者、壹岐守殿目出度屋敷と被思召候間、彼屋敷之儀者是非共可被仰受之由候、むさと仕たる者なと宿不仕様ニ、堅可申付候、此中も其分ニ候、弥油斷有間敷由、いかにも慇懃ニ被仰候間、我等當座ニ返事申候ニも、鹿兒嶋之屋敷之儀、家老中々先當時ハ不入様ニ見得候間、從我等申理候て、此方へ請取候様ニ可仕之由候ニ付、今度罷上時分以書狀申候、扨者壹岐守殿へ被申入候哉、被入御念御慇懃之被仰事共にて御座候、家老衆へ此段可申遣候、鹿兒嶋屋敷之儀、此中之屋敷ハ先被成御返、別所ニ被仰請度之由候間、左様ニ被思召候ハヽ、當時之屋敷を先其儘可被召置候哉(哉)(ナシ)と申候へハ、此中之屋敷ハ所からも誰そ被召置尤ニ候間、可致返進候、別所ニ鹿兒嶋之内にてさへ候ハヽ、いかにもちいさき屋敷を被下置度由、堅兩使被申候間、其段其元へ可申遣之由申候、自然公儀へ御沙汰候ても、薩广へ屋敷なと御取候と候へハ、いかゝニ候由をも申理候へ共、其段(者)(ハ)先年内藏助内儀申請候時分、公儀へ御内意申入、少も氣遣無之候、御家を奉賴候ハて不叶由、よく公儀へも御存知候、阿部四郎五郎殿・渡邊圖書殿より茂、古御家にて末賴母敷候間、弥御家へ被仰入可然候由、連ゝ御異見共候條、左様之氣遣ハ無之由候、此等之旨委被仰上屋敷之儀者、先御請取候て、別所へも重而可被遣之由可被仰置候哉、出水之屋敷之儀者、是非共壹岐守殿より可被仰受之由候間、此上者如何様と被仰候てハ、御隔心ニ可罷成候間、先如此中にて可被召置候哉、御談合ニハ過

間敷候、尚期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」
十月二日　　伊勢兵部少輔◎(花押)
貞昌〔判〕

鎌治部少様
三左衛門佐様
山民部少様
川因幡守様
彈正大弼様
参人々御中

▽◎彈正大弼様
川上因幡守様　　貞昌

伊勢兵部少輔△

「末紙ニ」
卯十月二日ノ状同十六日ニ御道具衆被持下候、
相良内藏助殿屋敷之儀也、

61

「御文庫拾二番箱三拾九巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

御札令拜見候、今度御本丸火事之儀、其元江相達、被驚存之由得其意候、因茲被差越使者猩々皮羅紗之御鐵炮袋貳百并毛氈百枚進上之候、右之趣遂披露候之處、念之入候段被思召御機嫌候、此由可相傳之旨　上意候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」
十月四日

阿部對馬守重次〔判〕◎(花押)
阿部豐後守忠秋〔判〕◎(花押)
松平伊豆守信綱〔判〕◎(花押)

松平薩摩守殿

▽◎松平薩摩守殿

松平伊豆守
阿部豐後守
阿部對馬守

封

△

62 「光久公御譜中」

覺

一天下鬼利志丹就御禁制、かれうた船着岸可爲御停止之由被仰出候、就其從琉球口唐之商買相調、御用之端にも成候樣可被申付候由、江戸より被　仰下候事、

一從天下被　仰出儀候間、進貢船爲使者久志上親方被致渡唐、北京福州之繕又者商買之首尾堅可被申付事、

一銀子貳百貫目餘次第ニ可差渡事、

一糸并卷物不依何色、いかにも手の能物を可被買取、如此中惡物者曾以無御用事、

一藥種品々以注文申候、いかにも入念、或似物或虫喰之惡藥種買取間敷事、

一買物之代銀指替ニ可相渡事、

一先年唐へ殘置候貳百貫目餘之銀子ハ、唐物ニても銀子ニても次第ニ可有上納事、

一何邊ニても兵具之類船中爲用心之ニも、曾而被差渡間敷事、

右條々北谷按司讀谷山歸楫之刻雖申越候、今度又々申渡候、已上、

寛永十六年十月十二日

鎌田治部少輔（判）（花押）
三原左衞門佐（判）（花押）
山田民部少輔（判）（花押）
川上因幡守（判）（花押）
圖書頭
彈正大弼（判）（花押）

三司官
金武

63 「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申候、　御城火事之儀ニ付、酒井讃岐守殿・伊井掃部殿なとへ御狀被進候、從讃岐守殿者此中御狀共御持せ候而、御國へ可進之由被仰候つる間、爲何御狀トハ不相

知候條、先便ニ進上申候、定其御狀にて候ハんと存候、
自掃部助殿之御返書者◎參〈衍カ〉次第追而進上可申候、將又川
上將監殿海路者順風無之候而、ちと延引之様ニ候つれ
共、自大坂當御地へ六日ニ被爲着候、飛脚之類さへ從大
坂六日ニハ不罷成候處、殊外之長途、別而被爲肝煎候、
爲御存知候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」神無月十六日　伊勢兵部少輔◎(花押)貞昌〔判〕

下野守　久元◎(花押)〔判〕

川上因幡守様
山田民部少様
三原左衞門佐様　參人〻御中

「末紙ニアリ」彈正大弼様　久元
川上因幡守様　下野守
伊勢兵部少輔

卯月十一月廿八日川上將監殿持下候、將監殿江戸へ海道惡く參候
由也、

64

「御文庫拾九番箱三拾四卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

先日以飛脚申候、定可相達候、

一川上將監殿今度御城火事之儀ニ付、爲御使參府候、即
御年寄衆へ申入候、御進上物之儀先書如□(堪)〻皮御鐵
炮袋百・羅紗之御鐵炮袋百・毛氈百枚上り申候、一昨
日從阿部對馬守殿御奉書御持せ候而、御使早〻被致歸
國候様ニと被　仰出候間、即此地打立にて候事、
一此御地當時相替儀無之候、　千代御姫様御祝言、九月
廿一日ニ□〔目出カ〕度相濟申候事、
一尾張大納言様・同右兵衞様へ自諸大衆〔本マヽ〕御進物之様子承
合、同前ニ相調御進物相納申候事、
一九月廿八日ニ右兵衞様御城◎〈江〉爲御祝儀被成御參候ニ
付、俄舞臺被仰付、七五三之御振舞之御用意殊外被入

御念被仰付候處ニ、公方様御機色惡御座候而、御能も無御座、七五三之御振舞なとも無之被相調候物共、何も廢り申之由候事、

一基太村中務之儀隙明申、自　尾張様御禮狀請取申候間、早ゝ可致歸國〔之〕◎候處、從諸大名衆之使いつれも未從　上様之被仰出無之候而、逗留之躰ニ候間、承合罷居事候、定急度可相濟候間、軈而打立可被罷上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」十月十六日　　伊勢兵部少輔◎（花押）貞昌〔判〕

下野守　久元〔判〕◎（花押）

三原左衛門佐様
鎌田治部少様
山田民部少様
川上因幡守様
彈正大弼様　參御報

▽◎川上因幡守様
山（田民部）□少様　　久元
（三原左）□衛門佐様　參

下野守
伊勢兵部少輔　△

「末紙ニ」
卯十一月廿八日ニ川上將監殿持下、江戸御城火事ニ付御進物之儀也、

65

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶以石かき之繪圖被仰付候付、若くつれかゝり候所を、餘ひろく共繪圖ニ出申候て、若御目付之衆見出るやうにも申候へハにて御座候間、其御念遣肝要御座候、御屋作もとかく國府へ後日御移之儀候間、先大かたニ被遊御尤たるへく候哉、將又右之條ゝ野州同前ニ、讃岐守殿へ參候て申入候、以上、

去月十七日之　御書、謹而頂戴、誠以忝奉存候、

一御進上之大材木之儀、於大坂御請取被成候様ニ、御年

寄衆へ申入、早ゝ其御返事可申上之由被　仰下候、此材木之儀者、從酒井讃岐守殿野州迄最前被仰渡候間、先ゝ讃岐守殿へ得御意申候而、其後御年寄衆へ可申入旨野州へ申談、讃岐守殿近日鎌倉邊へ鷹野へ御越候、御歸宅を相待申、一昨日御歸候間、卽致參上得御意申候處、被思召外大材木共早ゝ海へ被爲引出候、御精入候故ニ候、卽松平伊豆守殿へ參候而、於大坂可被成御請取候哉、可得御意之由被仰聞候間、伊豆守殿へ參申候而、右之趣申入候處、材木之目錄を御覽候而大坂へ可被仰遣由候間、從其元參候目錄を寫申候而、致進覽之候、今度之御作事御奉行松平伊豆守殿にて御座候、并付衆伊丹幡摩(播)守殿・曾根源左衞門尉殿にて御座候、御兩人共ニ御同座ニ御座候而、幡(播)广殿被仰候も無案內にて、遠江なた越、大事之材木相廻候儀可難成候間、先大坂迄御付候樣にとの御事ニ候間、可　御心易候、委細之段者老中衆へ申遣候事、

一鹿兒嶋之御座所之御殿殊外ふり申候間、新敷御作事被仰付度候、此段も可相伺申旨被　仰下候條、是も先讃岐守殿へ得御意候へハ、御屋作者いかほと被成候而も不苦由被仰候事、

一石垣くつれかゝり候、ケ樣なるをも被築直度候、如何可有御座哉と得御意候處、新儀ニ御普請被仰付儀者罷成間敷候、もとの石垣かきくつれ候を被爲築儀にて候ハヽ不苦候條、繪圖を被成候ハヽ、御老中へ可被仰談之由御座候間、念之ためと存、讃岐守殿以御取成國府(分)城を拜領候而、彼地へ可被罷移ニ相定候處、鹿兒嶋之居所之石垣そこね候とて可致普請由、御年寄衆へ被申入、如何可有御座候やと申候へとも、少もくるしかるましき由候、定國府(分)へ御移候共、此中鹿兒嶋之御屋敷者其儘にて可被召置かと承候間、左樣こそ可有御座由申入候、石垣之繪圖御上候時、御年寄衆へ被進候　御書者、可致進上と存、先今度參候　御書者其儘召置、重而者御判紙を被下候ハヽ、於此方可相調可申候、此等之旨可然之樣可預御披露候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」十月十八日　伊勢兵部少輔◎（花押）貞昌〔判〕

町田勘解由長官殿

顕娃左馬助殿

▽◎顕娃左馬助殿

町田勘解由長官殿　貞昌

封

伊勢兵部少輔　△

66　「光久公御譜中」

今茲寛永十六己卯歳　家光公之姫君（稱千代姫君）嫁于尾州光友卿也、光久賀婚儀、獻御肴三種・御樽三荷于　家光公、御寢衣五・御蒲團三・御枕二于姫君矣、

67　「御文庫拾貳番箱三拾九卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

今度就御祝言被相越、使者三種三荷進上之、并〔千〕代姫（平出）◎君様江御寢衣五・御蒲團三・御枕二被獻之候、目錄之通遂披露候之處、念之入候段被思召御機嫌候、此由可相傳之旨依　上意如此候、恐々謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」十月廿二日

阿部對馬守重次〔判〕◎（花押）

阿部豐後守忠秋〔判〕◎（花押）

松平伊豆守信綱〔判〕◎（花押）

松平薩广守殿

▽◎

松平伊豆守

松平薩摩守殿

阿部豐後守

阿部對馬守　△

68　「御文庫廿三番箱廿一卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

當家之宿坊從往古雖爲廻向院、先年大坂江依致籠城、嶋津家之宿坊蓮金院相定候、從當領内登山之者、他寺へ於

令參詣者、自貴寺堅固可有沙汰候、若違背之輩者、〔到〕

當國可有其屆候、爲後證仍狀如件、

寛永十六年十月廿三日

69

「家久公御譜中ニ在リ」

高野山蓮金院事、爲當家宿坊中納言家久令興隆、且復買地三十五石并於當國知行百石令寄附候旱、不違舊約先祖日餅寺檜之修補、永代全不可有緩疎者也、仍狀如件、

寛永十六年十月廿三日　　松平薩摩守光久

蓮金院

70

「雜抄中」

御家之御宿坊往古者廻向院ニ而候節、龍伯樣御石塔院中江御建立有之候處、蓮金院之儀　右大將賴朝公御創建之寺院ニ而御座候處、慶長十三年義弘公・忠恒公御相談被遊、蓮金院之寺院并寺積三拾五石、寺家共ニ代銀四拾貫目餘ニ御買候間、結構ニ修覆被仰付、賴朝公之御子孫故御宿坊蓮金院へ御改替有之儀、蓮金院之文書之內ニ相見得候、

一御宿坊蓮金院ニ改替被成候得共、御領國中高野山へ被不□者共御好を相慕、如已前廻光院ヲ爲宿坊相着候、退轉無之候處、豐臣秀賴公大坂籠城被成候節、廻向院時之住持、大坂之城江御味方申楯籠候故、其後寛永十六年ゟ御領國中者廻向院を宿坊ニ仕候儀、御禁止被成候、其趣蓮金院へ御書付ヲ以被仰渡候、

一當家之宿坊從往古雖爲廻向院、先年大坂へ依致籠城、嶋津家之宿坊蓮金院相定候、從當領內登山之者他寺へ於令參詣者、自貴寺堅固ニ可有沙汰候、若違背之輩者至當國可有其屆候、爲後證仍狀如件、

寛永十六年十月廿三日　　鎌田治部少輔政統判

三原左衞門佐重庸判

山田民部少輔有榮判

川上因幡守
久國判

嶋津圖書
久通判

嶋津彈正
久慶判

圖書頭

彈正大弼

蓮金院

71 高野山廻向院自古來雖爲宿坊、先年大坂陳刻、院主致籠城候間、其已後相離宿坊候而、蓮金院分國中之宿坊を相定候通、其時分之家老衆ゟも被申渡候由候條、弥以登山之衆蓮金院へ相付、廻向院へ出入之儀堅令停止候、勿論覆坊・別坊へも相着候儀可爲禁止候間、右之旨曖(之カ)ゝ村中へ堅可被申渡候、若後日他坊へ着候由、從蓮金院於申來者、致其沙汰、曲事之段可申付候、恐ゝ謹言、

「月日ナシ」

三原左衞門佐

鎌田治部少輔

山田民部少輔

諸外城

地頭曖衆中 參

72 「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶ゝ先◎〈可〉申進、此方御子様達別而御息災御座候、先日も如申上候、御前様(御カ)□煩無殘所御快氣、弥御本復候、此由可被仰◎〈上〉候、尤候、已上、

急度令啓候、然者御進上之大曳物之儀、於大坂御請取も可有之候哉、左様之儀□衆へ得御意相究候様ニ与、自各も被仰越候、又從　殿様兵部少所へも以御書被仰下候、□書如申候、兩人酒井讃□參候而申上候處ニ、早ゝ松平伊豆守殿へ參候而、可得御意之由被仰聞候間、卽豆州へ致伺公細ゝ申入候、幸今度之御作事奉行之内、伊丹播广殿、曾根源左衞門尉殿も御同座ニ御座候而、被爲聞無案内にて、遠江渚を相廻候儀成間敷候由被

仰、先材木之目錄を差出候へ、御覽候而可有其御心得之由被仰候間、從此方如申候、小濱殿へ被仰遣、材木者御廻させ候而、造作之儀者此方へ可被仰歟與存候處、一昨日自伊豆守殿預御使、御進上之材木之儀いつにても江戸へ參次第御上候而尤ニ候、海上之儀者不相知儀ニ候、思召外與風參儀も可有之候、又遲ゝ可仕儀も可有之候、從大坂御用ニ付、被召寄物、大坂を七月致出船、頃江戸へ來着候、又九月大坂を致出船候船も頃來着候間、難計被思召之由爲被仰旨、使者物語にて候間、御作事御急之儀ニ候間、自御國御進上之材木共不被成御待候、隣國之材木にて先次第ニ可被仰付候間、可致其心得之由御意趣ニ而候、自其元先日被仰越候にも、遠江渚國之船かた共乘廻候儀、無案内ニ候故、每度船を乘損、又遲江戸へ乘廻候間、今度御作事之御用ニ立候樣ニ、薩州樣思召候間、大坂船奉行へ被仰渡、船頭加子等、自大坂江戸之乘前能存候衆へ被仰付候ハヽ、其造作之儀者從此方可相調之由、慥ニ申入候つる、右ニ如申候、當座ニ者爲被成御合點樣ニ被仰候間、定其分ニ可有之与存候得者、急ニ不參候而も參次第ニ御進上候樣ニ与被仰候、曳物遮而御用ニも無之候哉、又萬壽殿大曳物此元へ有合候而、三本御進上候、ケ樣成にて題目之所者相濟候哉、乍去萬壽殿家老衆へ此中相尋候へハ、曳物未無御請取候、三本之內一本ハ大坂ニ而被成御請取候、二本ハ江戸にて進上申候へ共、未被召遣、從萬壽殿御格護之由候、就其從右馬頭殿大曳物此元へ被召寄候、海路之儀ハいかゝ被致候哉与相尋候へは、佐土原より大坂迄者曳船にてのほせられ、大坂より江戸へハ十五端之船ニ、三本ツヽのせ候而爲相屆由被申候、御國ゟ十五端程之船上り候ハヽ、其船にて此元へ參候樣ニ被相心得、舟於不足者、才覺候樣ニ(而)大坂御藏奉行衆へ申遣候、其元よりも望月金右衞門尉殿御賴之由候間、弥可被得其意之由申上せ候、大曳物を曳候船共者、少もむかふ風なとにてハ罷成間敷候、今程北風時分にて候間、自其元之船共大坂へ遲可相着与存候、自大坂此方へ可參時者、一艘ニ兩人程ツヽ上乘可入歟与存

候、於御同心者早ゝ被仰付、左様成衆被差出尤ニ候、舟も一艘ニ三本ヅヽ乗候ヘハ、九本三艘にて可参候、今一本〔ハ〕◎者十五端之船〔ニ〕◎にて無之候共、可相調候、惣別材木御進上之衆、松平土佐守殿・御同安房守殿なと過分ニ可有御進上之由、御披露候へ共、國へ被仰遣候而者、迚箸ニ成合申間敷候ニ付、於此方、材木屋共へ御内談候者、當時之直一倍ニ材木を賣候歟、又者柱一本を二本ヅヽニ而、後日請取候歟、右両條之儀材木屋共申次第ニ可有之由被仰候ヘハ、材木を此方へ御着候て、一倍にて御返候ハヽ、當時有之材木共を可進由申之由候、然時者從何方進上之材木も大坂にてハ御請取無之与相聞得候、右ニ申候様ニ、萬壽殿進上之引物二本〔ハ〕◎者此方ニ而あかり、一本ハ大坂ニ而御請取之由候、是者最前三本可有進上之由、披露之時不應分限候間、一本進上候様ニと被仰出候へ共、幸有合候間、三本可有進上之由被爲申上候、左様之儀ニ付而、一本者大坂〔ニ〕◎にて御請取候歟与存候、公儀へ被成進上、御前之仕合外聞者可然候へ共、過分之御損ニ罷成候、今程被爲賣候ハヽ、殊外御利潤ニ而候ハん物をと、皆ゝ申事ニ候、將又自此方御進上之材木六千五百本之儀、皆ゝ御請取候而被召遣候、一段御念入候而、寄特ニ此元にて御調候、ケ様之材木有合候事寄特ニ候由、讃岐守殿・伊豆守殿も被仰候、其外材木奉行衆いつれも左様ニ被仰之由、目出度候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」
十月廿七日

伊勢兵部少輔◎〔花押〕
貞昌〔判〕

下野守
久元◎〔花押〕〔判〕

三原左衞門佐様
鎌田治部少輔様
山田民部少様
川上因幡守様
彈正大弼様
参人ゝ御中

73 「光久公御譜中」

覺

一去年差渡候進貢船、五月廿五日ニ大唐船着津仕候事、
右承屆候、
一小唐船者去年唐へ參候時分、湊口ニ而瀨ニ乘懸船破候間、右之乘衆大唐船一艘より乘來候間、小唐船者爰元ニ而作せ、來春進貢ニ可差渡候事、
右承屆候、
一子之秋走渡唐之役者、手くたり惡敷候ニ付而、遠嶋或寺領申付置候處、今度喜友名渡唐仕、唐之樣子承通候而申遣候ハ、大嶺才府・平川通事兩人ニ而渡間敷、唐人ニ銀子過分ニ相渡、其上色々手くたり惡敷候通、從喜友名注進申候、其上今度歸朝仕候役者衆、何も右同前ニ申候、然時者ヶ樣成人ハ○以來くく爲見懲、彼兩人歸帆之刻死罪可申付覺悟候事、
右其元之仕置ハ此方よりかもい無之候、
一中城事別而爲主取差渡候處、御物銀之拂又者無分遣成候事を不存由、曲事深重候、其上今度於唐喜友名承通申遣候ハ、大嶺才府・平川通事兩人之校量迄を以、糸商賣御法度稠罷成、其上殘銀過分ニ御座候由候、然時者主取之中城大方ニ御座候ニ付、如此成立申儀重罪候間、死罪可申付覺悟候、乍去當時御國許へ召置候間、御下被成候者、爰元ニ而其曖可仕候、巨細者口上ニ大里儀保申含候間、可被聞召屆候事、
右此方へ籠舍申付召置候、曖之儀者追而可申下候、
一去年渡唐衆御物銀不持渡候間、何そ隙入儀有間敷候條、早々歸朝可申候、大和へ唐之樣子可申上候間、四月中必歸帆可申由堅申付候處、四月より五月ニ及大水御座候間、船之修理不罷成、遲々仕候由申候事、
右承屆候、
一殘銀爲可請取儀保、又殘銀爲存知大嶺才府・平川通事右三人唐へ逗留仕候事、
右銀子致首尾候樣ニ弥可被申付候、
一八重山嶋之內はてるま嶋へ、卯四月七日ニ吳國人小舟一艘ニ貳人乘候て流着候間、則八重山嶋番所へ罷居候處ニ烈渡候間、皆々以談合、彼人流着候濱ほりあけ、

近當之山迄もきりあけ、村中迄も、細ゝさかし見申候へ共、何たる不審なるもの無之候、乍去少ゝ持候物ハ別紙ニ書記候之間、御覽可被成候、八重山嶋ニて其嘜可申候へ共、爰元へ烈渡候ハヽ、通事共御座候而可遂糺明と存差渡候由、申來候條、彼人流着候處、委敷爲見屆、檢者へ細ゝ申付差渡候、於爰許阿多内膳正殿へ得御意糺明仕候へハ、高砂近く嶋の者ニても可有之候、唐へ久ゝ罷居候一官と申琉球人申候、乘來候舟も右同前之魚鈎舟ニ見究申候、彼高砂人之事口不通、又ハ通事も無之候間、穿鑿仕候事不罷成候事、

右之者共伴天連たるへき由、長崎御奉行衆被仰候、一大事之科人ニて候間、能ゝ被入念急度可被召上候、

一右之吳國人兩人大和へ可差上候へ共、自然於此元其嘜可被仰付候哉、前野村大學助殿在琉球之時分、とけすの濱ニ參候南蠻人、先鹿兒嶋へ樣子被爲申候、其後大和へ被召上候間、彼是以得御意、御下知次第可仕候、巨細大里儀保可申達候事、

右前の條ニて相濟候、

一宮古嶋長濱与申所ニ、寅之九月十七日唐船一艘、人數四拾四人乘候て流着候條、番衆所之役人ニ而相尋候へハ、大明國南京之者福州へ商買ニ罷渡候ニ付而、逆風ニ相(洋)中にて、楫柱損流着候由申候間、右之通爰元へ早船差渡申入候條、檢者差遣若高砂唐人(に)て候者召籠、早ゝ注進可仕由申付候、又無口能南京船ニ相究候ハヽ、宮古嶋より帆柱、楫道具等見次候而、出船させ申樣ニ申付候、前ゝより無口能唐船者其嶋より出船させ申候間、如先例申付候事、

右此舟南蠻宗なと無之哉、若不審成者於有之者、早ゝ可被召上候、自今以後も不及尋候、不審成者ハ可被召上候、

一右南京船積荷大和之御用ニ可罷立物共御座候者、可有買渡由申付候、持渡候者大和へ差上せ可申候事、

右御用ニ立荷物共候ハヽ、可被召上候、

一卯之正月十九日、宮古嶋之内下地いるハ中そね与申所ニ小唐船流着申候、船之長さ六尋、廣さ九尺、舟之内外皆かきの付申候、舟の底はら兩方共ニ打破、上はきなと打おとし、舟計流着候由申來候事、

右之舟不審深重候、幾度もケ様成舟ハ南はん宗の可爲才覺候、よく〳〵可被入念候、

一子之秋走之安里才府・末吉大筆者今度歸朝仕候間、伊東二右衞門尉殿・平田狩野介殿御下向之刻、彼人嘱之儀申上候様ニ、安里才府者闕所仕、栗嶋へ遠嶋、末吉大筆者ハ家屋敷召上、寺領申付候事、

右琉球仕置之儀者、此方かかもい無之候、

一たつたん國之者人數貳拾萬程ニ而、寅之九月より唐へ參、同十月ニ北京之城南へ通候而、さんとんと申所ニ三百里餘迄打破、其上城五拾三破候處、唐之軍勢百萬餘騎にて責候へ共、難成候而、卯ノ三月ニ如本國追籠申候由申來候、巨細者才府官舍可申上候間、爲御存候事、

右承屈候、

右之條〻大里儀保ニ口上巨細申含候間、可被聞召候、以上、

寛永十六年卯五月廿八日

勝連

金武

伊東二右衞門尉殿

右返答書仕候間、可被御覽候、已上、

寛永十六年十一月朔日

三原左衞門佐〔判〕○(花押)

鎌田治部少輔〔判〕○(花押)

山田民部少輔〔判〕○(花押)

川上因幡守〔判〕○(花押)

嶋津圖書頭

嶋津彈正〔判〕○(花押)

勝連親方

金武按司

74 「北郷久加譜中」

寛永十六年十一月令久加補御旅家老、

75 「光久公御譜中」

猶ゝ薩摩守馬ニすかれ候て、よき馬共被尋候間、家中ニも然ゝの馬無之候由被申候て可然候、

霜月十三日寅之刻之書狀、安藝守所迄被遣候趣、慥ニ見屆候、從細川肥後守殿馬之別當淺野七左衞門尉御所望ニ付、被差越候由候、通道祁答院筋を被相越候由申來候哉、其心得可申候、其元宿無由斷申付、萬事可入念候、仍馬之儀御厩ニ拂馬之由可有見せ候、又軍役迦之馬共於有之ハ、被見候て尤候、馬被買候者早ゝ被打立候て可然候、とかく久敷被居候儀惡候間、何とそ隙之明候樣ニ可被申候、馬之巨細之段大六右衞門尉・川五二右衞門尉・財傳右衞門尉此由存候間、可被申談候、然者大和守上洛之儀、別ニ口上申儀無之候、下野守・兵部少輔前々被差出候儀計〔ニ〕〔に〕て候、早ゝ之上洛尤候、又易儀共於有之者、不依何時可承候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」十一月十五日　光久〔判〕〔花押〕

彈正大弼殿

76 「御文庫拾二番箱三拾九卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

▽○以上△

十一月三日之御狀、殊七嶋之鰹節一箱三百・赤貝之なし物一壺被贈下候、遠路御志之程別而忝存候、其元御無支之由珎重存候、爰元相替儀茂無御座、公方樣弥御機嫌能被成御座、切ゝ御鷹野へ被爲成支候間、可御心安候、次下野殿・兵部殿へ存寄儀も候ハヽ可申入由、得其意存候、將又三齋事無支ニ居候哉と被仰越、忝存候、此比仕合能御暇被下、今日江戸罷立上京仕事候、猶期後音之節候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」閏十一月五日　細川越中守忠利〔判〕〔花押〕

松平薩摩守樣
御報

▽◎　　方

松平薩摩守様　　細川越中守

参　　△

77

「御文庫拾二番箱四拾巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶以爰元相替儀無御座候、委細者伊勢兵部少輔方ゟ
可被申上候間、不能詳候、印判御免可被成候、以上、

貴札拜見忝奉存候、然者　公方様弥御機嫌能被成御座候
間、御心易可被思召候、如御意私義去比在所古河ニ罷有
候節、瘧相煩候之處、玄琢法印被差下、以療治今程者透
と本復仕候、氣分も能躰ニ御座候間、乍恐御心易可被爲
思召候、隨而貴様御事緩ゝと御在國被成付、來春者早ゝ
御參可被成之旨奉得其意候、仰出之交替之時分、早ゝ御
參可然候、將又七嶋之鰹節壹箱・琉球酒大壺壹被懸御意
候、遠來と申、爰元稀成故別而忝賞翫仕候、御悃志之段
過分忝奉存候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」閏霜月七日　　土井大炊頭利勝□（印）

▽◎　　松平薩摩守様　貴報

利勝

土井大炊頭

△

封

78

「御文庫拾二番箱四拾巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

尊書致拜見候、如仰其後者御狀も不得御意、本意之外御
座候、此表別條無御座、　公方様弥御機嫌能被成御座候
間、御心易可被思召候、御城御普請も事外はか參候、然
者　公方様へ御國之肴并琉球酒被成御進上付、三人之御
老中へ被仰入之由、奉得其意候、隨而私へ七嶋之鰹節一
箱・琉球酒一壺被贈下候、誠遠路之所御懇情之〔到〕、忝
奉存候、將又御當地ニ嶋津下野守・伊勢兵部少輔被指置
候間、萬事可申談之由、相意得奉存候、猶期後音之時
候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十六年」閏十一月九日　　酒井讃岐守◎忠勝（花押）〔判〕

79 「御文庫十二番箱四拾卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

松平薩摩守
貴報

猶以阿部豐後守一所不有之故、不及加判候、已上、

御札令拜見候、　公方樣御機嫌之御樣子、無御心元被存付而、被差上使者候、仍其國之異產色々并琉球酒進上之候、目錄之通遂披露候之處、念之入候段被思召御滿足候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

「朱カキ」「寬永十六年」
閏十一月十日

阿部對馬守
重次〔判〕◎〔花押〕

松平伊豆守
信綱〔判〕◎〔花押〕

松平薩摩守殿

80 「御文庫拾二番箱四拾卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

▽◎

松平薩摩守殿

松平伊豆守

阿部對馬守

△

一筆啓上、先以　公方樣御機嫌宜被成御座候間、可安尊慮候、御歸國以後以愚札も不申上、背本意存知候、其元御無事ニ御座候由、致恐悅候、然者琉球酒壹壺拜受、遠以遠來と申珎物就中大望存知候折節故、別而忝奉存知候、將又御本丸御作事夥敷はか參候、大形來年四月前ニ出來可仕かと下々取沙汰候、隨而伊勢兵部少輔殿と折々參會、乍輕御噂申迄ニ御座候、自然此表似合之御用於御座候者、可被仰付候、委曲奉期後慶之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寬永十六年」
◎十一月十九日
〔三〕
「御譜ハ十一月トス、余カ寫誤カ」

安倍四郎五郎
正之〔花押〕

薩州樣
參人々御中

81 「忠將一流系圖」

▽◎

薩州樣
參人々御中

正之

安倍四郎五郎

△

大和守久章ノ子
忠清
菊千代丸　又助
寛永十六年巳卯十一月二十六日誕生、母家久卿之女、亡父大和守久章背　太守逢凡誅矣、由是絶其後嗣、收公所帶、雖然故母堂以太守之妹、爲叔父忠紀之弟、許領知故母遺領也、

82
「御文庫拾二番箱四拾卷中」「光久公御譜中ニアリ」
貴翰致拜閲候、仍　公方様江濟候御進上之趣遂披露、委細以奉書相達候、將又私江琉球酒并赤貝漬物各一壺被懸御意候、御悃篤之〔到〕(◎至)忝存候、次嶋津下野・伊勢兵部方御當地被差置候間、御用等之事彼兩人迄可申之由承屆候、其地御堅固之段珎重存候、猶御使者可爲演説候、恐惶謹言、
「朱カキ」「寛永十六年」閏十一月十一日　阿部對馬守重次〔判〕◎(花押)
松平薩摩守様　参御報

83
松平薩摩守様　参御報　重次
▽◎松平薩摩守様　参御報　阿部對馬守
メ　△
▽◎以上　△
先月七日之御札令拜見候、參勤之儀示預候之趣達　上聞候之處、其元仕置等緩々と申付、來年三月中可致參府之旨被仰出候、可被得其意候、恐々謹言、
閏十一月十六日　阿部對馬守重次〔判〕◎(花押)
松平伊豆守信綱〔判〕◎(花押)
松平薩摩守殿

84
（本文書ハ八三号文書ト同文ニツキ省略ス、但シ「朱カキ寛永十六年」トアリ）

85 「下野守久元譜中」

久元自壯年嗜禪法、故扣諸寺禪關、依知識問大事、漸迄耳順而在武州江戸城之日、扣嵩山心宗寺關、得絶同大和尚之示、到參、則請安心別稱、即書以授焉、記左方、

86

[印]「朱イン」 安名
「朱カキ」宗崑

授與衣鉢并三歸三聚十(重)(里)禁戒畢、

寛永十六年十一月吉辰

釋氏七十二世絶同書焉

[印]「朱イン」 [印]「朱印」

87

[印]「朱イン」 安名
「朱カキ」宗崑 信士

授與衣鉢并三歸三聚十重禁戒畢、

寛永十六年十一月吉辰

釋氏七十二世絶同書焉

[印]「朱印」 [印]「朱イン」

88 ○先是請安心別稱、則立雅號安名而書以與之、然而未足我心、請得奥旨、於(茲)(慈)乎、示趙州無、日久到參、忽然粗有省矣、于時書號記以授之、就以綴參得妙理之故於和歌、而問和尚、和尚其威嚴然深加難破數般之後、好參得之的當、書其問答之次序及院號、以見授焉、其後寫壽影及左弓箙右鞍馬、爲三幅對而請寫其賛、強不能拒應予之求、書以賜之矣、共記左方者也、

89 ○ 鐵心

熟尋嶋津下野太守藤原久元公者、自壯年志于參禪、故依諸知識扣問大事者三十年、雖然如是未會此事、或時到武城北、訪予於心宗寺裡道話、予也頓察其未徹在、故教彼知從前虚用功夫、所以隨予請益、即示以趙州

無、日久到參後一日說普賢・文殊・觀音至理、聽之忽然有省、因茲請安心別稱、故諱之、曰宗崑字之曰鐵心、且賦一偈以爲鐵心之證云尒、

這箇(シヤコ)元來先天地彌綸法界等靈空、崑崙着袴九州外颯々清風明月中　咄、

○(朱)十七年也
寛永庚辰仲春日釋氏七十二世絶同書于武州豐嶋嵩山心宗寺裡[　]「朱イン」[　]「朱イン」

90
嶋津宗崑叟觸予竹篦下終到不疑之、田地詠和歌呈露曰

しめさるゝ無の一もしの關こへて
月は雲井にたち上けり

予問曰、末句意旨作麽生、答曰、月は雲井にたち上けり、又問曰、有意耶、曰不然、曰無意耶、曰不然、曰然則離有無耶、曰不然、曰不離耶、曰不然、曰恁麽者作麽生、曰月は雲井にたち上けり、曰然者唯詠之歟、曰不然、曰然者如何、曰月は雲井にたち上けり、誠是石火莫及電光罔通矣、咄

91
寛永庚辰純陽上旬絶同書于武州油嶋嵩山下[　]「朱イン」[　]「朱イン」

錄[　]「朱印」院號之事
月宮院
寛永庚辰純陽上旬
釋氏七十二世[絶同授與]「朱イン」之[　]「朱イン」

92
弓箭之賛

幾爲不平離鞬櫜(ケンカウ)于戈叢裡屬英雄
禪門拈得辨端的百發功歸未發中

壽影之賛

這固(シヤコ)是大道寺殿嶋津下野太守
藤原久元鐵心宗崑大居士壽影也
丈夫氣息忠節肝腸合戰功成顯

達士之名於西海參學休去蒙鐵心之
號於東疆非啻好文好武況又能柔
能剛雪淋冬求友圍碁塵慮盡避
花開春接客勸酒世事曾忘加之
交朝則正仁義禮智監市則育士農
工商截斷魔軍右邊三尺劍光冷
築着鼻孔手中數莖拂影涼剃髮
染衣星移物換安心立名地久天長
妙處欲言言不及花簇簇錦簇簇
一處家風十樣粧吹來只是一般香
傳法沙門絕同贊焉

○　鞍馬之贊

威氣空群類　代勞有孝人
晨嘶芳草渡　夕驟綠楊濱
蹄下志千里　廏中勢四隣
一鞭誰得喫　獨立玉麒麟

93　「光久公御譜中」

こん日者つしよのかミしそくけんふくにて、めてたくそんし候事ニ候、さやうのよろこひ申入へく候ところへ、をそなをり申候、まつ〳〵申入へく候、やかて御めにかゝり申へく候、かしく、

「朱カキ」
「寛永十六年十二月二日」

さつまのかミ
ミつ久

〆御した
まいる
申給へ

94　「光久公御譜中」

今度新納二右衛門尉方被差下被申段ゝ、承屆候、初而致下國候處ニ、其方も時分惡敷上洛ニ而、其跡ニ者遮而誰もさし切候而被申候衆無之而、無切ニ候而、物とも申付如何と存間、遣候處ニ、色ゝ被聞合被申下、致滿足候、猶も存寄之儀者追ゝ可被申下候、上洛之時分之儀、御年寄衆被得御意、御通事之通承度候と存候處ニ、早ゝ被申下候而、をてつき申候、其許之出合之通細ゝ可被申下候、

爰元何共氣遣計ニて候、可有推量候、謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」十二月十三日　光久〔御判〕○（花押影）

伊勢兵部少輔殿

95 「御文庫拾二番箱四拾巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶々下々おこり之無之様ニとの御制と聞え申候、頓而御法度書も出候様ニ取沙汰仕候、爰元之様子御留守居衆より可被申入候、已上、

閏十一月廿日之御狀忝令拜見候、爰元相替儀も無御座、公方様弥御機嫌能被成御座候間、可御心安候、其表別條之儀も無御座、貴様御無事之由珎重ニ存候、爰元御屋敷御無事之由候、下野殿・兵部殿折々申承支ニ候、萬々期後音之時候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」十二月十八日　細川越中守忠利〔判〕◎（花押）

松平薩广守様　御報

96 「御文庫拾二番箱四拾巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

貴殿事參勤有之度之由達　上聞候處、來春三月末ニ到着候之様ニと被　仰出候間、被得其意尤存候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十六年」十二月廿日　阿部對馬守重次〔判〕◎（花押）
阿部豐後守忠秋〔判〕◎（花押）
松平伊豆守信綱〔判〕◎（花押）

松平薩广守殿

97 「御文庫三番箱光久公六巻中」

爲歳暮佳慶小袖十到來、歡思召候、尙土井大炊頭可述候

也、

十二月廿八日 ◯「墨印」『仝上』

薩摩侍從殿

▽◎ 薩摩侍從殿 △

98 「御文庫拾九番箱三拾五卷中」

御分國諸外城へ蓮金院使僧相廻候

覺

伊集院 御衆中在鄕不殘　市來 御衆中町不殘

串木野 御衆中町不殘　川內 御衆中不殘

祁答院　阿久根 御衆中衆不殘

出水 御衆中衆不殘　大口

山野　曾木

蒲生　帖佐

加治木 御衆中衆不殘　國分 御衆中衆町不殘在鄕

福山　敷根

庄內ノうち北鄕式部大輔殿御領分御衆中不殘

卯ノ十二月十一日　蓮金院之內 眞心〔判〕 ◎（花押）

99 御分國中

惣高并衆中乘馬究張

高究

御朱印

總高七拾三萬貳千六百拾六斛

內

京竿　三拾壹萬三千貳百五拾三石餘　薩摩

京竿　拾七萬五千五拾七石餘　大隅

京竿　拾貳萬六百六石餘　日州　諸縣郡

寬永十二年賦增高

拾貳萬三千七百石餘　琉球

惣高六拾九萬九千八百五拾五石八斗四升七夕七才

内

千百拾八石九斗四升七合三夕九才　寛永十六年迄ニ仕明地御支配

五百五拾九石貳斗七升三合六夕　寛永十六年荒地御支配分

外ニ

三萬貳千七百五拾七石壹斗五升九合貳夕三才　京竿之高ニ引合、不足分若京竿之ことく高を於相直者、當分高百石ニ付五石六斗八升九合ツ、増たるへし、

右之内

寛永九年御検地高

貳拾六萬九千六拾壹石八斗五升五合壹夕　薩摩

内

七百三拾六石八斗八升貳合六夕八才　仕明地御仕配ニ成分

貳百貳拾九石七斗七合六夕四才　荒地御支配ニ成分

右同

拾九萬八千九百三石三斗五升三夕壹才　大隅

内

三百拾石九斗四升貳合壹夕三才　仕明地御支配ニ成分

貳百八拾八石三斗壹升五合八夕九才　荒地御支配ニ成分

右同

拾萬八千貳百貳拾四石貳斗四升七合九才　日州諸縣郡

内

七拾壹石壹斗貳升貳合五夕八才　仕明地御支配ニ成分

四拾壹石貳斗五升七才　荒地御支配ニ成分

寛永十二年賦増高

拾貳萬三千七百拾貳石九斗貳合壹才　琉球

右總高之内　仕上方御國遣御臺所付

寛永十六年六月御勘定之高但戊寅年分

高拾六萬九百拾貳石六斗九升貳合貳夕三才　御倉入

高千三百七拾四石壹斗四升五合壹夕八才　屋久之嶋

高貳拾七石三斗七升四合　硫黄嶋

高九石三斗八升六合四夕　竹　嶋

高貳拾壹石三斗七升六合三才　黒　嶋

高四百九拾七石九斗六升八合貳夕五才　七　嶋

高三萬貳千八百貳拾九石七夕四才　琉球　みちの嶋

但當分取納ノ高ハ四萬三千貳百五拾石七斗六升三合三夕四才

御倉入

合拾九萬五千六百七拾壹石九斗四升貳合八夕三才

高六千百八拾六石九斗七升八合八才　諸屋敷方

高三百七拾八石貳斗七升貳合四夕貳才　諸御城内

合六千五百六拾五石貳斗五升五夕

鹿兒嶋

高拾三萬貳千三百拾三石貳斗五升三合八夕貳才

一所衆并奥方

人躰貳拾八人　乘馬貳百五拾六騎　内拾六騎奥方分

高五千四百八拾貳石五斗貳升四合　寺社但

高四萬六千五百五拾九石六斗七升壹合壹夕六才

千石ヨリ四千石迄衆

人躰貳拾貳人　乘馬八拾七騎

高貳千八百貳石三升五合四夕壹才　九百石餘之衆

人躰三人　乘馬三騎

高七千四百七拾三石七斗八合六夕貳才　八百石餘之衆

人躰九人　乘馬九騎

高四千四百七石六斗五升四合　七百石餘之衆

人躰六人　乘馬六騎

高五千七百貳拾貳石三斗五合八夕壹才　六百石餘之衆

人躰九人　乘馬九騎

高壹萬貳千七石八斗五升四合九夕九才　五百石餘之衆

人躰貳拾貳人　乘馬廿貳騎

高壹萬貳百四拾五石九斗七升五夕八才　四百石餘之衆

人躰廿四人　乘馬廿四騎
高貳萬千四百五拾三石三斗七升貳合貳夕貳才　三百石餘之衆
人躰六十五人　乘馬六拾五騎
高壹萬七千五百貳拾九石四斗七升貳合貳夕四才　貳百石餘之衆
人躰七十五人
高貳萬六百五拾石九斗貳升五合八夕八才　百石餘之衆
人躰百五拾七人
高貳千五百拾貳石三斗壹升貳合五夕四才　九拾石餘之衆
人躰廿七人
高貳千六百五石六斗九升六合七夕　八拾石餘之衆
人躰三十壹人
高三千百拾九石貳斗九升六合九夕七才　七拾石餘之衆
人躰四拾貳人
高三千百貳拾壹石壹斗六升貳合七夕四才　六拾石餘之衆
人躰四拾九人
高貳千四百九拾四石五斗七升六合三夕壹才　五拾石餘之衆
人躰四拾六人
高千七百六拾八石五斗貳升四合三夕五才　四拾石餘之衆
人躰四拾人
高三千四拾五石九斗九合九夕八才　三拾石餘之衆
人躰九拾壹人
高貳千四百八拾九石六升三合七夕八才　貳拾石餘之衆
人躰百五人
高千九百六拾三石三斗五合貳夕四才　拾石餘之衆
人躰百五人
高百六拾八石七斗九合八夕　九石餘之衆
人躰十八人

高百三拾貳石九斗七升八合　八石餘之衆
人躰十六人
高七拾四石貳斗　七石餘之衆
人躰十人
高六拾四石三斗七升貳合貳夕三才　六石餘之衆
人躰十人
高八拾七石四斗壹升貳合五夕　五石餘之衆
人躰十六人
高五拾壹石九斗　四石餘之衆
人躰十二人
高三拾五石貳斗九升　三石餘之衆
人躰十人
高三拾九石八斗八升四合四夕八升　貳石餘之衆
人躰十七人
高九石八斗三升六合四夕七才　壹石餘之衆
人躰七人
高七石四斗九升七合五才　斗ヨリ下之衆

人躰十六人
鹿兒嶋分寛永十六年出物之高
合高三拾壹萬四百四拾石六斗七升七合八夕七才
合人躰千百五拾人
内 廿七人　寺社
高八拾三石五斗壹升八合三夕三才　御小者衆御中間衆御道具衆諸村庄屋
人躰廿二人
一　九拾人　切米取
一　百拾二人　一ヶ所取　鹿兒嶋
合貳百貳人
高九萬八百八拾三石九斗壹合貳夕七才　琉球國司
薩州諸外域
高貳千七百三拾三石六斗三升壹合四夕三才　谷山
内 百拾六石　寺家分
衆中貳百貳拾貳人
内 百八拾貳人　知行持　内貳人百石餘
三拾七人　一ヶ所取　廿六人三拾石已上

三人　寺家

高貳千五百拾貳石六斗壹合　指宿

内拾八石九斗壹升五合　寺家

衆中貳百人

内百八拾壹人　知行持　内壹人八百石已上　七人八三拾石已上

拾七人　一ヶ所取

貳人　寺家

高七百三拾三石七斗八升六合四夕五才　山川

内三拾八石　寺家

衆中貳拾五人

内拾三人　知行持　内壹人貳百石餘　貳人百石已上

拾人　一ヶ所持　壹人卅石已上

貳人　寺家

高千百貳拾三石貳斗　顯娃

内貳百拾壹石三斗　寺社

衆中百貳拾四人

内八拾七人　知行持　内五人三拾石已上

三拾四人　一ヶ所持

三人　寺家

高百貳拾五石貳斗　知覽

内四石貳斗　寺家

衆中拾七人

内五人　知行持　内一人三拾石已上

十人　一ヶ所持

貳人　寺家

高六百八拾壹石七斗貳升壹合七夕　川邊

内五拾六石　寺家

衆中百貳拾七人

内九拾壹人　知行持　皆廿九石ゟ已下

三拾三人　一ヶ所取

三人　寺家

高三百四拾石貳斗　坊津

内貳百四石　寺家

衆中七人

内五人　知行取　内壹人三拾石已上
貳人　寺家
高三拾九石六斗　泊
内七石三斗　寺社
衆中四人
内壹人　知行取　三拾石已上
三人　寺社
高六石　久志
衆中三人　知行取
高四石貳斗
衆中壹人　知行取　秋目
高貳千五百四拾九石五斗貳升三合　加世田
内百六拾八石八斗　寺社
衆中貳百五拾貳人
百九拾壹人　知行取　内貳人百石已上十四人三拾石已上
五拾七人　一ヶ所取
四人　寺社

高六百三拾六石八斗　阿多
内貳拾貳石五斗　寺社
衆中百拾壹人
内七拾八人　知行取　内五人ハ三拾石已上
三拾壹人　一ヶ所取
貳人　寺家
高六百七拾三石七斗　田布施
内百三拾六石　寺社
衆中百九人
七拾九人　知行取　内一人百石已上三人三拾石已上
貳拾八人　一ヶ所取
貳人　寺家
高千九百六拾三石貳斗　伊作
内百六拾七石三斗　寺社
衆中貳百七人
内百九拾四人　知行取　内二人百石已上十人三拾石已上
九人　一ヶ所取

四人　寺社

高千六百六拾貳石三升七合九夕七才　伊集院

内七百壹石七斗六升　寺社

衆中百四拾壹人

内百七人　知行取　内八人ハ三拾石已上

廿三人　一ヶ所取

十一人　寺家

高三百六拾五石五斗壹升　郡山

内貳石　寺家

衆中六拾一人

内三拾壹人　知行取　内壹人百石已上　貳人三拾石已上

貳拾七人　一ヶ所取

貳人　寺家

高千百九石壹斗九升九合五夕五才　市來

内八拾石　寺家

衆中百八拾五人

内百貳拾三人　知行取　内三人三十石已上

五拾九人　一ヶ所取

三人　寺家

高五百四拾九石九斗三升壹合貳夕四才　串木野

内三拾壹石　寺社

衆中九拾九人

内六拾八人　知行取　内壹人三十石已上

貳拾九人　一ヶ所取

貳人　寺家

高三百九拾七石九斗八升　山田

内五石三斗　寺社

衆中七拾壹人

内五拾六人　知行取　内五人三拾石已上

十三人　一ヶ所取

貳人　寺家

高貳百貳拾石貳斗　百次

内三石六斗　寺家

衆中五拾三人

内四拾壹人　知行取　皆三拾石已上
十人　一ヶ所取
貳人　寺家
高千七石八斗　隈之城
内四拾四石　寺家
衆中百八拾九人
内百八拾人　知行取
六人　一ヶ所取
三人　寺家
高百三拾九石九斗　中郷
内貳石　寺家
衆中四拾五人
内拾八人　知行取
廿五人　一ヶ所取
貳人　寺家
高八拾三石貳斗　高江
内貳石　寺家

衆中五拾三人
内十六人　知行取
三十五人　一ヶ所取
貳人　寺家
高千三百九拾壹石四斗四升貳夕四才　水引
内八百九拾九石九斗　寺家
衆中百拾三人
四拾四人　知行取　内一人百石已上四人三拾石已上
六拾五人　一ヶ所取
四人　寺社
高七百貳拾五石五斗四升三合七夕五才　川内高城
内六石　寺家
衆中百六拾三人
内百拾壹人　知行取　内一人百石餘三人三拾石已上
五十人　一ヶ所取
貳人　寺家
高四百九拾九石　甑嶋

内貳石六斗　寺家

衆中百三拾貳人

内九拾四人　知行取　内三人三拾石已上

三拾六人　一ヶ所取

貳人　寺家

高四百八拾四石九斗壹升　阿久根

内貳石　寺家

衆中百三拾三人

内七拾九人　知行取　内五人三拾石已上

五拾貳人　一ヶ所取

貳人　寺家

高千七百拾七石四斗六合　高尾野

内三石貳斗者　寺家

五百六拾五石者地頭仁禮左近將監殿　乘馬一騎

衆中貳百四拾人

内百九十四人　知行取　内一人八地頭四人八三拾石已上

四十四人　一ヶ所取

貳人　寺家

高七千八百貳拾貳石六斗三升八合五夕　出水

内百石者　寺社

衆中千百拾六人

内八百四拾五人　知行取　内二人八貳百石已上七人八百石已上

貳百六拾七人　一ヶ所取　卅七人三拾石已上

四人　寺家

高三千六百三拾六石三斗七升五合　大口

内三拾三石　寺家

衆中三百貳拾貳人

内貳百九拾貳人　知行取　内六人八百石已上廿人八三拾石已上

廿八人　一ヶ所取

貳人　寺家

高貳百八拾六石九斗貳升三合三夕三才　山野

内貳石者　寺家

衆中七拾人

内六十三人　知行取

五人　一ヶ所取
貳人　寺家

高四百七拾五石四斗四升　羽月
内三石五斗　寺家
衆中百貳拾八人
内百壹人　知行取　内三人ハ三拾石已上
廿五人　一ヶ所取
貳人　寺家

高三百九拾貳石貳斗四升六合九夕　鶴田
内貳石者　寺家
衆中六拾八人
内六十壹人　知行取　内一人ハ三拾石已上
五人　一ヶ所取
貳人　寺家

高三百四拾五石七斗　大村
内九石者　寺社
衆中八拾貳人
内五拾人ハ　知行取　内一人ハ三拾石已上
三拾人　一ヶ所取
貳人　寺社

高拾九石　山崎
衆中貳拾人
内壹人　知行取
拾九人　一ヶ所取

高千百貳拾貳石七斗五升貳合四夕六才　清敷
内七石三斗　寺家
衆中百九拾人
内百七十壹人　知行取　内四人三拾石已上
十七人　一ヶ所取
三人　寺家

高八百三拾八石三斗壹升三合壹夕九才　鹿児嶋　吉田
内拾壹石四斗　寺家
衆中七拾七人
内五十六人　知行取　内一人ハ貳百石已上　三人ハ三拾石已上

十九人　一ヶ所取
貳人　寺家

薩州諸外城

合高三萬九千四百拾六石八斗壹升四合七夕壹才
内三千百三石八斗七升五合　寺社領
合衆中五千百五拾九人
内三千九百十三人　知行取
千百五拾四人　一ヶ所取
九拾貳人　寺社

隅州諸外城

高貳千六百五石九升五合　蒲生
内八拾貳石貳斗四升七合　寺社
衆中三百拾五人
内貳百三十人　知行取　内壹人百石已上　廿五人三拾石已上
八十壹人　一ヶ所取
四人　寺社

高千三百八拾三石貳斗　帖佐
内八拾九石　寺家
衆中百八拾三人
内八十三人　知行取　内一人八貳百石餘　一人八百石餘
九十七人　一ヶ所取　七人八三拾石已上
三人　寺家

高百四拾七石壹斗　帖佐ノ山田
内貳石六斗　寺家
衆中五拾人
内貳十六人　知行取
貳十貳人　一ヶ所取
貳人　寺家

高百三拾三石貳斗貳升五合七夕　曾木
内貳石　寺家
衆中五拾三人
内貳拾九人　知行取
貳拾貳人　一ヶ所取
貳人　寺家

高貳百七拾四石八斗七升　本城
内貳石者　寺家
衆中百貳拾五人
内七十五人　知行取
四拾八人　一ヶ所取
貳人　寺家

高百七拾七石貳斗貳升壹合三夕五才　馬越
内貳斛　寺家
衆中九拾壹人
内四拾三人　知行取
四拾六人　一ヶ所取
貳人　寺家

高七拾三石八斗　湯之尾
内貳石者　寺家
衆中三拾七人
内十六人　知行取
十九人　一ヶ所取

貳人　寺家

高三百三拾九石貳斗　吉松
内貳石者　寺家
衆中八拾九人
内四拾三人　知行取
四拾四人　一ヶ所取
貳人　寺家

高五百拾四石貳斗　栗野
内貳拾五石貳斗八升寺家
衆中百五拾壹人
内百三人　知行取　内貳人三拾石已上
四十五人　一ヶ所取
三人　寺家

高九百九拾石七斗　横川
内貳石者　寺家
衆中九拾三人
内四十五人　知行取　内八人三拾石已上

四十六人　一ヶ所取
貳人　寺家
高百三拾八石三斗　踊
衆中五拾八人
内十八人者　知行取　内二人三拾石已上
三十八人　一ヶ所取
貳人　寺家
高六拾九石　溝邊
衆中壹人
高百八石六斗　日當山
内貳石者　寺家
衆中三拾七人
内廿壹人　知行取
十五人　一ヶ所取
壹人　寺家
高三百三拾貳石貳斗八升八夕貳才　曾於郡
内四拾壹石　寺家

衆中百七人
内三十四人　知行取　内二人三拾石已上
七十人　一ヶ所取
三人　寺家
高七百八拾石六斗貳升壹合八夕八才　清水
内拾九石　寺家
衆中百拾九人
内百十六人　知行取　内二人三拾石已上
壹人　一ヶ所取
貳人　寺家
高五千七百九拾四石四斗壹升七合五夕九才　國府
内八百貳拾七石者　寺家
衆中貳百四人
内百六十五人　知行取　内壹人貳百石已上　九人百石已上　四十八人三拾石已上
三十五人　一ヶ所取
四人　寺家
高貳百貳拾五石貳斗　敷根

内貳石者　寺家

衆中五拾貳人

内貳十六人　知行取　内一人三拾石已上

貳十四人　一ヶ所取

貳人　寺家

高八百八拾八石九斗　福山

内三石貳斗　寺家

衆中百八人

内九十八人　知行取　内一人百石已上　三人三拾石已上

八人　一ヶ所取

貳人　寺家

高八百六拾四石八斗五升　財部

内拾五石貳斗　寺社

衆中百七拾壹人

内百六人　知行取　内六人三拾石已上

六十三人　一ヶ所取

貳人　寺家

高千八百貳拾七石九升八合九夕四才　末吉

内三拾六石　寺家

衆中貳百拾人

内貳百四拾三人　知行取　内九人三十石已上

十五人　一ヶ所取

貳人　寺家

高三百五拾八石貳升三合　恒吉

内貳石者　寺家

衆中七拾五人

内四十九人　知行取　内一人三十石以上

貳十四人　一ヶ所取

貳人　寺家

高百貳拾四石九斗三升　百引

内貳石者　寺家

衆中五拾六人

内三十人　知行取

廿三人　一ヶ所取

三人　寺家
高六百八拾石七斗　串良
内貳石者　寺家
衆中百拾七人
内七十壹人　知行取　内四人三拾石已上
四拾四人　一ヶ所取
貳人　寺家
高貳千六百七拾石壹斗六升五合　高山
内拾八石者　寺家
衆中百八拾壹人
内百四十六人　知行取　内一人貳百八拾石餘　四人百石已上　十八人三拾石已上
三十三人　一ヶ所取
貳人　寺家
高百四拾三石七斗　姶良
内貳拾九石　寺家
衆中四拾五人
貳十八人　知行取

十五人　一ヶ所取
貳人　寺家
高百八拾石貳斗　大姶良
内貳石者　寺家
衆中五拾六人
内貳十六人　知行取
貳十八人　一ヶ所取
貳人　寺家
高八拾壹石四斗　佐多
内貳石者　寺家
衆中四拾壹人
内六人　知行取
三十三人　一ヶ所取
貳人　寺家
高貳拾壹石　田代
衆中六拾七人
内壹人　知行取

六十四人　一ヶ所取
貳人　寺家　大根占

高三百拾五石貳斗　小根占
内七石者　寺家
衆中百四拾九人
内三十六人　知行取　内一人三拾石已上
百十壹人　一ヶ所取
貳人　寺家

高拾五斛　牛根
内貳石者　寺家
衆中四拾四人
内貳人　知行取
四十人　一ヶ所取
貳人　寺家

高六百三拾壹石壹斗　向之嶋
衆中八拾九人　皆知行取　内壹人三拾石已上

隅州諸外城
合高貳萬貳千四百九拾壹石貳斗九升九合貳夕八才
内千貳百貳拾貳石五斗貳升七合　寺社領
合衆中三千貳百三拾八人
内貳千拾九人　知行取
千百五拾四人　一ヶ所取
六拾五人　寺社

諸縣諸外城
高百四拾四石五斗　眞幸　吉田
内貳石者　寺家
衆中七拾八人
内三十八人　知行取
三十八人　一ヶ所取
貳人　寺家

高四拾貳石四斗　馬關田
内壹石六斗　寺家
衆中五拾九人

内十人　知行取
四十七人　一ヶ所取
貳人　寺家

高千百五拾三石四斗九夕五才　加久藤
内四百六拾石五斗四升六合九夕五才
地頭伊地知杢右衞門殿
四拾六石六斗　寺社　乘馬一騎

衆中百六拾貳人
内百九人　知行取　内一人地頭一人三拾石已上
五十人　一ヶ所取
三人　寺家

高貳千八拾五石貳斗七合　飯野
内八百六拾六石壹斗九升六合六夕　地頭大膳亮殿
百貳拾壹石貳斗　寺社　乘馬一騎

衆中百七拾三人
内百拾八人　知行取　内一人六地頭七人八三拾石已上
四拾八人　一ヶ所取

七人　寺社

高六百五拾七石五斗　須木
内貳石六斗　寺家

衆中貳百五人
内百七十貳人　知行取
三十人　一ヶ所取
三人　寺家

高七百八拾三石九斗三升七合　小林
内四石三斗　寺家

衆中貳百拾四人
内百貳十四人　知行取　内五人三拾石已上
八十八人　一ヶ所取
貳人　寺家

高六百五拾九石七斗　高原
内貳拾八石　寺家

衆中貳百三拾貳人
内百三十貳人　知行取　内五人三拾石已上

九十八人　一ヶ所取
貳人　寺家
高五百八拾三石五斗　野尻
内三石八斗　寺家
衆中百五拾三人
内百十五人　知行取　内二人三拾石已上
三十六人　一ヶ所取
貳人　寺家
高千四百貳石　綾
内四百拾壹石　地頭大野正右衛門殿
六石者　寺家
衆中百七拾五人
内百六十人　知行取　内一人地頭一人三拾石已上
十三人　一ヶ所取
貳人　寺家
高千三石　倉岡
内四百九拾壹石七斗六升貳合七夕

貳石者　寺家
衆中百四人
内九十貳人　知行取　内一人地頭一人三拾石已上
十人　一ヶ所取
貳人　寺家
高千五百五拾壹石　穆佐
内九石四斗　寺家
衆中貳百貳拾貳人
内百九十壹人　知行取　内十一人三拾石已上
貳十九人　一ヶ所取
貳人　寺家
高壹萬三百六拾七石壹斗七升壹合壹夕　高岡
内百九石貳斗　寺家　乗馬二騎
衆中四百八拾七人
内四百六十壹人　知行取　内四百壹人三百五拾壹石　廿一人貳百石餘　五十一人三拾石餘
五人　寺家

地頭伊地知佐渡守殿

廿壹人　一ヶ所

高千貳百六石九斗九升壹合　庄内　高城

内貳拾六石四斗八升四合　寺家

衆中百六拾五人

内百八人　知行取　内壹人三百石七人三拾石已上

五十三人　一ヶ所取

四人　寺家

高貳百三拾壹石六斗六升六合七夕六才　山之口

内貳石五斗　寺家

衆中六拾八人

内五十壹人　知行取

十六人　一ヶ所取

壹人　寺家

高百七拾五石七斗　勝岡

内貳石者　寺家

衆中三拾八人

内貳十七人　知行取

九人　一ヶ所取

貳人　寺家

高四百五拾貳石六斗　松山

内貳石者　寺家

衆中八拾三人

内六十七人　知行取　内二人三拾石已上

十四人　一ヶ所取

貳人　寺家

高三千三百七拾五石六斗四升七合壹夕六才　志布志

内五百四拾三石三斗四升三合　寺家

衆中貳百四拾八人

内貳百三人　知行取　内壹人八百石餘廿三人三拾石已上

三十九人　一ヶ所取

六人　寺家

高八百拾七石　大崎

内五石　寺家

衆中百三拾人

内九十貳人　知行取　内五人三拾石已上
三十六人　一ヶ所取
貳人　寺家

諸縣諸外城

合高貳萬六千六百九十貳石九斗貳升九夕七才
内九百拾八石貳升七合　寺社領
貳千貳百貳拾九石五斗六合貳夕五才　地頭四人
合衆中貳千九百九拾六人
内貳千貳百七拾人　知行取
六百七拾五人　一ヶ所取
五拾壹人　寺社
合乘馬七騎

薩隅日外城

合高八萬八千六百壹石三升四合九夕六才
五千貳百四拾七石四斗貳升九合　寺社領
貳千七百九拾四石五斗六合七夕五才　地頭五人

合衆中壹萬千三百九拾三人
内八千貳百貳人　知行取　内五人地頭三人餘迄衆三百石ゟ四百石
貳百八人　寺社　内十人貳百石餘衆六十四人百石已上四百四拾五人三拾石已上
貳千九百八拾三人　一ヶ所取衆

合乘馬八騎

惣合高六拾九萬貳千貳百四拾六石三斗貳升五合七夕八才

右之内

高四拾九萬九石壹斗三升貳合四夕三才
軍役方但琉球國司高籠
内壹萬七百貳拾九石九斗五升三合
諸寺社領
但二百三十五ノ分
高拾九萬五千六百七拾壹石九斗四升貳合八夕三才
御倉入但諸嶋分相籠

高六千五百六拾五石貳斗五升五夕

諸城内并屋敷方

右之外

七千六百九石五斗壹升四合九夕九才不足

但方々御支配残地浮所等未相究故歟

惣合衆中壹萬貳千七百四拾五人

内

九千（三カ）百貳拾五人　知行取

貳百三拾五人　寺社

三千百八拾五人　一ヶ所取衆内九拾人ハ切米取

惣合乗馬四百八拾九騎

寛永十六巳卯

拾二月　高所

（表紙）

光久公　寛永十七年

後編　舊記雜錄　卷九十七

100

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」

上　北郷式部太輔殿　敷根筑前守

上　寛永十七年正月元日

兵庫頭殿　澁谷伯耆守

上　桂又十郎　根占七郎

上　安藝守　吉利下總守　比志嶋〔左京亮〕

上　町田出羽守　伊集院右衞門佐　伊勢隼人佑

上　内之御座

東市正　伊集院源介　鎌田又七郎

上　新納四郎　北郷佐渡守

上　川上上野介　桃山又九郎　諏訪神六

上　佐多又四郎　顯娃左馬頭

上　豐後守　喜入攝津守　肝付半兵衞尉

◎左京亮
彦太郎
ヒヒヒ

101

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」

正月分年中記書拔

一元日表へ　御差出、先老中衆へ被成　御對面　御盃之

□則五社へ御參詣之事、

一御劍持者素袍・烏帽子也、御劍持替一人、是も支度同

前、乘馬貳騎、老中衆長袴、御使衆も長袴ニ而、御輿

廻ニ御供也、
一五社へ御參候て、御歸ニ護广所へ被成御參、夫ゟ御廣間ニ而御手掛上り、奥へ被成御引入候事、
一元日之朝於諏方大般若有之ニ付、御司とシテ川上彦左衞門被罷出候事、
一元日ゟ五日迄、御門番左右へ道具衆十人ッヽ被召置候事、
一御節供參候而以後、表へ被成御差出、老中衆太刀持參有之候事、付一所衆右同斷、
一元日之(曉)(◎晩)御馬召始メ事、
一二日諸地頭衆之太刀打籠ニ而上ル也、御三獻者數之御盃也、
一二日之(曉)(◎晩)御唄初ニ而御亂舞有之候事、
一二日皇德寺へ　御代參、御一門衆被遣候事、
一二日三日之間、江戸へ年頭之御使者被差上候事、
一四日、福昌寺・淨光明寺・興國寺・南林寺・妙谷寺へ爲年頭之御使者御一門衆被遣候事、

102

「御文庫三番箱六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

吉書

一神社佛閣修理興行之事、
一可專勸農事、
一可徵納國〻年貢事、
右任三ヶ條之旨可有沙汰之狀如件、

寛永十七年正月十一日　　光久（花押）

103

「雜抄」

光久ヨリ御舍弟北鄕式部太輔久直へ被仰遣候御書「御譜ニハ覺書以下アリ、久直ハ云〻ノ前書ハナシ」
一四日、大乘院門中衆被罷出候事、
一五日、福昌寺門中衆被罷出候事、付大龍寺飯隈別當被罷出候事、
一五日、彭窓樣御忌日故、毎月興國寺へ御參候事、

覺

一當家二十代餘無恙相續、不輕儀候、中興　日新樣　伯圃樣　龍伯樣　惟新樣　黃門樣之御時、右御連枝之衆對　御家無疎意、度々粉骨之條々、定而可被聞及候、就中於當代者連枝之衆餘多有之事候間、行末賴母布存候、縱國中轉變之時節雖有之、不混于他不可過御家長久之堅慮候之事、

一去々年於江戶繼目相濟之刻、家郎〇之衆衆迄ニ　公方樣御直ニ久敷家ニて〇候なとゝ難有　上意共承、誠　希代之面目不過之候、然者自然於天下被仰付人數儀も有之者、抽忠勤度內存候條、軍役之儀を題目〇染〔深〕心肝、萬事分限相應ニ花麗無之樣可被用儉約之事、

一被忘置儒學弓馬其外道々敷嗜方、或任氣佚遊之樂、或夜行等〇み〔ミ〕たり成行儀、令停止早、并預置一所候衆、不節用地頭所之見廻可有遠慮之事、

一登城之時〇異〔吳〕樣ニ無之樣ニ、慇懃可被相勤候、將又先祖之忌日寺江參拜之時者長袴着用ニて、いかにも可被畏敬之事、

一相背國家之法禁輩於有之者、雖爲各可及沙汰候付、世間者插私意以計策、或蜜事を告、自他犯人之意、或可結朋黨躰ニもてなし、懇切ニ被寄族も可有之候、一旦者贔負之樣ニ可被思候、其志向後者還而可爲讎候歟、若又兄弟衆之間ニ如何樣之和讒〇茂〔も〕可有之刻者、此等之次第速可有言上事、

一老中衆へも無談合、或企〇靜〔爭〕論、或任短慮事を破、且復輕內之者殺害等麁相ニ被致沙汰間敷候、何事〇茂〔も〕黃門樣以來被付置候衆へ、可有內談之事、

一橫目を申付置候間、諸事不可有油斷之事、

以上

寬永十七年正月廿四日

「此御書光久公御譜中ニ在リ」

104

「十二番箱中」「光久公御譜中ニ在リ」

極月十日之御札令拜見候、貴殿事於國元可有越年之旨就

上意、緩々と在國忝被存之由、得其意候、因茲爲御禮嶋津大和被相越、殊其國之佳肴兩種・御樽一荷・琉球酒一壺被差上之候、目錄之通遂披露候之處、念之入候段、被思召御機嫌候、委曲使者可述之候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」正月廿八日　　阿部豐後守忠秋（判）◎（花押）
松平伊豆守信綱（判）◎（花押）

松平薩摩守殿

105

「光久御譜中」

尙々今度之横目ニ兩人ツヽ申付候、顯娃主膳・新納二右衞門同前ニ聞候、出合之儀有之ニ付、少用心有へく候、爲心持申事候、以上、

態申候、顯娃主膳を以用之儀共申遣候、就其岩切縫殿助之儀ニ付、其元老若之衆いかほと申候哉、書中にて承度候、乘物廻ニ今度致供衆之内ニも然々成人依無之、其元ニ申遣候、黑葛原勝左衞門・田中內膳可參之由被申付候て尤候、彼兩人つゝき候、又々少身にて候間、被付御心可被下由可被申聞候、先此由申候、恐々謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」正月晦日　　光久（御判）◎（花押）

彈正大弼殿

106

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」

天罰靈社起請文前書

一横目之條別紙被仰付候間、心底之趣不相殘可申上候之事、

一今度横目就被仰付候、　御意之趣毛頭他言申間敷候、縱雖爲兄弟親類不可洩申之事、

一對諸人無證據儀を申掛、構讒言讒所申間敷候付、縱雖爲緣者親類知音之中惡敷儀を見のかし申間敷事、

一惡儀見立聞立候ハヽ、證跡をひかへ可致言上候事、

一若於身上被掠聞召儀於有之者、被遂御糺明候而可被下候、奉賴候事、

右條々若於僞申上者、

▽◎ 敬白天爵靈社上巻起請文事

謹請敬供、再拜〻〻、夫惟年號寛永十七年庚辰歳、月並者十二ヶ月、日數者三百五十餘ヶ日、撰吉日良辰而致信心請白、大施主等謹奉勸請、掛忝上者梵天帝釋四大天王　豹尾　黄幡　歳德　釋迦善逝　釋提桓因　奉宿刧　四天　八天　十二天　二十天　三十三天　十二神將　七千夜叉　廿八部衆第六天魔王　聖主　天之廿八宿地之卅六禽　百億須旃　百億梵天帝釋　百億鐵圍山百億閻魔法王　諸天　百億天衆　百億天人　百億天女百億童子　百億大力夜叉　百億惡鬼　百億天上　百億閻浮提中所顯現之大小神祇　上者有頂天、下者到金輪際而佛神、皆悉驚白言、堅牢地神　八海所備龍王龍衆十王十躰俱生神　太山府君　司命司祿　冥官冥衆　有情無情　辰星　南斗　北斗星　日耀星　破軍星　羅睺星　計都星　巨門星　明星　七夕星　八葉星　本命星四方四佛　五方五佛　大聖摩利支天　太白神大歳神八諸神　十二月將　天葬神　地葬神　阿豆知神　天神地神　海神　大神　金神　水神　風神　諸佛菩薩　諸善神　東方降三世明王　南方軍荼利夜叉明王　西方大威德夜叉明王　北方金剛夜叉明王　中央大日大聖不動明王　大黒尊天　毘沙門天王　大辨財天女　宇賀神十五童子　三寶荒神　多婆羅天王　武答天神頗梨采女毒氣神王　八王子　八萬四千六百五十餘神　金剛界七百餘尊　胎藏界五百餘尊　金剛藏王　晃蛇帝王　大聖金剛童子　普天率土愛染明王　妙見菩薩　過去現在未來三世諸佛　一萬八千軍神　二萬八千軍神　三萬八千軍神　四萬八千軍神　五萬八千軍神　六萬八千軍神　七萬八千軍神　八萬八千軍神　九萬八千軍神　十萬八千軍神　二千八百師天童子　一萬燈明佛　二萬燈明佛三萬燈明佛　藥師如來　寶生如來　無量壽佛微妙身如來　文殊　普賢　觀音　勢至　十六善神　八萬四千夜叉神　忝日域崇廟天照皇太神宮四十末社　外宮　八十末社　風宮　諸末社　八幡大菩薩　春日大明神王城鎮

守山王廿一社　酉百　根本尊師　立塔諸堂諸坊之諸本尊薩埵　祇園牛頭天王　松尾大明神　平野大明神　吉田　立田　熱田大明神　大原大明神　稲荷大明神　賀茂上下大明神　貴布禰大明神　北野天滿天神　三輪大明神　住吉大明神　卅番神　愛宕四所大權現　熊野三所大權現　十二所權現　九十九所權現　廣田大明神　金山權現　吉備宮大明神　對馬天王　羽黑山大權現　葛城大權現　峰々藏王權現　子守勝手大明神　梅宮大明神　法花廿八品　三藏法師　鞍馬毘沙門天王　吉祥天女　雨寶帝子　關東守護神　伊豆箱根兩所權現　三嶋大明神　鹿嶋大明神　富士大權現　白山妙理權現　立山大菩薩　諏訪上下大明神　出雲大社大明神　多賀大明神　御靈八所大明神　殊者氏神　摠者大日本國中六十六ヶ國大社　二千小社　五百九十二所大小神祇等、地藏菩薩　陁羅尼菩薩　龍樹菩薩　虛空藏菩薩　梅檀香菩薩　大病神　八萬四千鬼神　太恩神　歲破神　天蘇神　大疫神　太歲神　夜氣夜叉神　妙鬼神　六百五十餘神　金山六十二萬鬼神　刀八毘沙門天王　大天狗太郎房眷屬　九億四萬三千四百九十餘神　善貳師童子　八所大明神　善害坊　次郎坊　八萬四千眷屬　飯繩大明神　四萬一千眷屬　大天魔三萬三千　小天狗三萬三千眷屬　智羅天狗　十二天狗　八天狗等等、日域中山々峯々嶽々所居住之大天狗　小天狗等、各作群集而正路之旨照鑑給、若僞心於有之者、立處受白黑癩之重病八萬四千毛吼　四十二之骨節　日々夜々苦病無止、深厚蒙御罰、弓矢冥加未盡、佛神三寶雖作祈願、不可叶、於後世者、隨八寒八熱阿鼻無間大地獄、到未來永刼不可有浮期者也、仍靈社上卷起請文如件、

（重書下段）

寛永十七年二月三日　　相良滿右衞門判

四本六左衞門判

冨山弥右衞門判

竹宮十左衞門判

早水右京亮判

相良舍人佐判

有馬主馬首判
東郷喜右衞門判
二階堂阿波判
川上五兵衞判
鎌田彌右衞門判
兒玉四良兵衞判
（重書上段）
辨官新兵衞判
伊地知千□判
阿多□判
喜入丹後□判
新納二右衞門判
和田十助判
相良主計助判
頴主膳正判
家村長兵衞判
□判
□判

107
（本文書ハ八號文書ト同文ニツキ省略ス）

□判
眞□坊判

108
「御文庫拾二番箱四拾卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

今度家督相續就歸國、佐〻權兵衞爲　上使御鷹之鶴被遣之候、委曲可述口上候、恐〻謹言、

「朱カキ」
「寛永十五年」
二月五日

阿部豐後守◎（花押）
忠秋〔判〕

松平伊豆守◎（花押）
信綱〔判〕

松平薩广守殿

109
「仝上」

松平伊豆守
阿部豐後守△

◎
松平薩广守殿

110

尚以此表別條無御座候、近日可被成御參府之間、其節面上可得御意候、以上、

一筆致啓上候、貴殿儀政職被仰付、今度初而御入國ニ付、爲御上使佐々權兵衞方被指遣候、就中御鷹之鷂被遣、重疊忝可被思食と奉存候、定而貴殿儀薩州御發足可被成候之間、半途ニ而被成御逢ニ而可有御座と存候、委曲從各可被申入候間、不克詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」二月六日　酒井讃岐守忠綱〔判〕◎（花押）

松平薩摩守様
人々御中

◎松平薩广守様
參人々御中　忠綱

酒井讃岐守△

「光久公御譜中ニ在リ」

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶々伊地知利兵衞殿早々可被罷上由、先書ニ申下候、無油斷急度被罷上候様ニ可被仰付候、以上、

從江戸前後之飛脚、今日酉之刻於下之關參合候、然者上使様御國へ御下向之由候、野州老・兵少老よりの書狀之寫、爲御一覽進入申候、其御校量尤候、彼飛脚船にてハ延引も可有御座候條、從爰許陸地召下候、大坂へ　上使様も五三日可被成御待通候間、大坂船中之間ニ而可被成御逢歟と存候、左様候者其段飛脚を以可申入候、若御行違被成候者、其許へ可被爲通候、其許御馳走之儀者、成合候様ニ各御校量可被成候間、不及申候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」二月廿日　山田民部少輔有榮〔判〕◎（花押）

北郷佐渡守久加〔判〕◎（花押）

三原左衞門佐様
鎌田治部少輔様
川上因幡守様
圖書頭様
彈正大弼様
人々御中

▽◎ 彈正大弼様
圖書頭様
川上因幡守様　　久加
鎌田治部少輔様
三原左衞門佐様
／　＼
北郷佐渡守
山田民部少輔△

111
「雜抄」
知行名寄目錄
赤田村きろめき
下畠十四間十四間四畦廿歩大ッ九升　類右衞門
高　九升三合七夕五才
右之知行爲仕明地令支配候、後年軍役諸出物等無緩可被相勤者也、
寛永十七年
辰二月廿六日　　新納加賀守□

有村類右衞門殿

112
「光久公御譜中」
寛永十七年庚辰二月二十九日、爲參覲發麗府、家老北郷佐渡久加・山田民部有榮扈從歷赤間關、二月二十五日逢上使佐佐權兵衞尉長次於備後鞆、執政投奉書曰、今度家督相續而歸國、　將軍家賀之以　上使賜御鷹之鶴云云光久謁見長次謝恩榮之辱、且馳入來院伯耆重高乎武城奉謝之、三月十五日重高登江城　便殿(ニノマル)奉拜謁　家光公、公忝口自含　報詞加旃、同十七日徵重高於　西丸、惠賜御服二襲矣、二十一日重高來于相州小田原驛而傳報命焉、二十三日光久到江府、翌日松平伊豆守信綱爲　上使來勞問之也、同二十八日登　城拜謁　將軍家恩言頗叮嚀也、獻以御太刀一腰・御馬一匹代白銀五百枚・猩々皮十間・羅紗十間、且所陪從于參府之駕之家老亦次奉拜謁　將軍家、獻上御太刀一腰・御馬一匹代銀壹枚・御時服三領也、其後有日而進上于領國所產之龍蹄一匹、朝宗之禮下

儆之、

113

「北郷久加譜中」

寛永十七年供奉　光久公參武城、北郷次郎兵衞久利・祭主與左衞門重政從之、此勤仕之際因長野金山之事歸國矣、

114

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶〻鹽屋休兵衞被召置候通、野村大學助殿を以　御耳ニ入申候、御扶持方之儀者未相究候、於江戸又〻可申上候、

一書令啓候、仍去廿八日大坂へ被成御着船、目出度奉存候、明日如伏見之御上せ候、十日比ニ伏見可被成御立之由候、

一先月五日九日之御狀江戸へ罷通、飛脚爰許へ召置候、令拜見候、

一綾より參候熊之子可被飼立之由被仰付候へ共、死申ニ付、竹筒ニ入御もたせ候由、御狀相見得申候、爰許へ不參候、乍去死申候通者則披露申候、

一從琉球參候南蠻人二人、使兩人被相添長崎へ被送遣候由、七嶋平良之嶋へ參候唐人三人、長崎へ可被遣之通何れも致披露候、餘者追而可申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」三月二日

山田民部少輔◎（花押）有榮（判）

北郷佐渡守◎（花押）久加（判）

三原左衞門佐様

鎌田治部少輔様

川上因幡守様

圖書頭様

彈正大弼様　御報

◎彈正大弼様

圖書頭様

川上因幡守様

久加

鎌田治部少輔様
三原左衞門佐様
大坂　参　　北郷佐渡守
山田民部少輔　△

「末紙ニアリ」
辰三月二日之狀

一熊之子之事、
一從琉球參候南蠻人之事、
一鹽屋休兵衞被召直候事、

115
（本文書ハ一七號文書ト同文ニツキ省略ス）

116
「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

已上

前者蒲生之衆中田代新兵衞尉一向宗ニ而候故、御内被召離候、然處御火繩御用まてニ、御兵具衆より其身を被買取、飯米被下、火繩之儀可被申付候、身之代御物銀出候とても、其身者惣一向宗なミに永ゝ公儀へ被召出儀者、曾以有之間敷候、兵具衆又披官之様ニ可被召仕候、此由北郷佐渡守我等以國分民部少輔受　御意相濟たる儀候間、爲御屆之如斯候、恐ゝ謹言、

寛永十七年
三月廿日　　川上因幡守　久國（判）◎（花押）

兒玉四郎兵衞殿
東郷喜右衞門尉殿
平田藤右衞門尉殿
三原傳左衞門尉殿　御宿所

▽◎東郷喜右衞門尉殿　　川上因幡守
兒玉四郎兵衞殿
三原傳左衞門尉殿　　久國
平田藤右衞門尉殿　　△

117
「北郷久直譜中」

寛永十七年四月、久直爲　太守公之質赴江戸、家老北郷藏人久孝從之、

118

「在北郷家筑後久龍始伊豆忠置譜中」

御兄弟様達江御書札之次第

一兵庫頭殿・玄蕃頭殿・東市正殿・安藝守殿、此御衆江者御自筆之時ハ謹言謹言被成御留、或ハ兵庫頭殿と被遊、尤御脇付御座有間敷候、正月なとの御佳札なとの時ハ、恐ゝ謹言と可有御座候、其時も御脇付御座有間敷候、

一北郷式部太夫殿大略可爲御同前候、本ゝより正月ハ必從北郷殿ハ佳札を被成進上候、其御返書之時茂謹上書ニ、恐ゝ謹言と被遊候、津浦近年左様の儀無御座候、北郷殿もとハ殊之外大身に御座候、其時分ハ御弓箭最中ニ而候故、別而結構ニ御あいしらひ候と聞得申候、彼家規模之様申傳候、御家のつゝきハ豐州・佐多・新納・樺山・北郷如斯次第ハ御座候得共、如右北郷殿ハ御賞翫被成來候事、

寛永十七年卯月五日

從　光久様故兵部殿江以福屋伊賀御尋候時、如斯被爲申候也、

右正文在伊地知助左衞門重堯

119

膳符

一つね〳〵の振舞ハ二汁三菜但かうの物ともに、酒ハ三篇たるへき事、

一立入たる振廻之時者二汁五菜但かうの物共ニ、酒ハ三篇たるへき事、

一木具蒔繪物金銀はくの類停止之事、

右江戸御法度ニて候間、御國元之儀茂かたく可被相守者也、

十七年
辰卯月十二日

120

「光久公御譜中」

態申越候、爰許御沙汰仕合能滿足之段、可有推量候、

一爰許へ少も氣遣入間敷候、中途備後靭ニ而　上使佐ゝ權兵衞尉殿逢候、其後江戸へ去月廿三日參着候へ者、

翌日爲　上使松平伊豆守殿御座候、御目見者同廿八日
ニ相濟、　上意之趣忝儀候、たまし共入間敷候事、
一貴所之煩如何樣ニ成候哉承度候、利根ニて配劑無用たるへく候、紹意二位官なとへまかせられ可然候、必ゝ其心得尤候事、
一下野守下ニ付、條ゝ談合究候而申越候通可被聞候、左樣申付尤候事、
一細川越中守殿頃御暇たるへく候、就其其許へ懇ニ使者共可參と存候間、其使者へも大形ニ返事共候樣ニ心得可入候、又所望之物共可有之と存候間、其返事ニ薩广守留守ニ出間敷候由申置候間、江戸へ可申越と可被申候、貴所者利根たてニ而御懇ニ候間、自用達可申心得可有之候、曾而入間敷候、貴所者琉球方他國之走者なとを歸國迄被相濟可然候、不入隣國衆へ取入たてにて、越中殿なとよりの使者へも望候物とも出、心安樣子入ましく候、前ゝより被成來候とて、馳走あしく候、又かくれ〳〵出候物なとゝて使者所望ニまかせ達し有間敷候、越中殿こまか過たる人にて、爰許にても不似合樣子ニて御座候程ニ、用所達懇たて可爲無用事、
一高力攝津守殿・山崎甲斐守殿なとよりの儀者、以談合達しあるへく候、又所望なとを餘馳走たてにて、心安用所之儀者可爲無用事、
一貴所心持者殿下之人にて候間、何とかなとゝ被存儀惡候、江戸之大名衆者利根たてにて、亀相成儀共多ゝ有之間、馳走ふり入間敷候、薩广ハぬるく候所にて候間、所望なとハ遲く有候而尤ニ候、利根たてニ早速濟候儀惡存候、必ゝ貴所ハ利根たて多候間、餘所へ之利はつ可爲無用候、御國中者不苦候、能ゝ分別可入候事、
一御納戸之借銀之利付相濟候間、急度申付無相違樣ニ可被相濟候、人つふれ候事にて候へ共、ケ樣ニ無之候へ者御法度不立候間、不苦候條、申付可然候事、
一御兄弟衆之家中之女共多候間、八人程ニなしあるへく候、必ゝ無相違樣ニ可然候、
一膳符從公儀御法度之趣申越候間、可被相守候事、

121

「光久公御譜中」

一御兄弟衆も卷物之うら付之はかま、御國中可爲無用事、

一東市正事種子嶋へ可參由被申候へ共、可惡と申置候、狩なと二節ゝ可爲無用、學文專肝要候事、

一安藝守事も學文可然候事、

一其許萬端法度下野守へ申聞候之間、談合可然候事、

一顯娃左馬助・野村大學助無事二奉公被申候、其許にての沙汰之樣致相違、少も別儀無之候、猶ゝ口へらす候、新納右衞門佐も同前之樣子二て、らち明申候、其元諸事たまし共多候ハんと察入候事、

一御借銀者上方にて多成候間、其許其心得可入候、追而使參候ハん時分、巨細可申候也、謹言、

「寛永十七年」「朱カキ」卯月十二日　光久〔御判〕◎（花押）

彈正大弼殿

122

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中二在リ」

尙以金之出樣弥無相替儀候哉、重而委御申上あるへく候、將又米錢なと申請候ハヽ、相應二代物進上可仕候間、少も御物之費二有之間敷之由、是又得其意候、已上、

於祁答院長野金山見立堀候處、金出候樣子一段能候而、從肥後金山堀之者共少ゝ來、弥かね堀之もの過分二召寄、其落着候由珎重候、先砂金吹金少ゝ到來候、重而者堀出候金子三拾兩程も可差越候間、其節從公儀可致披露之由申來候、得其意候、金山之樣子無相違堀候もの共相集、金も出候樣二見究、慥二重而之注進相待候、依其趣可申付樣子共可有之候間、其內むさと麁相之儀共無之樣心得尤候、謹言、

「寛永十七年」「朱カキ」四月廿六日　光久〔御判〕◎（花押）

圖書頭殿

今月四日之御狀同廿五日ニ到來、具令披閲候、然者祁答院長野之金堀判屋之爲右衞門尉と申もの、當分主付候て堀せ申之由候哉、然處必定金出申儀無其紛候て、金山一段褒申之由、目出度儀不可過之候、先少ゝ砂金又ふき金御持せ候、則致披露候、　殿様被成御意候も、去冬佐多之御狩へ御越之時分、圖書頭殿金可有之樣ニ被爲申上候へ共、前方度ゝ左樣候て相違候間、しかと御請付も無之候つる處ニ、今度之注進者無別儀樣子と被聞召達候、殊金山より出候砂金又ふき金共被懸御目候、被成御覽御祝着不大形候、弥無別儀金子於出候ハ、重而慥成樣子被聞召、公儀へ可有御披露之由候、重而御吉左右待入候、圖書頭殿へも御直書を以被成御意、此儀ニ付被仰出樣子共候間、別紙ニ條書を以申候、然者一月ニ七八千人程にて堀申度と申之由候哉、左樣候ハ、一月ニ一人ニ付、七分充上納可申候、若金よく出候ハ、一兩充も上納可申之由申候哉、誠ゝ目出度候、金之出樣により上納之御定ハ次第ニ御談合入へく候、内ゝ承及候、餘せはしく被仰候へハ、堀手立退申樣子ニ候、又金子過分ニ出候處ニ、大形ニ可有之儀にて無之候、其御思慮肝要候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」卯月廿六日

山田民部少輔◎（花押）
有榮（判）

伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌（判）

北郷佐渡守◎（花押）
久加（判）

三原左衞門佐樣
鎌田治部少樣
川上因幡守樣
圖書頭樣
彈正大弼樣　御報

▽◎彈正大弼樣
圖書頭樣
川因幡守樣

鎌治部少様　　久加

三佐衞門佐様　参

北郷佐渡守

伊勢兵部少輔

山田民部少輔　△

「末紙ニアリ封面略ス」

一金山之儀御祝着事、

一金山ニ付御條書之事、

「御文庫廿三番箱廿一巻中」

覺うつし

一拙者ニ山先被仰候次第ハ、圖書頭殿御知行所之清右衞門并嶋原之吉右衞門、此兩人之者肥後國へ參拙者ニ申候ハ、薩广之國之内ニ金氣有之所を、清右衞門家來分之與右衞門見立申候間、功者之者を差越見せ候て、金山ニ仕立人連候へハ、若金山ニ成申候ハヽ、山先之儀ハ伊兵衞尉可被仕候、清右衞門・吉右衞門儀ハ不及申、與右衞門儀も勿論山先之望少も無之旨、右兩人之者書物仕候而、拙者へ相渡候ニ付、金堀共餘多召列薩广へ罷下申候、然處與右衞門申候所ニ、金氣無御座候故、無是非國元へ罷歸申候處ニ、圖書頭殿御城下之宮城と申所之代官餅田堅右衞門方江、右之清右衞門を被致使ニ、拙者方へ被申越候ハ、今一度薩广へ罷越、金山見立人連候へ之由、書狀越被申候、此段圖書殿御存知にて被召寄候、依之又薩广國へ罷越方ゝ金氣尋申候處、長野・横川二ヶ所見立候て、大分之金山ニ仕立御忠節申上候事、

一右之次第にて御座候故、山先役目拙者ニ被仰付候、然處圖書頭殿被仰候ハ、伊兵へ儀與右衞門養子ニ成候へ之由にて、御案紙被下、致書物候へと被仰候、然共右之筋目ニ違事、新敷被仰分御座候故、書物をも不仕、迷惑成通御斷申上候へハ、其後又如何思召哉覽、肥後山先地之山先と御名付候而、與右衞門拙者を別各ニ被成、兩山先ニ被仰付候、則證文御座候、然共壹人前之

德分をも終不被下候事、

一山先と申事、九州いつれ之金山にても、分一其外いろ〳〵德分被下候、僅之御山ニ而さへ如此之作法にて御座候、殊更薩广之御山ハ莫大之金山ニ仕立候ニ付、大分之金銀御所務被成候處、山先德分少も不被下、結句拙者自分之銀子大分入立ニ罷成、在所へも歸申事不罷成、迷惑仕候、如此之次第、薩广守様御耳ニ入候ハヽ、分一をも被下、其上ニ御褒美可被下と奉存候處、于今御耳ニも立不申由承、迷惑仕候事、

一右之段〻之次第、圖書頭殿并御山奉行衆中・圖書頭殿御内衆・有馬與三右衞門・鎌田萬兵衞◎〈尉〉・肝付七郎左衞門・關善兵へ・餅田堅右衞門子利右衞門・宮之城之町人清右衞門、右之衆中御存知被成事御座候、依之圖書殿當御地へ御座候内ニ御斷申上候事、

一右之通ニ御座候故、薩广之國にても又當御地ニても薩广様御家老中迄數度御斷申上候へ共、御取上も不被成及難儀候ニ付、薩广様へも書付を差上、其上ニて御評定場へ御訴訟申上候へハ、則御裏判可被懸御意之旨被仰出候故、忝奉存、去ル二日之御評定日ニ可罷出存候處ニ、肥後守留守居中ゟ拙者へ被申候ハヽ、薩广様御家老中江内證ニ而談合可有之候間、御評定場へ罷出候儀とめ候へ之由御申候間、相待候へと肥後守留守居中より被申候ニ付、不罷出候事、

「此一書年月日名前も無之、金山ニ相係事故前書之次ニ載置也」

124

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

一書令啓候、然者從　公方様犬追物之儀ニ付、被成御尋儀共候間、川上十郎左衞門尉入道可被參之由、　薩州様御意候、書物なと持參候様ニと之儀ニ候、其段被仰渡可被罷上儀尤ニ候、爲其一書如此候、恐惶謹言、

「寛永十七年」「朱カキ」
卯月廿七日

山田民部少輔◎（花押）
有榮〔判〕

伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌〔判〕

彈正大弼様
下野守様
川因幡守様
鎌治部少様
三左衞門佐様　参人々御中

北郷佐渡守
久加（判）◎（花押）

彈正大弼様
下野守様　久加
川上因幡守様　参　北郷佐渡守
伊勢兵部少輔
〆　山田民部少輔

庚辰六月四日御中間被下御暇罷下、使ニ参候川上芳齋之儀也、

125

「新納氏古日記」

寛永十七庚辰五月朔日晴天

一光久様日光江爲御参詣、卯之刻御發足、伊勢兵部少輔・野村大學助・新納刑部太輔・仁禮主計助・高崎惣右衞門・福屋五郎兵衞・三原傳左衞門尉・有川右近・野津弥五左衞門御供也、

同四日晴天

一日光　御登山、神前ニ御太刀一腰・御馬代銀三拾枚御進上、神樂料金子一兩、宮仕ニ青銅百疋、八乙女ニ青銅八百疋、毘沙門堂御門跡江銀子拾枚、學音坊・大樂院・巖殿院・本實盛院何れ茂同斷ニ而候、

同六日

一光久様　日光御勤相濟　御歸館ニ而御座候、

126

「御文庫三番箱六巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

親大隅守御取替候神文、今ニハ不入儀ニ御座候間、内々如申談候、可致返進と存、國ゟ取ニ遣候、參次第可令進入候、先下書御手前へ可被召置候、從大隅所之下書をも此方へ可給候也、

寛永十七年
五月日

「御案文ニテ御名ナシ」

細川越中守殿

127

「殉國名數抄」

寛永十七年庚辰

五月四日、土屋市之助島津圖書久通家臣なり、久通の嫡男左兵衛尉久武十六歳早世、跡を追て殉死、

128

「光久公御譜中」

家臣島津大和久章者、同相模久信之二男而光久之娣婿也、先是爲光久之使到江戸、任闕而辭邸舍、寛永十七年五月朔日舍京三條之市廛、同十七日有故逐電不知所在、久章之家臣等駭而索之不得、七月十日、來于紀州高野山蓮金院匿處、寺僧告之大坂留守居、竟召禁錮于薩寶福寺、經數歳、而謫于遠島之路、漫暴殺譴責之士遭戮、

129

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶〻申上候、大和守殿御行衛相知不申候ニ付、御内衆荷物共跡ニ見被申候へハ、御國元ゟ御持せ候御道具之内、無御座候道具御座候間、以別紙申上候、將又巨細之段、幸此度冨山弥一兵衛殿下國ニ而候間、委申含候條、可被聞召上候、以上、

態令啓上候、仍大和守殿江戸ゟ爲御歸國、五月朔日ニ京三條へ御着、御宿被成候而〔間〕、京都へ私之御用等被成相調候ニ付、御逗留候、然處同十七日晝時分ニ、何方へか御差出被成候て無御歸、御行衛相知不申候由、大和守殿役人衆伊地知大藏丞・伊地知杢右衛門尉在京詰前ニ而候處、木之下へ五月廿二日ニ參候て、如此之仕合之由被申出候、就其杢右衛門尉ゟ相良權兵衛尉大坂へ罷在候ニ、注進承候間、則致上京候而、方〻手分仕相尋申躰ニ候へ共、今日迄ハ一圓ニ御行方不相知候ニ付、御注進申上候、江戸へも右之通有馬左近將曹殿を以、巨細之樣子申上候、大和守殿御行衛相知候ハヽ、追〻御注進可申上候、誠惶誠恐謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」六月二日　　相良權兵衛尉　賴員（花押）

鎌出雲守様
三左衛門佐様
川因幡守様
下野守様
彈正大弼様
参人々御中

伊地知李右衛門尉
重政（花押）

130

「正文在加久藤地頭假屋」

尚々遠方迄態々御人遣之通、則賀州へ申入候、相良
喜平次殿内儀、京都ゟ舟一艘にて水俣へ下着由申
候、以上、

御狀具令披見候、仍求广表之儀無相替儀由、御注進承屆
候、相内藏殿遠行、此方へも其聞得候、佐敷・水俣番手
衆事、于今茂其分ニ而候、其後爲何様子も不相聞得候、
將又翌月様御骨高野江御のぼり、昨日廿二日ニ鹿府御打
立、阿久根ゟ御出舟之由候、
是又爲御存候、何そ新敷儀共候ハヽ、御注進互ニ可申
入候、猶期音候、恐惶謹言、

『寛永十七年寅』五月廿三日

『有川□兵衛』貞慶判
重時判
『宮原壹岐守』景之判

伊地知弥右衛門様
谷口次郎左衛門様　貴報

◎彈正大弼様
下野守様
鎌田治部少輔様　賴員
三原左衛門佐様　参　相良權兵衛
是枝喜右衛門尉

六月二日ノ狀十□夜定船鶴右衛門持下候、大和守様御事、
「此一書中李右衛門重政ハ季通カ先祖也、年間ヲ屈指スルニ、當明治
二十五年マテ二百五十三年トナレリ」

131

「御文庫廿三番箱廿一巻中」

覺　寫

一指用之刀一腰但貳尺九寸　道永　金つば　さやかいらき

一中脇指一腰但壹尺八寸　備前ものか　金つば　さやかいらき

拜領

一來國次貳尺五寸　金つば　但黑さや

同

一行光か長さ貳尺三寸　白さや

同

一合口脇指九寸五分　黑さや　白さめ

一脇指壹尺三寸か　黑さや　金つは

一脇指長壹尺三寸か　但白さや

一陳刀長貳尺五寸か　さやひるまき　惣金作

一同中脇指長壹尺三寸　さや右同　惣金作

一脇指長壹尺五寸か　白さや

一銀つは壹ッはつしもの

一小袖六ッ

一帷子五ッ

一かみしも貳具內壹具ハしゆす

一ふとん壹ッちりめん

一もうせん壹枚

一硯壹面

一銀子百四拾貳匁五分

右之分定被持せ候哉、見得不申候、其外ニも被持せ候物可有御座事も候へ共、覺不申候、

辰ノ

五月廿三日　　大和守內

伊地知大藏丞判

京都

御藏奉行衆中

「光久公御譜ニナシ」

132

「光久公御譜中ニ在リ」

覺寫

一前ニ御けいづ入申候箱ハ御座候へ共、御繼圖ハ無之候、國本よりも參候哉、又ハ不參候哉、不存候へ共、

御尋ニ付前之様子申上候、已上、

「朱カキ」
「寛永十七年」
辰
五月廿四日

大和守内
篠原渡右衛門尉判

京都
御藏御奉行衆中

寛永十七年六月三日

對馬守
豐後守
伊豆守
加賀守
讃岐守
大炊守
掃部助

133

「御文庫廿三番箱廿一巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

きりしたん宗門御禁制處、數年弘彼法事對日本惡逆、重疊至極ニ候、依之かれうた船渡海堅御停止之上、若無承引於差渡者、破却其船、乗來輩悉急度可行死罪之旨、去年以條數被　仰出候處ニ、令違背今度相渡事別而曲事ニ候、其上彼宗旨をひろむるもの、向後不可差渡之由、口上ニ者雖申來書面ニ不記候、右宗門之儀計ニ而、かれうた渡海御禁制之處、不書載意趣事僞謀之至也、然者乗來族悉雖可行斬罪、破却其船、頭分者并從類可誅戮之、此趣本國へ爲可告知之、下々之輩少々助身命可追屆之、自今以後、萬一船を渡におゐてハ、何之湊たりといふとも、見合ニ可處死罪之旨、可相含之者也、

134

「光久公御譜中」

覺

一きりしたんの宗門雖御制禁候、數年弘彼法候付而、かれうた船渡海御停止之處、今度長崎へ差渡之間、乗來輩死罪被仰付候、然者去年者領内浦々へ彼船就令着津者、湊へ入番を付置、訴訟於申上者、其子細可致言上之旨、以條數被仰出候へとも、以來之儀者右之船來候者、悉可行斬罪之旨候事、

一面ゝ領分之内海上見渡候所ニ、常ゝ番之者を付置、かれうた船來るにおゐてハ、はやく見出し候樣ニ可申付候、領内之浦へ彼船來候を、他領より見出候者、其領主可爲油斷事、

一かれうた來候を見出候者、高力攝津守長崎奉行中へ早速可注進之、并大坂へ可申越事、付隣國之面ゝへもしらせをくへき事、

一かれうた船たとひ雖見來、沖にかけ有之時、卒尓ニ取懸儀堅可爲無用、いつれの湊ニて申付といふとも、高力攝津守長崎奉行人可致差圖之由被仰付之間、可存其旨、但差當儀有之時者各別之事、

一かれうたの外唐船并吳國舟着岸之時者、此以前御仕置のことく、はやく船中之人數を改、陸地へあけす長崎へ可送遣之事、

以上

寛永十七年六月三日

右於嶋原被仰出候條書之寫

135 「御文庫廿三番箱廿一卷中寫」

吳國船領内之浦へ令到來、訴訟之儀於申者、船中之者氣遣無之樣致挨拶、〔到〕◎至長崎、以奉行人可遂訴訟旨相含之、差副案内者彼地へ可被越之候、若在其所而訴訟仕度と申候ハヽ、番之者を付置、其趣大坂定番衆・同町奉行・長崎奉行人并高力攝津守迄、早ゝ注進故、自然長崎江不相越、又ハ湊江船を不入、沖ニ在之而はし船を以於令申者、湊へ本船を不入、慥成者をも不差越候之間、江戸〔へ〕◎江可及注進樣なく、其上當所にハ通事無之候、長崎へ罷越儀不成候ハヽ、可歸帆之旨含候て、被相構間敷候、兎角日本江可爲商船渡海訴訟候間、彼輩不氣遣樣可被心得候、恐ゝ謹言、

二月十二日

阿部對馬守重次判

阿部豐後守忠秋判

松平伊豆守信綱判

136

松平薩摩守殿

「年間不詳故前書之次ニのせ考ヲ俟」

「光久公御譜中」

態飛脚差下候ニ付、一書申越候、

一細川越中守殿歸國にて候、定而用之儀共可被仰越と存候、左様之時分御懇間之儀と被存、馳走ふり入間敷候、

一所望之物共申來候ハヽ、留守中何方へも出間敷由被申置候間、薩摩守へ申遣、從此方御返事可申由可被申候、

一於爰許細川越中守殿へも直ニ相談申置候、諸事留守中何方へも國之爲ニ不成物共所望候とも、家老前々馳走ふりニ遣儀無用にて候、

一今度從肥後依所望駄馬拾疋爲被遣由候、以來共此方へ被尋候而、遣候へと申越候ハぬニ被遣儀、曾以無用ニ候、

一國元仕置之儀共、諸事松平隱岐守殿へ致談合候、又酒井讃岐守殿なとへも申合せ、又松平陸奥守殿家中、松平伊與守殿（ママ）・松平安藝守殿・松平長門守殿家中聞合候ニ、薩广之様子作法違候、先山川之儀領主被取候事惡儀ニ而候、皆公領ニ成候、次ニ此方へ質ニ被居候衆、又老中衆へ馬乗付候儀あしく候間、此元除候、松平陸奥守殿家中なとも聞合、如此候、諸大名衆家中聞合候ニ、國元ハ分限之衆いたし様、皆あしく候次第ニ致沙汰、なをすへき覺悟ニ候、

一松平隱岐守殿へ細ニ借銀之様子咄申候、又薩广之惡事共不殘咄申候へ者、殊外たわけたる儀にて候と被仰候、又ゝ不殘薩广之手之惡き儀共、咄可申覺悟候、こなたの借銀於難辨者、隱岐守殿家中之細ニ窮屈なる儀ニ候へ共、左様候而可致返辨かと咄申候、諸事聞合せ御年寄衆へも可申入内存候、薩广之様子者身構計ニ而、奉公之様躰他國へ違候間、能ゝ無用捨可被申と可被申渡候、松平隱岐守殿伊兵部所へ被成御出被仰候ハ、物頭無之候ハてハ不叶儀ニ候、諸事之儀、家老計承候而者難成候、主人より物頭へすくニ被仰候へ者、

申渡早速相調候、薩广之様子、悉老中被聞候て可相濟と、被仕候間、事相かわり不濟候、ケ様之様子替り候ハてハあしく可有之候、他國へハ曾而無之儀と聞得候次第ニ聞合可申下候、

一爰許町衆井上太郎兵衛尉、銀子取替候ニ付、去ゝ年從琉球ロ參候糸、其元へ人を遣請取候、其直段長崎割符候ねたんの由候而被渡候處、糸惡候而、右之直段之位ニ相違いたし、殊外損亡ニ罷成迷惑之由、我等へ目安を差出申分ニ成候、幸野村大學糸奉行にて候間、於爰許尋させ候へ者、是者於御國懸引にて糸を相渡かたく、書物を取置候間、少も仕様あしく無之由申かたまり候、就其、其元へ罷居候糸役人・筆者共可召寄由談合候、必定者未究候へ共、大學申分ハ麁相ニ候間、筆者共參候共餘替儀有間敷と存候、左様候ハヽ銀子なとニて無損亡様ニ、太郎兵へ可遣談合たるへく候、大學助右之ロ事之申分出來不申候、

一其許へ罷居候内、色ゝ爰許へ取沙汰候、松平陸奥守殿家中二ツニ成候由候、うそにて候、又加藤式部少輔殿家中之ロ事にて、御仕合惡由申候へ共、紀伊國殿　御成ニ御相伴にて候、皆申候儀不合候、左様ニ其方可有心得候、

一長野山金出候儀、圖書頭方ゟ申上せ候間、弥左様ニ申付候、猶此儀金堀之奉行ハ殊外様子有儀と申候、隱岐守殿家中へ金堀之様子爲存人御座候間、此方之人曳付書付之上ニ而、口上ニ聞せ候、中〳〵麁相ニ有之而罷成儀にて無之候、委聞せ候而可下候、可被得其意候、

一肥後宮内少輔入道慶宿言語同斷あしき人にて候間、差下候御内之御番、曾而入ましく候、御扶持可被召離候、其元色ゝ申分有へく候へ共、彼人ゝ能聞通り候間、屋形之茶之湯所之番なと曾而入ましく候、此由申遣候間、いつれへも其通可被申候、

一御厩預り之大山六右衛門尉、利はつ計ニ而仕様者惡候間、能ゝ申聞せ、御厩之様子なをり候ハてハ惡候、今度六十人計御中間入候、是も日養にて有之由候、不入

儀候、其許ニ而六右衞門尉へも談合にて有候ハてハと申候へ者、俄ニ利根ニ而御扶持御養被遣、不入御中間共にて候、仕様殊外あしく候、左様ニ惡事計被仕候ハ、、替り候ハてハと存候、能ゝ申聞せ候へく候、

一成眞房遠嶋仕候由承候、其許ニ而申置候ハ、遠嶋・死罪之儀者、我等へ被申聞せ候而、返事次第可被致と申置候處、龜相成儀無心元存候、畢竟氣任ニ候歟と存候、彈正被聞候ハぬ儀者有之間敷と存候、承度候、

一縱式部太輔其外兄弟衆被申候ニ、惡候ハ、、さし返惡様子を申候ハて、被申候とて其分ニ置候儀不聞得儀候、次第ニ可申遣候、

一此狀之趣、下野守・川上因幡守・鎌田治部少輔、此衆へ可被聞せ候、

一遠嶋・死罪之者共ハ、此方へ被爲聞、其返事次第あるへく候也、謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」六月十日　　光久（花押）

下野守殿

彈正大弼殿

137

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

一書令啓候、然者大和守殿去月此元御暇にて、京都へ五月朔日ニ被成上着、三條へ宿候而、同十七日迄被成逗留、十七日之書程ニ殿原一人・さうり取一人にて、何所共なく御出候、惣内衆も七日八日程被相待候得共、御座所不相知候間、伊地知李右殿道正へ被罷居候ニ、注進被申候ニ付、即三條之御宿へ被懸付候而、從御家中之細工稽古衆・與力衆、御家へ致出入衆にて、方ゝ相尋候へ共、五月廿五日迄者御行衞不相知ニ付、此方へ注進被申上候、自然不慮之儀共候而被成御果候共、從其所遲申出候ハ、、可及大事之條、少も無油斷、板倉殿へ可致披露候處ニ、無其儀候間、御果候ニ而者有之間敷候、定次第ニ者御座所可相知と被申候而、内衆も先一節者御行衞可承由候而、京都へ逗留可申由候間、大坂へ被罷下候而被承合

候様ニと申渡候、御氣違ニ而も候ハんかと存候へハ、内々御荷物なとも少々御退候躰にて、被召列候兩人ニ計御知せ候つる由申候、如此存之外成儀無之候、　薩州様も被成御驚候、先々當時之様子申下候、市來備後守殿迄各より内證にて可被申渡候、もはや殊外程久候間、御立歸者有之間敷と存候、猶委細者五代正介・山田十左衛門尉被罷下候間、口上ニ可申達候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」六月十日

伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌〔判〕

山田民部少輔◎（花押）
有榮〔判〕

北郷佐渡守◎（花押）
久加〔判〕

三左衛佐様
鎌治部少様
川因幡守様
下野守様
彈正大弼様
参人々御中

138

彈正大弼様
下野守様
川因幡守様

久加

▽◎北郷佐渡守
山田民部少輔
伊勢兵部少輔△

六月十日狀同廿七日御道具衆持下候、大和守殿儀也、

「光久公御譜中」

猶々金堀之様子共不案内にてハ難成候間、佐渡嶋なとへも參候而、よく存たる人於隱岐守殿之内ニ被居候間、新納右衛門佐・五代正介・山田十左衛門遣候而、面談ニて巨細之様子共段々聞せ候、中〳〵人すくなにてハ難成様子にて候、十左衛門跡より參候、先其許ニて正介口から可被聞候、いつれとも金堀之儀者、御年寄衆御返事次第可申下候、又此印判ニて

上卷封申候、◯（印）

一書申下候、

一薩广之作法惡罷成候、傍輩中を重し、奉公之樣躰あしく候、依其我等若輩之故歟、家老中を始國之仕置大形ニ候間、一人にてハ如何ニ存、松平隱岐守殿以面上致談合候、薩广之惡樣子家老中致樣あしき樣子、具ニ咄申候、隱岐守殿被仰候ハ、猶ゝ言語道斷之樣子にて候と被仰候、則酒井讃州へも可有御聞と存候、又松平陸奥守殿家中吉田仲兵衞殿・新納右衞門佐を遣、巨細之樣子承屆候、其咄ニも物頭とて頭ゝ御座候、家老中者何もかまハれす大形ニ候由候、家老中も三人計御座候由咄にて候、其外色ゝの儀共候、左樣之儀者面談ならてハ難達候、此由申遣候次第ニ、爰許談合ニ而可申下候事、

一此中我等女子兄弟衆買地被仕、過分ニ高を被上候、自今以後買地之儀曾而可爲無用由可被申渡候、縱買被申候共、高ニ入間敷候、如本ゝ被返付候樣ニと可申付候、其心得可然候事、

一先書如申候、惣而死罪・遠嶋もの可有之時者、何時も此方へ被申上、其上を以可被申付由申置候處、成眞房遠嶋仕たる由候、我等へ不被申聞候、何たる儀候哉承度候事、

一黃門樣御骨之儀、もはや御葬禮者於國元相濟候間、高野へ御上候儀ニ付、殊ゝ敷樣子ハ入間敷候處、人數あまた可被上せ之由承候、如何樣之談合ニ候哉承度候、若御兄弟衆其外誰ゝ之被申候なとゝ候て、我等申置候樣子を被相替候儀不可然候、是耳ならす何篇其心得肝要候、兄弟衆被申候とても、可惡儀者不指置被申候而可然候、爲其申置候事、

一細川越中守殿歸國にて候間、何篇被仰越儀雖有之、大形ニ被申候而可然候、所望之物共候者懇ふりニ被遣儀可爲無用候事、

一細越中守殿へ長野山ニ金出候儀咄申候へ者、於肥後金堀之もの共へ被問せ、樣子薩广之家老衆へ可被仰越由

承候、左様之時巨細ニ承、返事ハ大形ニ可被申候事、
一従肥後馬買ニ參候はくらう、此方にて越中守被申候と、狀共なしニ口上之儀共申候共、請付有間敷候事、
一何方ゟも所望之物申來候ハヽ、此方へ可被申候、私ニ被遣儀曾以無用候事、
一細越中守殿へ面談ニ談合申置候、國之爲ニ不成もの共ハ何方へも遣申間敷由、致談合候間、國之駒駄共ニ不遣候而も不苦候間、可有其心得事、
一松平安藝守殿家中・松平長門守殿家中・松平筑前守殿家中へも聞合せ、他國へ無之惡敷樣子共ハ、可除覺悟候間、可有其心得事、
一相良壹岐守殿と同清兵衞尉と云事御座候、樣子者、清兵衞尉相良家中を我まかせニいたし、壹岐守殿をよせ付不申候、清兵衞尉親類又氣ニ入候もの共へハ、よき知行をくれ、壹岐守殿つかハれ候ものへハ、惡所をくれなといたし候儀、壹岐殿ゟ御年寄衆へ被成披露、其穿鑿ニ而科可被仰付由相聞得候、ヶ樣之儀承ニ付、自然清兵衞尉參間敷なとゝ申候而罷居候ハヽ、薩摩ゟ人數共可相越儀も可有之候、其心得にて由斷有ましく候、若人數於參者、新納加賀守ニ勝目助左衞門尉を相付、人數をつれ可參候、それニ喜入久右衞門尉・猿渡新介・弟子丸五右衞門尉・佐良羅善介、今一兩人もかるき功之入候衆可相付候、其外鹿兒嶋より一人も若き衆入ましく候、若參候ハヽ、其沙汰ゝあり曲事と可被申付候、若又此人數ニて難成仕合共候ハヽ、近邊之地頭衆あまた可被申付候事、
一右之人衆被參候儀少も他言有ましく候、内ゝ此意得いたし、注進次第可被申聞候也、謹言、

「寛永十七年」六月十九日　　光久〔御判〕（花押）

鎌田治部少輔殿
下野守殿
彈正大弼殿

139

「光久公御譜中」

教先考家久之遺骨納之於高野山、一乘院覺因法印家老川上因幡久國使役平田狩野宗弘奉之、寛永十七年五月二十二日發麗府、六月二十五日著船于大坂、同二十九日登山納遺骨、七月四日於蓮金院、集百十口之僧侶、執行大曼荼羅供、青巖寺爲(導)〔道〕師、

140

「綱久公御譜中」

綱久
女子於滿
女子於辰

寛永十七年庚辰六月廿三日誕生、母家臣松澤八右衞門女

家臣島津美作久憲室

▽○元祿三年庚午九月二十三日卒、法名瑚窓貞珊大姉、△

141

「御文庫拾九番箱三拾五番中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶ゝ四國之生駒殿家中家老衆、口事篇出合一方被取退たる由申候、又相良殿家中へも何そ入組有之由申候、細ニ承究追而可申候、以上、

一書申入候、仍　花心様御骨も昨晩大坂へ被成御着船候、爰元へ蓮金院ゟも使僧被爲付置候間、御法事之日取御嫌日を相除、一乘院細ゝ被成談合候、來廿九日ニ此地を御打立被成、來月三日四日ニ御法事可被相調由候、御藏奉行衆之諸事被調置由候、蓮金院も萬事相調候由、使僧被申候間、隙も入申ましく候、今度者一圓ニ順風無御座候故、船中延引之躰ニ候、於様子ハ下向之時分委細可申入候、將又大和守殿儀笑止千萬驚入たる儀ニ候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」六月廿六日　　川上因幡守久國(判)◎(花押)

彈正大弼様
下野守様
三左衞門様

鎌治部少様　人々御中

▽◎
彈正大弼様
下野守様
三左衛門佐様
鎌治部少様　参

久國

〆　川上因幡守　△

142
「北郷久直譜中」
寛永十七年七月朔日拜謁　家光公、此時松平越中守定綱・酒井讃岐守忠勝・松平伊豆守信綱遣書於久直、有正文左記之、

143
昨日者御入來之處、御城在之不□[克カ]面談候、今度首尾能御目見ニ而、忝之旨被仰置候通、御尤候、依之爲御祝儀御太刀・馬代銀并帷子五之内單物二御持參、忝存候、猶期後會之時候、恐惶謹言、

七月二日　信綱㊞(花押)[判]

松平伊豆守

〆　北郷式部様　人々御中　信綱

144
先刻者御尋喜悦之至候、其節罷出不能面上、背本意存候、就中琉球布卅疋被懸御意忝存候、何様重而可遂閑談候間、不能詳候、恐惶謹言、

七月二日　定綱㊞(花押)[判]

松平越中守

〆　北郷式部少輔様　人々御中

145
昨日者御仕合よく被成御目見、忝思召候由尤存候、就其私宅へ被成御出之由、殊今度御參府候爲御祝義、御太刀・馬代銀子一枚并帷子五之内單物二被懸御意候、定御懇意之段忝存候、猶重而期面上之時候、

七月二日　　〔□〕判　（花押）

酒井讃岐守

□

北郷式部様　人々御中

翌年九月久直下國、

146

「光久公御譜中」

猶ゝ無量壽院方兵部少殿へ御狀參候間、もたせ申候、以上、

一書申入候、然者去四日於高野蓮金院へ大曼荼羅供之御法事御座候處、嶋津殿御事ハ他家ニ相替、無餘儀御家ニ而候間、被成御馳走候ハて不叶儀ニ候と御座候而、御導師其外諸役者ニ至迄、此方へ不及御談合被相定候、大曼荼羅供上之儀式と聞得申候、三時と申行事、僧衆五十一人ニ而、一日ニ三度ツヽ三日御座候、論儀等も結構成儀式近年無之樣子と取沙汰ニて候、就其御禮布施物等殊外銀子入申候へ共、公界之儀ニ候條、可仕樣へ無御座候、色ゝ可申入儀御座候間、別府長次郎殿を以申候分限之衆ハ、御賦銀も入申候間、如何と存候へ共、輕キ衆ニ使共可被申入無御座候間、如此候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」七月九日　　川上因幡守　久國〔判〕　（花押）

北郷佐渡守様

伊勢兵部少様

山田民部少様　人々御中

147

「光久公御譜中」

覺

一今度於蓮金院去四日、大曼荼羅供之御法事、事能相調候、御導師之儀蓮金院方寶性院へ被申入候へハ、寶性院・無量壽院御談合之上を以、青巖寺へ被仰候故、被成御出候事、

一御法事ニ付、學侶方之高僧達、此方方ハ不申入候處、不殘被成御出候、ヶ樣之儀ハ終無之事ニ候、一段御外

聞之儀候由、何も取沙汰ニ而候、寶性院・無量壽院へ御書なと御遣、御禮被仰候てハ如何可有御座候哉と存候事、

一蓮金院へ　花心様御牌堂御立被成候ハてハ、成合申間敷候、諸大名衆之御寺、何も御牌堂御座候、就其指圖相下申候、堂御立被成候て奉行被仰付可爲尤由、李右衞門尉殿・權兵衞尉殿被申候事、

一蓮金院へ可被成御座　黄門様之御影之儀、繪像・木像之間何共未相究由候、高野ニて一乘院・蓮金院・平狩野殿・相權兵衞尉殿・伊李右衞門尉なと致談合候、繪像可然候ハんかと出合申候、其故者　御位牌之圖師大キニ御座候、其御前ニしやりたうの圖師御座候、木像ニて御座候ハヽ、圖師三ッ正面ニ御重りあるへく候間、繪像可然候ハんかと出合申候、　惟新様御影も繪像ニ而御座候事、

一花心様御石塔之地、行人方自性院と申覺悟之地を此方へ被賣上候而御石塔立候處、行人中ゟ彼坊主學侶方へ地を被賣候間、可追出之由、江戸へ御座候文珠院へも申越候、就其自性院迷惑ニ及候間、被仰分候て被下候様ニと一乘院へ被申候、文珠院之後住、見樹院と申出家、一乘院知人ニ而候間、自性院可被追出儀、何とそ御用捨被成候様ニ賴存候由、被仰候へハ、隨分調候て見可申候由、返事ニ而候事、付當春文珠院へ於高野灌頂を可打由被相企候處ニ、學侶方ゟ被申留候故、當分行人方と學侶方不通ニ罷成候事、

一貫明様御石塔之地盤石われ候て、塔かたふき申候、多分當年中ニころひ可申候、何分ニ可被仰付候哉、殊外口能有之儀ニ候事、付御牌者蓮金院へ御座候事、

一御法事入目之儀者、御藏奉行衆ゟ可被申上候事、付大曼荼羅供之人數百十人、三時之行事五十一人ニ而、三日中日ニ論儀も御座候事、

「朱カキ」
「寛永十七年」
庚辰
七月九日　　川上因幡守

『入來院氏文書家臣入來院直記藏』

態令申候、

一求广相良殿家老清兵衛殿『相良頼兄』女房之子犬童半兵衛と申人、清兵之留守番被仕處ニ、一昨七日之未明ニ壹岐守殿『頼寛』之御留守居衆方ゟ取圍たるとも申候、内ゟ切テ出候とも申候、半兵子息ハ一手にて切出候を討果、半兵ハ人數四百程にて楯籠之由候、清兵宿所ハ燒拂之由ニ候、内ゝ自江戸聞得申ハ兩說ニ而候、一ニハいにしへ奈須し『紙摺字面不知』『椎葉』るは山之口事再發候而、公儀へ相手之方ゟ訴訟申、清兵被召寄と申候、一ニハ清兵一類黨類驕候ニ付而、可致成敗と御披露候へハ、　權現樣已來御存之者之儀候間、於江戸被遂御穿鑿而之上、誅罰あるへき由被仰出、清兵を呼ニ參と申候キ、然處ニ清兵ハ去月廿二日早疾肥後内左敷ゟ出船之留守ニ起たる事ニ候、堺ニ誰も無之ニ付而、『讃良』『貞賢』長門守殿『重高三男、出爲姉婿樺山權左衛門久盛養子、名忠重』飯野へ今日被爲越候、皿良善助相付被參候、俄之儀にて供衆も無之候、先懸付而御越候へと申事御座候、功者之儀五人も三人も早速其方ゟ可被遣候、飯野之番手ニ被爲越候、『重高』『時在江戸』伯州老御留守之儀候條、各被入御精候ハて、『石見守重頼年十二』『島津歳久ノ女重時ノ室』御若輩と申、養母も煩最中、總州も留守ニて候、其上未馴内之衆ニ而候、心遣存候間、其方御家老之内ゟ一人被爲見廻候而も苦間敷候、其外物之差引をも可申功者、早ゝ可被遣候事、

一爰許山奉行兩人我等へ之内證にて候趣ハ、御分國中山之儀、別而當　御代ニ堅固ニ改候處ニ、入來ハ行司二人分之知行を數年被下置候間、一人分ハ曾不相應候、是を及御沙汰候者、所之地頭代之儀ハ不及申、御地頭之御油斷ニも可罷成候一大事ニ存候間、我等迄申入との儀ニ候條、當座ニ申候ハ初而承候、それハ如何樣之儀ニ候哉と尋申候處ニ、何處も行司二人も知行二石とやら、三石ッゝとやら被下候、一人分ハ一人于今持來候、一人分多年有所不知候、餘之無正躰事ニ而候由、到吾等被申候間、承たる分ハ笑止ニ存候、伯耆守留守『是年正月廿九日重高從光久公如江戸』『重高二男』『久盛』『樺山忠重』之儀候、我等方ゟ美作殿・長門殿へも可申候へとも、『島津大隅忠榮養子』立入候而迷惑ニ可被存候、先我等承屆可申入候間、其

内御沙汰被爲待候へと申置候、地頭代之衆へ内談候て、然ゝ物を申わけ、人を近ゝ被差越、様躰承度候、一志岐小左衞門殿へ内ゝにて可被仰候、求广急ニ不事濟候者、上使大口・加久藤邊迄可有御下向かと存候、於其儀ハ御馳走士衆可被相付候、小左殿御事も其内たるへく候と、出合申候由可被仰候、以別書可申候へとも、三日咳病氣ニ而、是さへ漸調申候、恐ゝ謹言、

『寛永十七年』七月九日　辰刻　彈正大弼　久慶（花押）

入來院左兵衞殿

東郷吉兵衞殿

種子田久左衞門殿　御宿所

149

（張紙）「御譜中ニ無之」

「御文庫廿三番箱廿一卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

うつし

猶ゝ不思儀之仕合ニ候、以上、

今日申ノ刻ニ大和守殿蓮金院へ御登山候、早ゝ蓮金院ゟ飛脚差下候、其元可然様ニ因州へ被仰上候て可然候、予也有合候間、先ゝ懸御目候、御存分之躰一向不承候、蓮院ゟ可被仰候、十六日ニ罷下可得御意候、先以早ゝ如此候、恐惶頓首、

「朱カキ」「寛永十七年」夷則十日　一乘院在判

相良權兵衞尉殿

伊地知李右衞門尉殿　人ゝ御中

150

「光久公御譜中ニ在リ」

うつし

尚以御存分ハ如何様共不承屈候へ共、先ゝ一左右申上候、蓮金院へ直ニ御付被成候、是又爲御心得候、以上、

態以飛脚致啓上候、然者大和守殿今日申之刻ニ當地へ御越被成候様子、内ゝ被仰聞候之間、則以壹人申遣候、委

151

曲御返事ニ承度候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」七月十日　申ノ刻　　蓮金院秀傳在判

相良權兵衛尉殿

伊地知杢右衛門尉殿　参

『右ノ杢右衛門トアルハ季通カ先祖也』

「御文庫拾九番箱三拾五卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

追而申入候、今日未之刻ニ高野蓮金院爰許御藏衆迄、以書狀被仰越候、大和守殿去十日ニ蓮金院へ御出被成候、兎角之樣子ハ未被爲聞候へ共、先御注進被成由候、一乘院も盂蘭盆を高野ニ而可被成由候而、于今彼地へ逗留被成候、同前ニ書狀參候間、うつし差下申候、此元へ和州役人伊地知大藏允被罷居候間、御藏奉行衆付衆之內一人相付、明日高野へ差上せ、何とそ御國へ御下向候樣ニと申させへき由、談合申候、數日無御出候間、　御前を心遣ニ被思召樣子ニ候ハヽ、國分之三光院を相付可申候、其上ニも重ク被思召候ハヽ、一乘院可有同道哉と、狩野（本田宗弘）介殿・權兵衛尉殿・杢右衛門尉殿談合申候、江戸へも則飛脚を以申上候、巨細五右衛門尉へ申達候間、可被聞召達候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」七月十一日　　川上因幡守◎（花押）久國（判）

彈正大弼樣

下野守樣

三原左衛門佐樣

鎌田治部少樣　人々御中

▽◎彈正大弼樣

下野守樣　　久國

三原左衛門佐樣

鎌田治部少樣　参　　川上因幡守△

七月十一日之日付大坂ゟ大和守殿儀ニて候、山（崎）◎路五右衛門尉殿持下候

152

「御文庫拾九番箱三拾六巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

追而伊地知弥右衛門尉殿迄、去八日ニ爰元之様子御注進申入候、各様へ直ニ可申入候へとも、手前取紛申ニ付て、乍御六ヶ敷御注進被成候て可被下之由申入候、如何(相)居事候哉、無御心元奉頼候、以上、

被入御念御使札忝致拝見候、然者清兵衛江戸へ召登せ候へとの御諚候由、壹岐守申越候付て、去月廿日ニ爰許罷立候、然所ニ清兵衛留主居之者又犬童半兵衛致同心全逆心、種ゝ氣任申ニ付て打はたし申候、もはや無殘所相濟申候間、可易御心候、各様被掛御心、御懇之御使之通壹岐守へ具ニ可申聞候、必壹岐守より御札可被申入候、猶御使者へ口上ニ申達候條、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」七月十一日

菱刈美濃守 重綱(判)(花押)
米良三左衛門尉 □(判)(花押)

三原左衛門佐様
鎌田治部少輔様

嶋津下野守様
嶋津彈正忠様 貴報

▽◎嶋津彈正様
嶋津下野守様 重綱
鎌田治部少輔様 頼貞
三原左衛門佐様 参

菱刈美濃守
米良三左衛門尉△

〆

辰七月十一日付求ノ出合之儀ニ付返札、

153

「御文庫拾九番箱三拾六巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

預御飛札令拝見候、相良壹岐守殿家中相良清兵衛江戸へ罷下候ニ付而、何共無心元子細在之儀候哉、去六日ニ神瀬外記と申者從江戸使を被越、犬童孫太郎儀如前

世仕置可申付候由申渡候所、犬童半兵へ使之者迄召搦致成敗、則清兵衛屋敷へ一門與力之者共はし〳〵楯籠候、□壹岐守殿家老之者共打果申候、上下雑兵三百人餘相果候由候、最早彼地事靜候條可心安候、近國無心元思召候處、尤ニ存候、無御油斷被仰越候趣、令得其意候、

一嶋津野州へ申入候、其後ハ取紛不懸御目、御床敷存候、御無事ニ其元ニ御入候由、何方之事ニ候、何面上之節可申承候、就ハ三原左衛門方へ申入□、先日ハ御出之所ニ取込候故、御馳走も不申入本意之外ニ候、猶重而可申承候間、不能具候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」七月十二日　　高力攝津守　忠房〔判〕◎（花押）

嶋津下野守殿
嶋津彈正殿
三原左衛門殿
鎌田治部少殿

▽◎
嶋津彈正殿
嶋津下野守殿　　高力攝津守
鎌田治部少輔殿
（三原左衛門殿）
□
□　方　△

154
（本文書ハ二六七號文書ト同文ニツキ省略ス、但シ年季ノ注ナシ）

155
「光久公御譜中」
薩州祁答院長野村（屬隅州曾木）深山有黄金氣、覷其氣者知焉、國老以告之、故光久訴之乎江府、請聽堀黄金、執政許之、于是以北鄕佐渡久加爲金山總監司、諸吏附焉、石工窰夫從四方聚來者以萬算、其穿鑿巖石響音硠磕（カンカイ）焉、採金石雜然者而摧抹之、以鐵碓盛之盆器而洒流水、則石粉隨水去、金屑止在盆、投之鍛鑪鑄出黄金者月數百斤也、

156
今度金山御立候ニ付被相定條〻
一金山惣奉行之儀、北鄕佐渡守へ被仰付候間、不依何時

金山之儀ニ付、家老中へ談合之儀有之而、從佐渡守被申越候ハヽ、少も無滯其時々ニ相濟、金山之用所相達候様ニ可有談合由被仰出候事、

一米之賣直之儀次第あがりに可有之様に、山之さかへやうにより可相定候、始より餘高直ニ候へハ、つとひ候衆引退、山さかへさる由候間、御藏入之米可被賣様子、其心得可入候間、金山奉行衆へ談合候而可被賣事、

一諸役人衆之家作、以談合可被仰付候、いかにも輕々被爲作可爲尤事、

一於此方今度相定候奉行衆之内、若差合共於有之者、重而被立　御耳、落着可有候、間之儀者、其元御家老中以談合先々被相定、可爲尤之由、被仰出候事、

一金山諸奉行之外浮衆、今度以御書立被　仰出候衆之儀者、佐渡守以見合、何ニ而も奉行可入時者、右之衆之内可被申付候由、被　仰出候間、難澁不被申様ニ、かたく從御家老中可被申渡之由候事、

一諸地頭諸奉行諸役人へ急用之時者、家老衆へ尋ニ不及、直ニ可被申渡由、佐渡守へ被仰聞候間、其段各へ可申達之由　御意候條、右之衆へ内々被仰渡尤候事、

一殿役奉行・山奉行、金山へ可被相詰之由、可被　仰渡候、山へ取付候時分、殿役なと急ニ入可申候、山之様子諸事あり付候而より、殿役奉行入間敷候哉、山奉行ハ次第ニ弥可入歟と存候、いつれも右之衆逗留之儀者、山之様子次第たるへく候事、

一諸國之商人金山より他國へ通用之時、○通手形之儀、北佐州ゟ可被出候由相定候間、可有其心得候事、

右條々達　上聞所相定、如件、

「朱カキ」「寛永十七年」辰七月廿四日　　伊勢兵部少輔

山田民部少輔

三原左衞門佐殿

鎌田治部少輔殿

川上因幡守殿

下野守殿

彈正大弼殿

157

「御文庫三番箱六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

一金山惣奉行申付候上者、諸事無用捨爲ニ可成儀者入精可相調様ニ、分別可爲肝要事、

一何時も金山之儀ニ付、家老中へ談合可入儀可有之時者、少も無緩疎急度談合可相濟由、家老中へ申遣候間、可有其心得事、

付諸地頭・諸奉行・諸役人へ急用之時者、家老衆へ不及尋ニ直ニ可被申渡候、其段家老衆へも申遣候事、

一金山之儀法度餘こまか過候へ者、從諸方來候衆致退出之由候間、先ゝ山さかへ候様分別尤ニ候、山之様子ニより次第ニ法度相改候而可爲尤事、

右之旨堅可相守者也、

寛永十七年七月廿五日

北郷佐渡守殿

158

「圖書頭久通譜中」

我之　太守領知薩隅二州・日州一郡及琉球國、其領地與聲譽甲于諸侯、雖然得宅地於武藏州江戸城郭中、與諸侯俱造立華美屋形、携妻子居其地、而每隔年雖得歸國之免、在于國者、僅不過七八ヶ月、因茲在旅與往還費金銀如土塊、故借京畿及東關之商賈當費用矣、其債漸積算數多矣、欲償債主、而不能也、久通寤寐憂貨財之不聚官庫、而不顧私財之費、求得堀金銀爲其業者於國中、使之往彼此山川、求産地、寛永十七年庚辰往薩摩州祁答院長野山中、堀得砂金、即告之於官家、其聲漸達四方、未招自西自東自南自北、無金堀無商旅、爭先來聚、山中盛々焉也、於茲乎、獻之於　太守、故聚斂山中土産、所以補債主之償、實孔衆也、同二十年癸未之春隨　將軍家之禁令、停堀金事業矣、

159

「御文庫拾九番箱三拾六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶ゝ松平石見守殿・生駒壹岐守殿内衆、去廿六日於方ゝ切腹被仰付候人數、不入儀なから書立進入申候、以上、

一書申入候、

一高野之御法事無吳儀相濟、目出度候、委細之段者川上因幡守殿可有御物語候間、不及申候事、

一此御地相替儀無之候、乍去此中生駒壹岐守殿・松平石見守殿家中沙汰相究、生駒殿ハ一萬石ニ而、出羽之ゆりと申所へ被遣候、石見守殿ハ子息へ壹萬石被遣、松平相模守殿へ被成御預候、讃岐之國者廿五萬石程と申、石見守殿者七萬石ニ而御座候つる、内之者共と口事を被成、一萬石ニ而如斯御成行候、さこそ可爲御分別之上候事、

一相良殿之儀も清兵衞此方へ參候、稻葉美濃守殿御預ニ而候、求广へ私事共仕出候ニ付、其様子爲可被聞召、今月廿日ニ能勢小十郎殿・二神半兵衞殿爲　上使御打立候、彼衆無御參府内者、御沙汰可相延由候、喜平次事者五六年已前より、清兵内藏助へ達而吳見被申、是非求广之仕置被相替候へ、諸侍百姓ニ至迄勞果、明日何事候共、馬を十騎と被出儀罷成間敷候、其外清兵内藏分別を被替候ハてハ、相良之家可相果候、然時ハ兩人身上之儀もつぶれ候ハん間、是非共其覺悟候様ニと候而、再三吳見候得共、若輩不似合儀を被申なとゝ候て、無承引候ニ付、安倍四郎五郎殿へ以書物、祖父親之無分別之様被申入、去年内藏助在國候を被召寄候て、吳見被仰聞可被下由被申候間、從四郎五郎殿内藏助へ狀を被遣候へ共、何角申候而不被參、今度上候而急ニ被相果候、如斯候ニ付、喜平次身上者有別儀間敷由、四郎五郎殿なと被仰候事、

一生駒殿・松平石見守殿なと御沙汰之様を被聞、相良殿も如何様ニ可被仰出候哉、氣遣之由候而、殊外精誠有之由、彼家中衆被申候、災者從下と申本語(悟)、弥あい申候、今度御身上御果候衆、皆其分ニ候、尙期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」
七月廿九日

山田民部少輔◎(花押)
有榮〔判〕

伊勢兵部少輔◎(花押)
貞昌〔判〕

159の2

（張紙・墨書）
「此名書ハ御譜中ナシ」

松平石見守殿内

伊駒壹岐守殿・松平石見守殿家中衆之儀也、

▽◎彈正大弼様　　有榮

下野守様

川因幡守様　参

山田民部少輔

伊勢兵部少輔△

〆

「末紙ニ封面ノ名略」

彈正大弼様　人々御中

下野守様

川上因幡守様

三原左衞門様

鎌田治部少様

相馬大膳殿預

仙石越前守殿預

何方へ歟預

丹羽左京殿預

眞田伊豆殿預

切腹　伊木野伊織

同　同名次左衞門

同　大原久左衞門

同　寺西仲左衞門

同　菅友伯

小川四郎左衞門

別所六左衞門

牛尾四郎左衞門

切腹　杉谷多左衞門

同　丸山忠兵衞

同　山元喜左衞門

田邊三郎右衞門

石丸六左衞門

小川二郎兵衞

切腹　小寺八郎右衞門

同　宇津孫右衞門

同　山脇久左衞門

同　鈴木平右衛門
同　菅三太夫
同　同八郎右衛門
同　大原源左衛門

右仕置衆

小出大隅守殿
蒔田對馬守殿
新庄右近殿
下嶋市兵衛殿

生駒壹岐守殿内

切腹　石崎若狭
同　前野次太夫
同　森出雲
同　上坂勘解由
生駒左門
生駒帶刀
三野四郎右衛門

森内記殿預
松平出羽守殿預
京極丹後守殿預

追拂　生駒河内
同　多賀源介

右仕置衆

青山大藏允殿
井上筑後守殿
一柳丹後守殿
能勢四郎右衛門尉殿

160

「御文書藏拾九番箱三拾六巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

竹下助太夫・森喜右衛門尉を以被仰上候趣、具致披露候、然者三原左衛門佐・町田勘解由次官、有馬表へ被罷越　上使被仰通被承御條書、御奉書慥相屆候、右之　上使かゝ爪民部殿・野ゝ山新兵衛尉殿御事、去月十九日ニ當御地へ被成御着、廿一日之朝兵部所迄民部少殿より被仰越候ハ、一昨日爰許へ御着候、長崎之儀ニ付、被仰子細候間、誰今壹人致同道、早ゝ可參之由候間、其段申上

候付而、新納右衞門佐同道申候而可參由　御意候間、則兩人參候處、九州へ御下候而、於有馬表、其許よりの爲御使三原左衞門佐殿・町田勘解由殿へ被成御逢、様子被仰渡候へ共、從御國ハ定ちと遲可相聞得候間、今度被仰出候條々　薩摩守殿へ被仰入之由候而、委敷兩人へ被仰聞候之間、其旨申上候、就其、左衞門佐殿於有馬上使へ爲被得御意儀共候内、琉球之儀、最前從　公儀兎角不被仰出候間、とかく無御返答候、又甑嶋へ鐵炮之玉藥之儀なと、私ニ者御返事難被成候而、被聞召置候、於爰許御年寄衆へ被得御意候者、　上使御兩人よりも可被仰候哉、いかやうにも御分別次第之由候ニ付、酒井讃州へ被成御内談、御兩所を御頼候而、御家老中へ被仰入候、未其御返事無之候、如何様可被仰出候之間、其節細々可被仰出候、雖不及申候、兩甑・坊之津へ番衆被召置、自然不審成船共通候時者、早々有馬・長崎へ御注進之覺悟肝要ニ候、從　公儀者兩甑・坊之津へ遠見を可被爲置と御書物ニ御座候へ共、定野間之崎之儀を坊之津と被遊候歟と、各爰許ニ而被申候、其段者於其許御談合尤候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」八月三日

山田民部少輔◎（花押）有榮〔判〕
伊勢兵部少輔◎（花押）貞昌〔判〕

三原左衞門佐様
鎌田治部少輔様
川上因幡守様
下野守様
彈正大弼様　人々御中

▽◎
彈正大弼様
下野守様
川上因幡守様　貞昌
鎌田治部少様
三原左衞門佐様

伊勢兵部少輔

山田民部少輔
△

庚辰八月三日江戸ゟ竹下助太夫持下候、御消具衆持下候、
〃〃〃〃〃〃〃

161

「光久公御譜中」

以上

此地御立之時分者、少御機色惡御座候つる、路次中無吳儀御座御下着候哉、金山之儀御歸國候而被御覽、如何候哉、早〃様子承度候、山榮申候へかしと、日夜是而己存事候、雖不及申候坊之津へ銀子出候由、其元從御老中衆御注進御座候つる、左様之所も能〃御ミせ候而尤ニ候、將又今度我等書狀を取、池田屋平右衞門尉・堺屋太郎兵衞尉方其元へ罷下候、彼おやかた池田屋四郎兵衞尉と申候而、　上様之吳服屋にて殊外身上大き成人と相聞得候、左様成衆罷下儀一段目出度候、漸身過之躰成衆者、如何程參候而も、國中之米を買、其外種〃之物を買候儀不罷成候、ヶ様之衆參候程、御國之物うれ候而御爲可然候、酒ニ而も油ニ而も餘多座仕度と存之由候、其段者於其元貴様へ被得御意候様ニと申渡候、内〃其御心得尤ニ候、なにとそ被成他國より大勢商人付合、御物并諸士之八木等うれ候様ニ御座候而、御國致富貴候様ニ御才覺候ハヽ、御借銀御返辨之御爲可然候ハん間、能〃其御心得可爲肝要候、御書物ニ被成御判御給之上者、餘脇へ無御遠慮諸事はか行候様、御肝煎尤ニ御座候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」
八月三日　　伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌（判）

北郷佐渡守様
參人〃御中

162

「御文庫拾九番箱三拾六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

以上

今度大和守殿被成歸國候而、御宿所へ心安可有御座儀にて無之候間、何方へ歟寺領なと候ハん哉と申上候處ニ、山之寺へ御座候而可然候ハん由被仰出候間、可被成其御

心得候、寺中ニ者長々御逗留成間敷候間、市之瀬歟又何方へも山寺之寺領ニ御勘忍候而可然候、猶於其元可有御談合候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」八月四日

伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌（判）

山田民部少輔◎（花押）
有榮（判）

鎌田治部少様
三原左衛門様
川上因幡守様
下野守様
彈正大弼様
参人々御中

▽◎彈正大弼様
下野守様　有榮
川上因幡様　参
山田民部少輔

△

伊勢兵部少輔

庚辰八月四日ニ江戸ゟ御道具衆持下候、和州寺領之儀也、

163

「光久公御譜中」

今度金山取立之儀、公方様達上聞相企儀候、誠寄特成仕合、分國中下々ニ至迄可潤儀、幸不可過之候、然處大形ニ共候而、山若於不榮者失外聞、其上國之財を捨盡ニ可相當候間、諸役人申付候衆、いかにも進候而精入候様ニ可被申渡候、侘なと申候ハぬ様ニ可被申聞候、北郷佐渡守奉行之儀申付差下候間、委細可被申達候、金山之儀ニ付、從佐渡守可被申越儀可有之時者、無由斷急度相濟候様談合肝要候、謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」八月十一日

光久○（花押）
（御判）

三原左衛門佐殿
鎌田治部少輔殿
川上因幡守殿

下野守殿
彈正大弼殿

164
「光久公御譜中」
今茲九州浦廻　上使間宮虎之助・小濱久太郎自日州來、
巡見于吾領内浦浦、

165
「雜抄」
已上
御書面具ニ令披見候、然者廻國之ひしり、從求广大畑役
人通手形を以、其元へ參着ニて、羽月若王寺へ經納ニ被
指越候、就夫ニ壹人被相付候、則菱刈九左衞門殿遣口柄
承候、無別儀廻國〔之〕(紗と)聞得候、連〻ケ様成修行者内場へ
被相通儀御法度ニ而候間、求广之曳付鹿兒嶋へ被差上、
被得御意能候ハんと存候、彼仁も薩广・大隅・日向にて
成就之由候間、鹿御下知次第ニ被成候而能候ハん、御使
へ巨細申候間不詳候、恐惶謹言、

『寛永十六、十七、十八比カ』
八月十五日　新納加賀守忠清(勢)〔判〕(花押)
谷口次郎左衞門尉殿
伊地知弥右衞門尉殿　御報

166
「御文庫拾九番箱三拾六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」
去十日之御狀今廿五日ニ淡州穴賀(阿那賀)へ到來、令披見候、被
仰越候通、西國浦〻爲見分罷越候、四國之北浦罷通、其
より豐後へ致渡海、九州南浦より順見仕可申候、御分國
中罷通候節召連候もの不存候所へ、其近邊之案内者を請
可申候、其上日和惡御座候刻、引舟なと賴〔申候間〕(◎可申候)内〻
其御心得被成可被下候、何も期後音之時候、恐惶謹言、
「寛永十七年」「朱カキ」
八月廿五日　間宮虎之助(長澄)◎■(花押)〔判〕
小濱久太郎嘉隆(◎)〔判〕(花押)
嶋津彈正殿
嶋津下野殿

167

「十二番箱四十巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

相良壹岐守公事、明日可承之旨被　仰出候、然者其方被預置候相良喜平次義、四以前評定所江人をそへ可被差越候、以上、

「朱カキ」「寛永十七年」八月廿七日

阿部對馬守
阿部豐後守
松平伊豆守

松平薩广守殿

「末紙ニ」御家老衆よりの御切紙、

168

「光久公御譜中」

爲重陽之祝儀小袖五到來、歡　思召候、委曲土井大炊頭可申候也、

「朱カキ」「寛永十七年」九月八日◯（印）

薩摩侍從殿

169

「御文庫拾二番箱四拾巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

追而兵部少殿一入御息災ニ候、切と得御意申事ニ候、以上、

一筆啓上候、益々可爲御無事と令察候、薩广守殿一段御堅固ニ御座候、今度出入御座候付て、喜平次兄弟事薩广守殿ニ御預り、永々御苦勞被成、至拙者忝存事ニ候、然者我等如存分被仰出、忝次第共ニ御座候、在所へも被入御念、御使なと□指越候通、留守居之者ゟ申越候、一入忝令存候、弥以不相替被仰通候者可爲本望候、御暇被下次第罷下積儀可得御意候條、不能詳候、恐惶謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」九月十六日

相良壹岐守
頼寛（花押）

嶋津下野守様
「川上歟」□左近將監様
鎌田治部少輔様

三原左衛門佐様
嶋津彈正忠様　人々御中

170

「光久公御譜中」

已上

次飛脚にて被差越、去六日之御札致拜見候、然者浦廻上使之御衆、其御國之内山川と申湊へ被成御着船候、連〻被及聞食候坊津・片浦・阿久(根)右三ヶ所ヲ可有御覽候間、當國へも急度可爲御越候由被仰聞、忝得其意存候、御紙面之通卽越中守へ申聞候、被入御念候段、拙者共ゟ相心得可申入旨被申候、猶相易儀候者弥被仰聞可被下候、頼入存候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」十月九日

長岡監物(是季)　○■(花押)　〔判〕
有吉頼母佐(英貫)　○■(花押)　〔判〕
長岡佐渡守(興長)　○■(花押)　〔判〕

嶋津彈正様
嶋津下野守様
河上因幡守様　□報

171

「御文庫拾九番箱三拾六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶以今度上洛衆之儀、御迎舟から舟ニて上候間、必此舟ニ被乗候様ニと被　仰出候間、其旨御談合尤候、已上、

急度令啓入候、

一琉球へ渡海之衆、最前川上上野守・比志嶋監物可被罷渡由、被仰遣候、其後八重山嶋へ南蠻船相懸、二三百も陸へ下候而罷居由相聞得候間、若所をも破候儀も可有之と　思召、鐵炮百挺程被差渡、爲物頭澁谷四郎左衛門尉渡海候様ニと被仰遣候處、四郎左衛門尉持病相發、散〻躰候へ共、難背御意、其上遠嶋之儀候處ニ、何角候て延引可有之儀如何候間、則可致出船由、被申候旨、致披露候、一段被成　御感候、然共先四郎左衛

門尉一立之衆者、渡海之儀被差延候、自琉球慥成到來共候而、又右之様子候者、追而可被仰付由御意候事、

一比監物儀、以之外之煩故不罷成ニ付、爲替喜入吉兵衞へ被申渡之由、達　上聞候、定右兩人之儀者、早ゝ可爲出船由　御意候、此兩人之儀者、最前如被仰遣候、去年於八重山嶋、南蠻船致破損、人數八十人陸へ下候而、次第ニ相果、漸五人生殘候由注進ニ付、其段　公儀へ御披露候處ニ、餘過分ニ相果候、若琉球人と致内談共、嶋ゝへ隱置候ハんと、御年寄衆御不審ニて候つる、薩州様御同前ニ　思召、爲其穿鑿被差遣候、定兩人共能合點候而可被罷渡候事、

一來年　薩州様御暇ニて於御歸國者、御供衆ニ被相替在江戸衆可被參候間、御書立を以被仰遣候諸大名并ニ御暇出候者、定可爲四月初候之條、右之替衆之儀も、三月者必爰許へ被參候様ニとの　御意候、左様候者御迎船參候ハん刻、其舟ニ被乘候て可被罷上由被　仰出候間、早ゝ被仰渡上洛之用意尤候、爲其此早打申付候事、

一右御書立之外ニ、諸役人大番衆之書立遣候、是ハ於其許談合を以可被申付之由　御意候、可有其御心得候事、

一當時爰許之御祈念坊主今泉寺被罷居候、此替も惣上衆同前可被仰付候、猶期後音候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十七年」霜月十三日

山田民部少輔◎（花押）
有榮〔判〕

伊勢兵部少輔◎（花押）
貞昌〔判〕

鎌田治部少輔様
川上因幡守様
下野守様
彈正大弼様　參人ゝ御中

▽◎彈正大弼様
下野守様　貞昌
川上因幡守様
鎌田治部少輔様

伊勢兵部少輔
山田民部少輔

十一月十三日之狀

一八重山嶋へ被渡候之事、
一來年御暇出候ハヽ御跡ニ被居候番衆之事、
一御祈念坊主替リ之事、
右之衆御迎舟ニ可被召乘せ事、

172

「御文庫拾貳番箱四拾卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

御狀令拜見候、　千代姫君樣被遊御疹候へ共、一段輕御座候而、早速御快然之御事候間、可御心安候、將又被致湯治緩ゝと養生被有之由、得其意候、示預之趣、御次之節可達　上聞候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」十一月十六日

阿部對馬守　重次〔判〕◎〔花押〕
阿部豐後守　忠秋〔判〕◎〔花押〕
松平伊豆守　信綱〔判〕◎〔花押〕

松平薩摩守殿

松平伊豆守
阿部豐後守
阿部對馬守

173

「光久公御譜中」

光久有徵恙、十一月賜暇而浴于熱海相州溫泉、

174

「十二番箱四十卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

御札令拜見候、今度尾張大納言殿上屋敷火事之儀、其元江相達驚被存候之由、得其意候、雖然御城御無爲之儀、寔以目出度候、就中　千代姫君樣御疹瘡弥御快然之儀、重疊珎重之旨、就彼是被差越使者候、被入念之通可達　上聞候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「寛永十七年」十一月十九日

阿部對馬守　重次〔判〕◎〔花押〕

松平薩广守殿

阿部豐後守◎(花押)
忠秋(判)
松平伊豆守◎(花押)
信綱(判)

松平薩广守殿

松平伊豆守
阿倍豐後守
阿部對馬守△

松平薩摩守殿

▽◎

御披露所仰候、恐ゝ謹言、

幼少故用印判申候

十二月十八日　萬壽丸　忠次◯

下野守殿

175

「御文庫拾二番箱四拾壹卷中」

猶以乍輕少御太刀一腰・御馬代銀一枚・御樽一荷・

御肴三種致進上候、御祝儀計御座候、已上、

從薩州樣御書被下候、拜見忝奉存候、從當公方源家光公諸大名家ゝ之元祖就被成御尋候、各以系圖文書被達　上覽候、就夫御系圖之儀申上候處、寫被下候、誠以忝奉存候、致秘藏子孫累代讓相渡可申候、殊宇宿傳左衞門伺公仕候處、種ゝ被成御入御念被仰下候、忝奉存候、可然樣

嶋津萬壽殿御家之御系圖被爲拜領候御禮狀、爲後證請取置申候、

寛永十七年辛巳十二月

御筆在所ゟ出

癸未
三月十五日

176

「光久公御譜中」

先是於紀州高野山爲嚴考建立石碑備追福也、

177

「御文庫拾九番箱三拾六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

琴月樣御石塔之銘

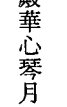
松平薩摩守藤原朝臣光久

奉爲

先考薩隅日三州大守中納言從三位家久公、慈眼院殿華心琴月大居士三回忌追福造立之伏願、慈考嚴阿字法佛之姿美鏤文性身之相兼者、五類提婆十方數生同駕三密之寶輅共歸五點之本宮耳、

寛永十七年庚辰二月廿三日

御位牌



薩隅日三州太守前黃門從三位慈眼院殿華心琴月大居士尊儀

右者於高野寶性院殿御作意ニ而候、

額

慈眼院

右御院號者從三寶院殿書出被遊候、但三寶院殿ヨリ御出被成候、直之御院號之御書物者江戸へ指上候、

十二月廿日

先考薩隅日三州太守中納言從三位家久慈眼院殿花心琴月大居士

右高野之御石塔銘前後略◎之

「御文庫廿三番箱廿一卷中」

179

「御文庫拾九番箱三拾六巻中」

以上

一書令啓達候、仍去年以諏方杢右衞門尉殿、被仰上候かりうた船爲御用心、勢樓舟并石火矢之儀被仰　上候、阿部豐後様被聞召置候處、御返事無之故、今迄逗留候、昨日右衞門佐使者召列、可罷出之旨、以御使承候條、杢右衞門尉殿致同道罷出候、豐後様直ニ兩人へ被仰渡候様子者、右兩條之儀、早ゝ御返事可被仰出候へ共、去年之儀者相過候、以來之儀者毎年之事ニ候間、能ゝ御相談入儀候、又井之上筑後守殿へ御尋之儀共候故、被成御延引候、然者勢樓船之儀、尤之儀ニ者候へ共、筑州へ御相談候へは、入間敷之由候間、先ゝ御無用ニ候、石火矢之事者、新敷被召立ニ者相替候、此中御所持之筒御しらへ候て、可被召置儀尤ニ思召候、被爲打火間なとを可被爲見事可然候、海上之儀者、鐵炮ならてハ不叶事ニ候條、可有其用意候、自然當時御所持之石火矢不足ニ候而、新敷於被召立度候者、重而被得　御意可然被思召候旨、細被仰聞候、右之通能ゝ被聞召屆肝要ニ存候、猶杢右衞門尉殿可爲口達候條、不能重筆候、恐惶謹言、

正月廿八日　　新納右衞門佐久詮〔判〕◎（花押）
　　川上因幡守久國〔判〕◎（花押）

鎌田治部少様

（表紙）

光久公　　寛永十八年

後編　舊記雜錄　卷九十八

山田民部少様
頴娃左馬頭様
下野守様
彈正大弼様
参人々御中

彈正大弼様
下野守様
頴娃左馬頭様　　久國
鎌田治部少様
山田民部少様
参

〆

川上因幡守
新納右衛門佐

巳ノ正月廿八日ノ狀、野村郷兵衛殿・諏方杢右衛門殿三月二日ニ被持下候、
一かれうた船之儀ニ付、勢樓船之儀ハ入ましく候、
一石火矢ノ儀ハ、此中御所持之分ハ可被談候、新敷被召立候儀ハ御無用之由候事、
（張紙）
「光久公御譜中ニ無之」

180
『吉松般若寺』
吉松之内般若寺觀音堂令廢壞ニ付、以勸心之力可致再興之由候間、不依貴賤心落次第、可有奉納者也、
寛永十八年
二月二日
治部少輔
因幡守印
下野守印
彈正少弼印
分國中
諸所

181
「光久公御譜中」
猶こうたかハしき儀共被承付候ハヽ、其方よりも、
從此方も申通中ニ、さハり無之様ニ申分度候、爲心得候、以上、
態申候、仍此中者何かと申合候、涯分被相嗜候而可然候、

世上口かましく候間、人をにくミ候て、縦悪様ニ申候共、我等同心申間敷候、少も心置ニ不可被存候、其方事頼母敷存候程ニ、弥對奉公無疎意可被存候、ケ様ニ申候とて、おこり氣無之様心得尤候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」二月三日　光久〔御判〕○（花押）

根占七郎殿

182

「御文庫拾二番箱四拾巻中」「光久公御譜中ニ在リ」

謹捧愚書候、然者去歳大明之　勅使被成着岸、冠致頂戴、満足仕候、如此之段以　御高恩之儀候、尤以忝奉存候、此等之旨爲可令言上、佐鋪王子差上申候、仍爲御禮菲薄之方物致進上之候、件ゝ錄于別紙候、猶重而可得　尊意候、誠惶誠恐敬白、

「朱カキ」
「寛永十八年」二月九日　中山王尚豐〔判〕◎（花押）

進上　光久尊公

183

「光久公御譜中」

寛永十八年辛巳二月十九日、以阿部對馬守重次爲〔ナシ〕○上使賜告、同二十五日發江府赴國、家老山田民部有榮從焉、四月二日下著于麗城、走家臣種子島左近忠時于東武、奉謝賜官暇歸國忝、因獻數箇品物也、

184

「光久公御譜中」

覺

一留守中火事於有之者、門外へ一人も出間鋪候、用所之儀候ハヽ、致穿鑿可出事、

一火事之時者、家の上に人をあけ、ちかく成候者、下にをり候而、道具を可出事、

一火事之時奥方のき候行儀之事、但人せき候儀無之候ハヽ、行儀たゝしく、或人せき此中の火事のことくにあり候時は、女子衆をまき立、ぬきほにてまハりをかこミのくへき事、見合可爲肝要事、

一一年中に六度程、江戸の左右可被申越候、是者つねの様子なき時之儀、又或從　上様被仰付儀、其外注進之

儀候ハヽ、六度にかまハす、節〻可有注進事、
一可致音信所〻、從國許油斷候者、相當に可被申付事、
一御城　御誕御座候者、追付其晩より注進可被申事、
一爰許之雜說、誰之家中者何與成候なとゝ有儀、注進曾而入間敷候、但御改易共候而、落着之儀共者可被申候、
其外役ニ不立儀を爲心得與候て、被申儀可爲無用事、
右條〻新納右衞門佐へ相談あり、可被申付候、其外不叶儀者、談合候而可被申候也、
寛永十八年二月廿四日

185
「御文庫拾九番箱三拾六卷中」
御分國諸外城へ蓮金院使僧相廻候、
覺
向嶋御衆中在郷不殘　牛禰御衆中在郷不殘
垂水御衆中在郷不殘　新城御衆中在郷不殘
鹿屋御衆中在郷不殘　高限不殘
串良御衆中在郷不殘　高山御衆中在郷不殘
姶良御衆中在郷不殘　大姶良御衆中在郷不殘
大根占御衆中在郷不殘　小根占御衆中在郷不殘
田代御衆中在郷不殘　佐多御衆中在郷不殘
谷山御衆中在郷不殘　喜入御衆中在郷不殘
指宿御衆中在郷不殘　山川御衆中在郷不殘
頴娃御衆中在郷不殘　知覽御衆中在郷不殘
川邊御衆中在郷不殘　鹿籠御衆中在郷不殘
坊津御衆中在郷不殘　久志御衆中在郷不殘
泊津御衆中在郷不殘　秋目御衆中在郷不殘
加世田御衆中在郷不殘　阿多御衆中在郷不殘
已上廿八外城
巳ノ卯月朔日
（張紙）〔御譜中ニナシ〕
蓮金院之內
快深〇「印」應秀〔判〕◎（花押）

186
「御文庫拾九番箱三拾六卷中」
起請文前書之事

一御振舞方見廻被　仰付候、弥諸事入念　御奉公可申上事、

一御振舞方ニ付、縦如何様成計策雖有之、不入其案、則言　上可申上事、

一御奉公方ニ付、自然被聞召損儀共候ハヽ、向後被遂御糺明、被召仕可被下候事、

右條ゝ於若偽申上者、

「牛王ノ神文略」

奉勧請、掛忝上者梵天帝釋四大天王・下堅牢地神　日本國中三千餘社　大小權實神祇　摠當國鎮守　新田八幡大菩薩　開門正一位并當所擁護諏訪両大明神　稲荷三社大明神　祇園大明神　春日・若宮大明神　天滿大自在天神　宕岩大權現　大天狗　小天狗　十二天狗　八狗御部類等、神罰冥罰各可罷蒙御罰也、

起請文如件、

黒田三左衛門頼崇（花押）

寛永十八年四月吉日施主白敬

（張紙）「御譜中ニハ無之」

187

「光久公御譜中」「此御書北郷久通譜中ニ在リ」

伊勢兵部今月二日之夜八時死去之由、翌日之狀昨晩到來、誠驚申候、咲止之至、不及言語候、別而其許之儀心遣候、涯分被入念候而、可爲肝要候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「寛永十八年」四月十九日　光久（花押）（御判）

北郷式部太輔殿

188

「仝上」

伊勢兵部今月二日之夜死去之由、昨晩相聞得、誠驚申候、咲止千萬不及言語候、其許之儀心遣候、別而諸事被入念、可爲肝要候、謹言、

「朱カキ」「寛永十八年」四月十九日　光久（花押）（御判）

新納右衛門佐殿

「按ルニ、此年貞昌死去、年七十二歳ナリ、參考ニ供ス」

189

「北郷久直譜中」

寛永十八年四月十九日、自　光久公江戸御屋敷中、諸事可加下知之由、賜御書於久直、又同月二日夜、伊勢兵部貞昌病死于江戸、其訃音同十八日夜達　高聽、御愁傷不少、依之久直彌諸式可相勤之由、賜御書、兩通有正文、左記之、

190

當分其許之儀心遣候、就其諸法度之様子、新納右衞門佐へ任せ置候間、可被申付儀、少も不可相背之旨、右衞門佐へ被致談合、其方前々在江戸之衆へ、可被申渡候、勿論右衞門佐へも、何篇念入無遠慮可有下知由、被申含可然候、爲其如此候、恐々謹言、

四月十九日　　光久御判

北郷式部太輔殿

「伊勢兵部今月二日之夜八時死去之由云々、

此御書、既ニ御譜中ニ抄出ス、略」

191

「光久公御譜中」

以上

態預御飛札、致拜見候、然者其御領分出水磯ニ、何國共知れ不申船流着、御不審ニ思食、近邊之山々爲可被成御駈せ御人數をも被差寄、御覽候處ニ、右之船海上ニ久漂流仕候哉、生貝・生蠣なと船之内外ニ取付候而在之候、近頃人之乘申たる船共見へ不申候付、則彼船、長崎へ被差越候唐之釣舟にて在之候、貝も高砂邊之貝ニ而御座候通、爲存もの申候由、相聞申候へとも、出水近郷へ者横見を御付置候、然處ニ薩广守様於江戸被爲達　上聞、其上御國中嶋々浦々迄御駈せ可被成旨、依被爲仰越候、民部少輔殿出水表へ御越之由、尤存候、就其當領水俣表程近御座候付而、被入御念被仰聞忝存候、内々右之段依承及候、芦北郡其外此方領分津々浦々山中まても念を入、堅相改候へと申付、今以穿鑿仕事ニ候、被懸御心遠路被仰知、過分至極ニ存候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

「寛永十八年」卯月廿七日　　長岡監物　○（花押）

「朱カキ」

□（判）

嶋津彈正様

北郷佐渡守様

頴娃左馬頭様

山田民部少輔様

御報

長岡佐渡守

○興長（花押）

□〔判〕

192

「御文庫拾二番箱四拾卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

尊札拜見、忝奉存候、然ハ琉球之内八重山にて、唐人・南蠻人乘合之舟破損、飢死之殘南蠻三人・唐人貳人、去廿二日ニ當地致來着、則籠舍申付候、其外嶋々にて唐船破損之唐人共、是又着船申候、御念入候通、御老中へ申入候、委曲兩御使者へ申入候間、不能細筆候、恐惶謹言、

「朱カキ」

「寛永十八年」四月廿九日

松平薩摩守様

尊報

柘植平右衞門〔〕◎尉

正時◎〔判〕（花押）

▽◎

松平薩摩守様

尊報

△

正時

〓○

拓植平右衞門

「末紙ニ」

巳ノ四月廿九日ノ狀、南蠻人三人・唐人二人、其外嶋々にて破損之唐人譴御受取候、又新納加賀殿・毛利肥前守、

193

「三番箱中」「光久公御譜中ニ在リ」

爲端午之祝儀、帷子單物數十到來、悅思召候、猶土井大炊頭可述候也、

五月三日　○「墨印」

（家光）「仝上」

薩摩侍從殿

▽◎

薩摩侍從殿

△

194

「御文庫拾二番箱四拾卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

今度仕合能御暇、道中無爲至國元下着之儀、忝之旨得其意尤存候、因茲被差越使者、殊卷物二十・鶴一羽・赤貝

漬物一壺・御樽一荷進上之候、右之趣披露之處、種嶋左近被召出　御前、早ゝ念之入候段、御機嫌之御事候、委曲左近可爲演說候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」
五月十五日　　阿部對馬守重次◎(花押)〔判〕

阿部豐後守忠秋◎(花押)〔判〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿　　阿部豐後守

阿部對馬守　　△

195

「御文庫拾九番箱三拾六卷中」

當月十日ニ於　御城御能被仰付候砌、諸大名へ仰渡之覺、

一吉利支丹政道仕候次第之事、

是ハきりしたん改ニ付、人之出入窮屈之樣ニ被　聞召及候間、其(國元)□へ可入來時者ゆるりと被入、可罷歸時かたく可致改との事にて候、

一權役之事、

是ハ小身にして大身のまなひをし、大身にて小身之作法なと仕儀、無用にて候、其程ゝニ似合候樣可致分別との事ニ候、

一人返之事、

是ハ其國〳〵ニ女房子共持居付候而罷居候ものなとを追放共仕、方ゝへ罷居候由候、本ゝのことく可被返付との事ニ候、

◎至〔到〕來年、先年之通御國廻可被　仰付之旨、被　仰出候、

覺

一此度御誕生之爲御祝儀、歷ゝ之衆御名代ニ被指遣尤候、

「張紙ニ」
「是ハ被聞召屆候由、御書之端書なとニ可被遊候哉、いかゝ」

一去年琉球ニ爲御仕置被遣候衆々御左右御座候ハヽ、樣子酒讃岐守殿・阿部對馬殿迄御狀被遣可然候、

一西國筋無事成由、折ゝ御年寄中へ御狀被遣可然候、

一八・九月時分ニ　上樣へ御進物御上被成、國元へ緩ゝ與被召置、過分成通、以御使者被仰上可然候、御年寄中へ似相之御音信御尤候、

「張紙」
「是ハ今度夏之御音信にて濟可申候哉、又參にて候ハん哉、因幡右衞門佐迄可被承合よし被仰候而ハいかゝ」
「張紙」
「是ハ岩切六右衞門を以被仰上候間、相濟申候、此由を又可被仰候哉、不可及其儀候哉」

一金山之儀出申候共、出不申候共、御年寄中へ御内證被仰入可然候、

一長崎之御奉行中へ折ゝ御左右被仰遣可然候、

一爰元御上屋敷御留守居ニ、家老中壹人早ゝ御上せ被成可然候事、

右寛永十八年五月十六日　隱州様種子嶋左近へ被仰聞、同六月廿七日ニ被持下候、

「張紙」
「右三ヶ條御注進忝被思召候、慥被聞召屆候由、御禮を隱州老へ被仰候而ハ、いかゝ可有御座哉」

外ニ

阿部豐後守殿ゟ御言傳被成候、御申なされ候儀、早ゝ可被成首尾候處、公儀御繁多ニ付、御延引候、急度御談合候而、御返事可被仰下之由、御口上にて御座候事、

右種子嶋殿口上、彈正儀ハ六月晦日ニ承候、

一端午之御服　御内書大田筑前守被持下候、中途ニ逗留仕候、別而大坂船待ニ日數共御座候由候、是も前ニ者御頂戴被成候由御申候間、何月何日之　御内書御事、老中ニ被爲入御念候由、可被成御申候哉、いかゝの事、

一今度大野内記・鬼塚源太左衞門被持下候、相良主計助書立之條書爲御心得懸　御目候、

「御文庫拾九番箱三拾六卷中」

起請文前書

一御振舞方見廻被仰付候、弥諸事念を入、御奉公可申上事、并御前方聊尓ニ無之様ニ念を入可申事、

一御振舞方ニ付、縱如何様成計策雖有之、不入其案ニ、則言上可申上事、

一御奉公方ニ付、自然被聞召掠儀共候ハヽ、向後被遂御糺明、被召仕可被下候事、

右若偽於申上者、

「牛王神文略」

▽◎奉始上者梵天帝釋四大天王、下者堅牢地神　惣而者日本國中大小神祇、別者王城鎮守八幡大菩薩　祇園精舍春日大明神　貴布禰明神　御多賀大明神　北野天滿大自在天神　愛宕大權現　日州霧嶋六所權現　隅州正八幡大菩薩薩州開門正一位　金峯山三社　當所五社大明神　殊者軍神摩利支天　氏神等　各御部類眷屬等、各御罰可蒙者也、

仍起請文如件

寛永十八年六月吉日　　相良藤七郎◎（花押）△
　　頼元〔判〕

197

「新納氏家藏」

□祝言迄ニ御酒進入申候、左様なる御禮承候、忝存候へと被爲申候、中務少事も一昨日御地江被罷越候、萩わら事ハ、□かこしまのことく□由候、爲御存候、以上、

皆ゝ疱瘡輙仕候、左様成爲御祝儀御使、殊ニ御酒送被下候、誠以忝存入候、隨分祝申候て、賞翫いたし候、女共氣色も弥以快氣申躰ニ候、もつまりも次第ニ平愈仕候間、少茂御念遣被成間敷候、然者其表へ金有之やうニ候哉、先ゝ江戸御到來被□細ゝ長野山之金山さへ不入儀之やうニ出合候由、傳承候間、爲御心得申事ニ候、猶重而可得御意候、恐惶謹言、

「寛永十八九年カ」
六月六日　　圖書頭
　　久通〔判〕◎（花押）

新納加州様

「地頭假屋子丑之方二里
白井ヶ野金山牛尾村之内先年御試掘有之云ゝ書入アリ」

198

「御文庫拾九番箱三拾六卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

去月廿九日之御狀令披見候、仍而其表内之浦へ唐船壹艘着岸ニ付而、船中被相改、唐人貳拾三人并荷物之書付警固被相添、得其意候、委曲兩御使者へ申入候間、不能細筆候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」
七月十九日　　柘植平右衛門尉
　　正時〔判〕◎（花押）

馬場三郎左衞門尉
利重（判）◎（花押）

嶋津彈正殿
嶋津下野守殿
顯娃左馬頭殿
鎌田治部少輔殿
山田民部少輔殿

「末紙ニ封面ハ略ス」

◎
嶋津彈正殿
嶋津下野守殿　馬場三郎左衞門尉
顯娃左馬頭殿　柘植平右衞門尉
鎌田治部少輔殿
山田民部少輔殿

△

巳七月十九日ノ返書、内之浦へ參候唐船之儀也、
使黑田主水佑ゟ
里村十左衞門

199

「光久公御譜中」

同年八月三日、
將軍家光公之御子　竹千代君降誕、光久豫敎島津安藝久雄、窺　降誕之佳期處江都、故同九日、久雄携光久之進獻物登　玉城、於天井間獻之　若君、御腰物者冶工一文字　久雄捧之安藤右京亮・松平出雲守、御脇指者新藤五國光　載目錄、川上因幡久國捧之、御產衣者敷根筑前頼喜・岩切六右衞門信光捧之、久雄就太田備中守奏焉、光久之祝物一番記之簿、二番松平肥前守利常之祝物獻之、踵諸大名獻納之祝物載焉、且御肴三種鶴一羽・鰹節三百・昆布三十把共納箱、御樽三荷獻之于若君與　家光公矣、嬌嗣虎壽丸亦奉獻御肴三種鰹節三百・鰕十二聯・昆布三十把共納匣、御樽二荷　若君、所獻上　家光公亦同、
祝　竹千代君降誕二七夜之佳期、以久雄獻呈御太刀紀正恒
一腰・御馬代金一枚于　家光公、御太刀長光一腰・御馬代金一枚于　若君、久雄勉此事、奉拜謁　家光公、

200

「御文庫拾九番箱三拾七卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

八月三日巳之刻御誕生ニ付而御進上物覺

若君様江　薩州様ゟ御進上

一御腰物　一文字

一御脇指　新藤五國光

一御產衣　十重

右者天井之間ニ而御取次安藤右京殿・松平出雲守殿・松平伊賀守殿・太田備中守殿、御目付衆市橋三四郎殿・宮木越前守殿御下知ニ而、一ゝニ者御六ヶ敷由候而、御腰物計を安藝守安藤右京殿・松平出雲殿へ相渡候、御脇指者川上因幡守承共ニ目錄ニて上ヶ申候、御產衣ハ敷根筑前守・岩切六右衞門尉御取次衆へ相渡、安藝守太田備中守殿へ披露仕候、九日一番ニ相納、御帳口ニ留申候、二番加賀肥前守殿御使、夫ゟ次第不同ニ御進物相納候つる事、

一御肴　三種鷄一羽但箱ニ入

鰹節三百但箱ニ入

昆布卅把但箱ニ入

一御樽白木柳樽三荷

貳斗五升入ニして酒ハ壹斗四五升入

右者　御城追手之口百人衆、御鐵放御番所にて相納り候、兒玉四郎兵衞首尾仕候、

公方様へ　薩州様ゟ御進上

一御肴　三種鷄一羽但箱ニ入

鰹節三百但箱ニ入

昆布卅把但箱ニ入

一御樽白木柳樽三荷

二斗五升入ニして酒ハ壹斗四五升

右納り所同兒玉四郎兵衞首尾仕候、

御懷様へ　薩州様ゟ

一銀子五拾枚

一同　拾枚　御乳之人

一同　十枚　上臈之御かた

一同　十枚　御かひそへ御かたニ

一同　五枚　御さし

一同　百枚　　御女中方相中

右者御臺所ニ而相納ル、相良主計首尾仕候、

春日殿
一銀子卅枚
しゆりんノ御かた
一同　十枚

右者屋敷へ御遣候、相良主計首尾仕候、

英勝院殿へ
一銀子廿枚

右者無御請之由候而、御返シ候、

若君様へ　虎壽様ゟ

一御肴　三種鰹節三百但箱ニ入
鰯十二連但箱ニ入
昆布卅把但箱ニ入

一御樽　二荷
貳斗五升入ニしてしつなまき壹斗七八升入

公方様江　虎壽様ゟ

一御肴　三種鰹節三百但箱ニ入
鰯十二連但箱ニ入
昆布卅把但箱ニ入

一御樽　二荷
貳斗五升入ニしてしつなまき壹斗七八升入

右者　御城追手之口百人衆、御鐵放御番所ニ而相納り候、兒玉四郎兵衛首尾仕候、

一御肴　二種ツヽ、

一御樽　壹荷ツヽ、

土井大炊頭殿・酒井讃岐守殿・酒井河内守殿・松平伊豆守殿・阿部豐後守殿・阿部對馬守殿・堀田加賀守殿土井遠江守殿・三浦志广守殿・朽木民部少輔殿・戸田左門殿、

公方様江

一御太刀　一腰　正恒但紀ノ正恒也　御馬代金一枚

若君様江

一御太刀　一腰　長光但備前　御馬代金一枚

右者二七夜ニ安藝守可致持參由候、左候而　御目見得在之由ニ相定候、

一御祝言之御能三日相續在之由候、一日者御一門衆・御

年寄衆へ之御祝言、一日者諸大名衆へ之御祝言、一日者使者へ之御祝言之由候、

一諸大名衆之御禮可被　仰上刻、同前ニ來ル十六日ニ爲相定由候、但御太刀ハ可爲持參由候、

一此中者　若君様迄ニ御太刀可上由候へ共、　公方様へも可上由、俄ニ諸大名衆之御吟味相替候而、此方ハ御繼目之時、彈(◎正)〈進上之紀正恒之太刀十文字ノ御こしらへニ而候ヲ、あほひの御もんニ仕なし相納置候、

一九日朝ハ六ツ時ゟ諸國之使者不殘被罷出候、籠門ゟケンクハン迄つかへ候而、殊之外こミ候つる事、

一諸大名衆屋敷〳〵ニおひて能御座候而、御いわひ被成候事、

一御誕生三日いたし候而より、何れも十ヲよりうちの御息達ヲ御奉公ニ進上有度と、御訟訴爲有由申候、

一土井大炊頭殿御息御三人、酒井讃岐守殿御息御一人、松平伊豆守殿御息御兩人、青山大藏殿御息御一人、其外一〻ニハ不被申候、三十人程九日ニ御目見得候而、御奉公ニ御參候、

一九日七夜之御祝言、兩　大納言様、中納言様・大僧正なと　若君様御對面之由候、又越後守殿・加賀筑前守殿なと又御座候御座ニ而も　御對面有之たると申候、

一兩大納言様・中納言様・大僧正・御年寄衆・諸大名衆、九日ニ者御酒宴ニ而爲有之と申候、昨(◎晩)〔曉〕者御小性衆被召出、御酒盛爲有と申候、

一虎壽様も諸大名衆之御太刀上り候時分、可有　御登城由候、御太刀ハ例式ニ而可有御座候由候、

一是程之御祝言有間敷候條、緩〻與在國之大名衆立歸りニ致伺候、御祝言申上度由、留主居迄申來、留主居衆ゟ爲被申出衆も有之由候事、

巳上

「朱カキ」
「寛永十八年」八月十一日

「按ニ」
「德川家四代家綱、寛永十八年辛巳八月三日誕生トアリ、此一書參照スベシ」

201 「喜入忠續譜中」

寛永十八年辛巳八月三日、

將軍家若君家綱主誕生、由是爲使節九月赴江戸、達慶賀於　臺聽也、

202 「殉國名藪中抄」

寛永十八年辛巳

八月十五日、冨山助兵衛死、（島津守右衛門尉彰久室の跡を追て殉室ハ相模守久信の母堂にして義久公の二女新城君なり、）

203 義久公御二女

島津守右衛門尉彰久室

永祿六年癸亥六月十六日誕生、母種子嶋左近大夫時堯女也、

寛永十八年辛巳八月十五日於新城逝去、年七十九、法號瑚月淨珊庵主、

204 「藤野家文書之内」

松平薩广守

稲□（業カ）

人々御中

一書令啓候、然者若君様御誕生之爲御祝儀、御老中衆私宅へ可申請之由申入候處、來月十八日之朝可有御來駕之由承候間、御手前之儀御同前ニ御出候而被下候ハヽ、可爲本望候、必々待可申候、爲其如此御座候、恐惶謹言、

「寛永十八年」八月廿七日　　光久御判

205

口上

一書申入候、然者御系圖今月始、太田備中守殿へ可差上と存候處、若君様御誕生ニ付而、御取込之由候間、延引申候、去廿一日備中守殿へ持參申候、御系圖を被成御受取、古書物者御家之重寶ニ而候條、書寫候而可差上之由、被仰下候而、則寫申、昨朝持參可申由被仰候間、野勢喜庵備中殿御存之人ニて、致同心伺公申候處、道春之親子差寄、御系圖其外古御書物被成御見せ、　忠久様已來之

儀少も不審懸り不申、御文書之内北條家之判なと皆ゝ被見知、已ニ時政判御座候書物ハ、廣元之手跡ニ而候由被仰候、賴朝之御子忠久、大友時直之外ニも御座候、是亦恐御臺所、他家を御名乘候故、世間不知之由、御物語ニ而候、靜ニ御尋申候而書付相下可申候、諸大名之系圖近家ニ而候哉、多分一枚紙ニ而相濟候、就夫御當代之儀、細ゝ被入置候、此方之御系圖ニ茂近代之儀ヲ書入可申由ニ而、案書被差出候、多分爰元之衆も爲存儀多候へ共、其内不知事共御座候故、道春之條書ニ理書仕、差下申候、「本のまゝ」訟訴ニ而書せ申候わては、又なをり可申候、道春　大隅守樣已來被下御目候ニ、今少も無他事存申候間、如何樣ニも可有助言由被仰候、筆者黑田六郎右衞門少書せ候て、一段能候之間、書せ可申歟と右衞門佐とのへ談合申候、御系圖此中書候諸大名之系圖ニ相替、御代も長至而細御座候間、備中殿被仰候、何とそ被成御急條書之段、可被仰上事奉存候、先ゝ御系圖之一筋ニ御不審共無之候間、目出度奉存候、御系圖御調之儀、圖書殿・河上上野介殿御當之儀ニ御座候間、可申入候へ共、御談合可入事多ゝ御座候故、如此候、恐ゝ謹言、

寛永十八年辛巳八月廿七日　　川上因幡守久國

彈正大弼樣　　下野守樣

頴娃左馬佐樣　　鎌田治部少輔樣

山田民部少輔樣

206

「光久公御譜中」

同年八月獻上于長野金山所掘出之砂金千兩、

207

「御文庫拾二番箱四拾壹卷中」「光久公御譜中ニ在り」

御札令拜見候、最前茂承候、其領内仁就金山出來、ほらせ見被申候處、金子可出躰候由、得其意候、然者砂金千兩被差上候、則遂披露候、以來不相易山もさかり可申儀者不相知之由承屆、尤之事候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」「寛永十八年」八月廿九日　　阿部豐後守忠秋〔判〕◎（花押）

松平薩摩守殿　　松平伊豆守信綱◎（花押）〔判〕

若君様爲御誕生之御祝儀、被差越使者、殊目録之通被獻之候、遂披露候之處、念之入候段、御機嫌ヒ被　思召候、此由可相傳之旨、依　上意如此候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」九月八日　　阿部豐後守忠秋◎（花押）〔判〕
松平伊豆守信綱◎（花押）〔判〕

松平薩摩守殿

208

「光久公御譜中」
「正文在文庫」

▽◎
松平薩摩守殿　　松平伊豆守
阿部豐後守　△

爲重陽之祝儀、小袖五到來、恰思召候、猶土井大炊頭可申候也、

「朱カキ」
「寛永十八年」九月八日　◯「墨印」

薩广侍從殿

▽◎
松平薩摩守殿　　松平伊豆守
阿部豐後守　△

209

「光久公御譜中」
「正文在文庫」

▽◎
薩摩侍從殿　△

210

「御文庫拾九番箱三拾七卷中」

覺

大御所様ヨリ御拜領
一黑栗毛名はやかわ　　御國本ニ而相模守殿へ御給
右同
一黑栗毛名笠ぬき　　吉野ゝ「本マヽ」駿馬ニ入

右同
一大黒毛御鞍置
右同
一黒鹿毛弥八
右同
一鹿毛後之大坂御陣之時、御上洛之刻御拜領、
右同
一栗毛はんとう御鞍置
(台)太徳院様ヨリ
一鹿毛たんしやく
右同
一栗毛道者
右同
一星鹿毛やつつる
右同
一黒毛
右同
一鹿毛かミこ

吉野ゝ駁ニ入
福山野ゝ駁ニ入
上洛之刻河内ニ而死
伊作野ゝ駁ニ入
福山野ゝ駁馬入
加治木へ御進上
下野守殿へ御給
北郷山城守殿へ御給

右同
一大黒毛
右同
一黒毛
禁中様ヨリ御拜領
一鵜毛御鞍置
(台)太徳院様ヨリ御拜領
一鹿毛
御本家様ヨリ御拜領
一黒毛二白
右同
一鹿毛
西之丸様ヨリ御拜領
一鹿毛
右同
一青毛

市來野ゝ駁ニ入
江戸ニ而愛(岩)(◎岩)へ御拜進
寛永三年九月四日正八幡御馬被成御上候
寛永六年九月六日江戸ニ而松平勘解由次官殿御所望
寛永八年五月廿五日江戸ニ而薩州様へ御進上
御國本ニ而相模殿御給
江戸ニ而薩州様へ御進上
御國本ニ而彈正大弼殿御給

當御所様ヨリ御拜領

一黑栗毛　　寛永十一年五月十一日　福昌寺へ參候

右同

一鹿毛糟毛　寛永十三年　御國本方　薩州様へ御進上

江戸へ之御使財部傳左衞門尉

巳ノ九月九日

「末紙ニ」度々御馬御拜領之儀也［　］

「此巳年ハ寛永十八年ニ當レリ」

211

「御文庫拾二番箱四拾壹卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

御札令拜見候、今度日光山御廟塔令首尾之儀、其元江相達、弥重被存之由得其意候、依之御樽肴被獻之候、右之通遂披露候處、念之入候段、御機嫌被　思召候、猶期後音之時候、恐ゝ謹言、

「張紙ニ」「朱カキ」「寛永十八年」「巳」九月廿日

阿部豐後守忠秋◎（花押）〔判〕

松平伊豆守信綱◎（花押）〔判〕

松平薩摩守殿

▽◎

松平薩摩守殿　　松平伊豆守

阿部豐後守

封

△

212

「在御文庫拾九番箱三拾七卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

差出

都合人數五千七百三拾壹人者

内　人躰二千六百拾九人

雜兵三千百拾貳人

右者寛永十五年正月朔日迄ニ、天草へ罷渡候人數如此候、

以上、

寛永十八年九月廿八日

山田民部少輔

新納加賀守

入來院石見守

北郷佐渡守

「右公卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

覺

一有馬天草のきりしたん一起仕ニ付、若御人數可入儀〔茂〕可有御座候、内場よりハ程遠候間、先以肥後境迄罷出、御下知をも可承合之由被仰付、新納加賀守殿・平田狩野介殿・仁禮左近將監殿・澁谷四郎左衞門殿・人數三百にて、丑十一月十五日ニ獅子島〔江〕罷渡候事、

一境目之人數如内場可引取由御下知にて、新納加賀守殿・澁谷四郎左衞門殿・仁禮左近將監殿・平田狩野介殿、同十二月四日ニ獅子島より歸宅候事、

一板倉内膳殿・石谷十藏殿へ御使被仰付、諫早へ可參覺〔語〕にて、十二月四日獅子島出船仕、松橋へ參候處、如有馬御兩所御越之由承、其より如三角船を乘申、於

喜入攝津守

豐前守

彼地松平甚三郎殿・林丹波守殿・牧野傳藏殿へ懸御目、有馬へ罷渡、内膳殿・十藏殿〔江〕御意趣申入、御返事相濟候〔得者〕、則如船本罷歸候、十二月十日有馬之城〔江〕御取懸候事、

一其後有馬〔江〕御人數可被差渡由候哉、御觸共御座候得共、其儀相替、天草へ薩摩之御人數御番手之由候て、寅ノ正月十四日豐前守殿・喜入攝津守殿・北鄕佐渡守殿・入來院伯耆守殿其外鹿兒島衆歷〻天草へ罷渡候事、

一我等事松平伊豆守殿・戸田左門殿へ御使被仰付、正月十七日天草之内久玉出船仕、有馬〔江〕罷渡相詰候、其時分者野州老・三原左衞門佐殿被成在番候事、

一薩州樣有馬〔江〕被成御着、御上使へ御見廻、則御出船にて御歸國候、野州老御供之故、我等相詰申候事、

一有馬之城二月廿八日落去仕候、薩摩衆於城中被致粉骨候、我等儀伊豆守殿ゟ御暇被下、三月八日有馬出船仕歸宅申候事、

214

「寛永十八年」
巳九月廿八日　　山田民部少輔（有榮）（花押）

「正文大口土寺師氏家藏」

猶ゝ新納加賀守様へも、内ゝ御無沙汰ニ罷過候由、次而之時分御取合賴申候、

幸便之條申入候、仍其元御無事之由、目出度存候、此方も息災ニ罷在候、可御心易候、拙者事も去年以來在江戸申、當秋供仕候而罷下申候、久ゝ不能貴面御床敷存候、態以使札も御見舞可申處ニ、御無沙汰背本意存候、將又村上李助夫婦も在江戸ニ而候、無事ニ奉公ニ而候、貞左衞門殿へも此由御心得賴入候、猶期後音節候、恐惶謹言、

十月三日　　伊集院三右衞門尉
　　忠貞（判）

寺師半右衞門尉様
人ゝ御中

215

「御文庫拾九番箱三拾七卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

御文書改ニ付而、從普光院御所琉球御給之儀一箱、但伊勢兵部殿手跡上包書付之まゝ、并御昇進之儀被遊　秀忠様之御内書一ッ、右之分今日請取申候、追而御納戸へ相納時、此書物ハ御返シ可給候、已上、

寛永十八十月十二日　　彈正（判）（花押）

種子嶋爲兵衞殿
伊知地周防守殿

216

「御文庫拾二番箱四拾一卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

今度　若君様御誕生之儀、其元相達珎重之旨、得其意候、參上有之候而、御祝義雖被申上度候、　上意難測付而、被差越使者候、右之趣遂披露候之處、念之入候段、御機嫌被思召候、必不及參府候之間、可被得其意候、委曲使者可令演說候、恐ゝ謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」
十月十一日

阿部對馬守
重次（判）（花押）

阿部豐後守
忠秋（判）（花押）

松平伊豆守
信綱（判）（花押）

松平薩(摩)◎広守殿　　松平伊豆守
　　阿部豐後守
　　阿部對馬守　△

▽◎
松平薩广守殿

217

「仝上」「光久公御譜中ニアリ」

公方様　若君様御機嫌之御様子被承度被存、被差越使者、殊御樽肴被獻之候、遂披露候之處、念之入候段被思召、御滿足候、委曲使者可爲演說候、恐々謹言、

「朱カキ」「寛永十八年」十一月十四日　　阿部對馬守重次◎(判)(花押)
　　阿部豐後守忠秋◎(判)(花押)
　　松平伊豆守信綱(花押)△

松平薩广守殿

▽◎
松平薩广守殿　　松平伊豆守
　　阿部豐後守
　　阿部對馬守　△

218

猶々いかやうの人にて候哉、近來之慥成おほへにて候、今度之御用ニ罷立、殊更御屋敷御拜領之儀共、曾不知候つる事ニ候、　惟新様御慥ニ每物御心付候つる、御近侍之衆迄勸學院之雀かと存候由、只今野州老へも申遣候、明日ハ入御耳可申候、被入御念感入候、灯をかゝけ自筆を振ハし候、よめ申間敷候、

已上、

爲入御念御札并御書立、只今酉之下刻披見、此中知不申晴欝懷候、則野州老并秘書老御覽候へと申遣候、明日御使被罷上ニ付而、清書仕處ニ被仰越候間、則書入申候、又も存申入候、　家久公、陸奥守于今年號日不知候、家久ニ御成候年號不知候而笑止候、恐惶謹言、

「寛永十八カ」辛巳十月廿三日　　彈正久慶(花押)

219

新納仲左衞門様
御報

「慶長九年甲辰六月、忠恒任陸奥守トアリ考ニ供ス、
仝十一年六月、家康公賜家字、號家久トミヘタリ」

「正文在大口士寺師氏」

以上

一筆申候、仍大口曖衆無人ニ而事闕之由、新納加賀守殿被爲申候、就其貴所被致曖役諸公役、就中國堺之儀候間、何篇可被入念事肝要ニ候、恐々謹言、

「寛永十八年辛巳也」
十月廿三日

山田民部少輔 有榮判
鎌田治部少輔 正統判
頴娃左馬頭 久政判
下野守 久元判
彈正大弼 久慶判

寺師半右衞門尉殿
御宿所

220

「御文庫拾九番箱三拾七巻中」

起請文前書

一此中御側江被召仕候儀、忝奉存候、弥向後無別心、御奉公可申上候事、
一惡儀共承付候者、可致言上候事、
一誰にても知音申間敷候、自今以後別而相嗜可申候事、
一於　御前御　咄之儀共、他言申間鋪候事、
一誰にても御奉公疎意ニ存心持惡人ニ者、猥ニ付合咄申間敷候事、
右之條々若於僞申上者、

「牛王神文略」

上梵天帝釋四大天王、下堅牢地神、惣者大日本國中六十餘州大小神祇、伊豆　箱根　三嶋權現、別者當國鎭守新田八幡大菩薩　開門正一位　金峯山藏王權現　大隅正八幡大菩薩　霧嶋山六所權現并當所擁護諏方上下大明神　稻荷大明神　祇薗請舍(ママ)　春日大明神　若宮八幡大菩薩、殊八萬四千軍神　摩利支尊天　愛岩山大權

現　太郎坊　次郎坊　諸夜叉神　五道冥官冥衆　焰魔
法王　俱生神等、天滿大自在天神等、神罰冥罰於各之
身上蒙罷、今生而者無弓箭守護、其上受黑白兩癩身躰、
後生而者阿鼻無間墮在大城必定也、
仍起請文如件、
寛永十八天辛巳
十一月四日

海老原宇左衞門
爲〔判〕◎〔花押〕

細江内匠助◎〔花押〕
吉〔判〕

竹下前後　◎〔花押〕
宗長〔判〕

岩城求馬助　◎〔花押〕
重廣〔判〕

向井主馬首　◎〔花押〕
友次〔判〕

伊地知軍弥　◎〔花押〕
重詮〔判〕

河口平左衞門　◎〔花押〕
□〔判〕

本田小吉　◎〔花押〕
親次〔判〕

上井采女正　◎〔花押〕
兼延〔判〕

町田次兵衞　◎〔花押〕
久次〔判〕

廣瀨吉左衞門◎〔花押〕
宗親〔判〕

佐多門弥　◎〔花押〕
忠〔判〕

221

「仝卷中」

天罰靈社起請文前書之事

一我等事　光久様へ來世迄之御供申上候儀、少も別儀御座有間敷候事、

一御前方御意之趣、他言申間敷候、若我等身上ニ被掠聞召儀御座候ハヽ、被遂御糺明候而可被下候事、

一惡心不忠之輩於有之者、雖爲親子兄弟、言上可申上候、其外忠節忠公之心指深者、及見及聞心底不殘言上可申上候、但我ニ能人を能と申間敷候、又我ニ惡人を惡と申上間敷候事、

右之條〻別儀於有御座者、

「牛王神文略」

▽◎　敬白天爵靈社上卷起請文之事

謹請散供再拜〻〻、惟當來年號寛永十八年太歳辛巳十月吉日、月並者十二箇月、日數者凡三百五十餘箇日、撰定吉日良辰、致信心、謹奉勸請、掛忝百億須弥山　百億鐵圍山　百億旃樓山　摩訶旃樓山　各奉始梵天帝釋四大天王　日光菩薩　月光菩薩　諸宿曜等、欲界色界　所有天王　天衆　三千星　宿劫　四天　八天　十二天　卅三天　諸天　三寶廿八部　七曜　九曜　南斗　北斗　三臺王女　三公星　百官星　五鎮大星　一切圀主星　廿八宿　南閻浮提　十六大國　五百中國　十善神　五大力菩薩　東方降三世明王　同捉頭賴吒天王　八萬四千眷屬　南方軍荼利夜叉明王　同毗留勒叉天王　七萬七千眷屬　西方太威德明王　同毘留博叉天主　六萬六千眷屬　北方金剛夜叉明王　伺吠室羅那耶城　毘沙門天王　九萬九千眷屬　中央大日大聖不動明王　十萬八千眷屬　愛染明王　鴈瑟沙广明王　金剛藏王　深砂大王　大聖金剛童子　大辨功德天　大吉祥天　大聖歡喜天　荒神　麁亂神　多婆天王　那行都佐神　毘那那迦等九億四萬三千四百九十之荒神、特者九萬八千軍神乃至十萬八千軍神、二千八百師天童子、惣而普天率土五道冥官　有勢无勢　殊者法眼應三身如來　金剛界七百餘尊　胎藏界五百餘尊　二萬燈明佛　三萬燈明佛　過去千佛　現在千佛　未來千佛　惣而十萬恒沙諸佛善神　普賢　文殊　觀音地藏　龍樹　藥王藥上无盡意得大勢不休息大力法涌常啼妙賢　妙音　陁羅尼　虛空藏栴檀香等乃至微塵數菩薩广訶薩埵　悉奉勸請、別而日域崇廟天照太神　内外兩宮諸末社等、王城鎮守八幡大菩薩　賀茂下上　松尾　平野　稻荷　祇薗　春日　若宮　住吉　丹生　貴布禰　天滿大自在天神部類眷屬、吉田　廣田　立田　梅宮山王廿一社　多賀大社末社諸神　赤山　新羅大明神　三保五所　八所大明神　護法善神　建部兵主　三上　白髮諸大明神　大和　三輪　石神　布留　水分

金峯山藏王權現　子守勝手　熊野三社　十二所權現
若一王子　九十九所一萬金剛童子　十方眷屬　山內諸
神　出雲大社　備前　備中　吉備津宮　嚴嶋　宇佐八
幡宮等諸神　熱田　三嶋　鹿島　香取　八釼　諏方上
下大明神　別而者氏神　惣者日本六十餘州大社　三千
餘社小社、千小國無量粟散、國中至于山川谿谷大海河
等仁在々天等部　金剛部　明王部　聲聞部　緣覺部
如來部　諸夜叉部　天神地神等、悉混亂而奉請驚、下
者堅牢地神　上首トシテ卅六禽　八海所援龍王龍衆
燄魔天界　焰魔法王　十王十躰俱生神將　太山府君
司命司祿　摩利支尊天　天一神　太白神　太歲八將神
十二神將　十二月將　十二天將　天農神　地荒神　阿
豆知神　山神　海神　風神　法花守護十羅刹女　卅番
神　般若守護　十六數萬大小神祇等　大疫神　大病神
八萬四千鬼神　大恩神　歲破神　天蘇神　夜氣夜叉神
妙鬼神　六百五十餘神　金圍六十萬鬼神　刀八毘沙門
天王　大天狗太郎房眷屬　九億四萬三千四百九十餘神
善貳師童子　八所大明神　善害坊　次良房　八萬四千
眷屬　飯繩大明神　四萬一千眷屬　大天魔三萬三千
小天狗三萬三千眷屬　智羅天狗　十二八天狗等、日域
中山山峯々嶽々所居住大天狗　小天狗等、各作群集而
正路之旨照鑑給、若僞心於在之、立所受白癩黑癩重病
八萬四千毛孔、四十二之骨節、日々夜々苦病无止、深
厚蒙御罰、弓箭冥加盡、佛神三寶雖作所願、不可叶、
於後世者、墮八寒八熱大无間地獄、到未來永劫不可有
浮期者也、

仍靈社上卷起請文如件、

寛永十八年辛巳十一月吉日　　種子嶋爲兵衞◎（花押）
時壽（判）

222

「光久公御譜中」

尙〻此狀因幡守も一覽候而可然候、將又前方其方へ
以書物申置候筋目ニ、諸事少も無遠慮可申付候、右
之樣子因幡守へも可被爲申知候、爲心得候、以上、
其後其許無相替儀候哉、又自分之儀も無事候歟、如何承

度候、當分其地へ河上因幡守・岩切六右衞門尉罷在候間、何篇以談合可被入念候、萬一談合共難成樣子候ハヽ、此方へ可申上候、可得其意候、謹言、

「朱カキ」「寛永十八年」霜月廿日　　光久御判

新納右衞門佐殿

「御文庫拾九番箱三十七卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶〻右衞門佐存之儀共候故、致加判候、以上、

追而申候、

一今度爲上使、水野甲斐守殿御國へ可有下向之由承付候故、東郷加兵衞尉使ニ申上候、其後色〻承合候へ共、未御當り之儀者無御座樣ニ申候、もはや月迫之儀候間、此節にてハ御座有間敷かと致推量候、乍去無油斷承合、御下向之由候者、以早飛脚可申上候事、

一來年〈◎闕字〉御參府時分之儀、攝州老御使之刻、阿部豐後守殿迄被得御意候處、　御奉書之御上卷ニ、今度者御序無御座候間、重而可被仰出由御座候處、其後菟角之儀不被仰出候、隱岐守樣も別ニ替儀御座有間敷かと被思召候間、先月之御當番阿部對馬殿へ罷出、先日之御返事御事多候間、御相談も可有御延引かと存候間、いつものことく正月中ニ罷立、三月中ニ參府候樣ニと可申下候、爲御心得被聞召置御尤之由、御屆を申上置、可然被思召之由被仰聞候間、則右衞門佐罷出、對馬守樣へ申上候、直ニ被聞召尤之儀候條、阿部豐後守樣へ參候而、同前ニ申入置候へと、任御差圖其通ニ御斷申上置候間、必〻其御格護可爲肝要と存候事、

一金山之儀ニ付、甲斐右京・平田清右衞門尉被召上候、去三日參着候而、樣子被申候間、具ニ承達候、◎〈闕字〉隱岐樣も御暇出來、十日比可被成御立由候、其内ニ何とそ請御意、御年寄衆へ兩使者致同心、　御意之趣可申上候、金山之儀被成御申後、于今御心遣之由、御口上御條書相見得候、乍去其筋ニ者成立申間敷候、最前之儀者、兵部殿・右衞門佐を以、阿部對馬守樣迄被仰入候、其後岩切六右衞門尉殿ニても、金山漸〻ニ榮り、人類

もはや如何程寄候、猶ゝ追ゝ可申上之由、被仰上候、
其後六右衞門尉殿・因幡守・◎(闕字)隱岐様へ得御意、讃岐
守殿委申上候、其後阿部豐後守殿へ巨細六右衞門殿被
申上、砂金千兩上り申候、右之筋を以、此度又ゝ細ニ
被仰上候間、御申後ニ者罷成間敷かと存候、何方之金
山も榮り候を被見究、公儀へ被差上由被爲申候、何も
左様ニ候而、金山ハ多分被成拜領儀ニ候間、御國之金
山も左様被成御申可然候ハんと、隱岐様被仰、三原仲
右衞門尉にて爲被仰下儀候、野邊澤之金山事ゝ敷候
處、鳥井左京殿三四年程巨細無御申、隣國者此金山ニ
付、百姓共參候故、耕作も荒候由、爲被申由候、又江
戸町衆も此金山ニ米寄候故、江戸之米も不相續、高直
ニ候て致迷惑之由、訴訟申候、其ニ付左京殿手前無仕
合ニ成候、此儀を　隱岐様被聞召通、色ゝ被入御念儀
と聞得候、先ゝ此元隨分致談合、以其上披露可申と、
相談申候事、

一若君様御頭御小瘡も未然ゝ無御座様ニ申候事、

一御系圖之細書、阿蘇主殿殿・平田清右衞門殿ニて被召
上候、何も細ニ拜見仕候、　隱岐様へ得御意、以其上
道春へ可申入候、道春へ◎(闕字)御書并御進物被遣候、主殿殿
清右衞門尉殿・因幡守致同心、進入之可申候、御進物
も諸大名衆よりハおもく候由、承及候、何そ相添可申
かと談合申候、様子者追而可申入候、猶期後喜之時候、
恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」　十二月六日

新納右衞門佐◎(花押)
久詮(判)

川上因幡守◎(花押)
久國(判)

鎌田治部少様
山田民部少様
頴娃左馬頭様
下野守様
彈正大弼様　參人ゝ御中

「末紙封面名前略ス」
▽◎

川上因□(幡守カ)

224

彈正大弼様
下野守様
頴娃左馬頭様
鎌田治部少様
山田民部少様　△

新納□（右衛門佐カ）

巳ノ十二月六日之狀ハ二月廿六日山田平左衛門持下候、
一上使より水野甲斐殿御下向之由、前ニ被仰下候へ共、于今無其沙汰候由候事、
一來春御上洛之儀、時分定候（「本マヽ」）共、いつものことくたるへきとの事、
一金山之事、一若君様御小瘡之事、一御系圖之事、
一不寄御分國・他國、御爲惡計速之儀共申來候者、少茂不同心申、可致言上事、
一御隱蜜之儀、雖被仰聞候、御内證被承候外之衆へ、他言申間敷事、
一就身上被聞召掠儀於有之者、乍憚其實不實之旨、於被遂御糺明候者、愚意之段可申上候事、
右之條ゝ於偽申上者

「御文庫拾九番箱三十七卷中」

敬白靈社起請文前書之事
一奉對光久様、無別心御奉公可仕候、自然世上雖變動候、別而可致忠節覺悟候支、
一雖爲親類縁者、傍輩於存逆心之旨者、曾以入其案申間敷事、

「牛王神文略」

◎敬白天罰靈社上卷起請文之支
謹奉觀（ヽヽ）請、掛忝百億須旃山・百億鐵圍山・旃樓山　摩訶旃樓山等各奉神始、梵天帝釋天四大天王　日光菩薩　月光菩薩　諸宿曜等　欲界色界所有天王天衆　三千星宿劫　四天　八天　十二天　卅三天　諸天　三寶廿部衆　七曜　九曜　南斗　北斗　三臺王女　三臺星　百官五鎮大星　一切國主星　廿八宿南閻浮提　十六大國　五百中國　十千小國　無量粟散國中至于山川谿谷大海江河等仁在々天童部　金剛部　□部　緣覺部　如來

部　讀夜叉部　天神　地神等、悉混亂而奉請驚、下者
堅牢地神　上　首三十六會　八海所接龍王龍衆　燄闍
王界　燄闍法王　十王十躰俱生神將　太山府君　司命
司祿　摩利支天　天一神　太白神　太歲神　八將神
十二神將　十二月將　十二天將　天荒神　阿豆神　海
神　風神　法華守護　十羅刹女　卅番神　般若守護
十六善神　五大力菩薩　東方降三世明王　同提頭　天
王　八萬四千眷屬　南方軍荼利夜叉明王　毗留博叉天
王　七萬七千眷屬　西方太威德明王　毘留博叉天王
六萬六千眷屬　北方金剛夜叉明王　同吠空羅元那耶城
毘沙門天王　九萬九千眷屬　中央大日大聖不動明王
十萬八千眷屬　愛染明王　烏芻沙广明王　金剛藏王
深大聖金剛童子　大辨功德天王　大吉祥天　大聖歡善
天　荒神　麁亂神　多婆天王　那行頭佐　毘那耶迦
等、九億四萬三千四百九十之荒神、特者九萬八千軍神
乃至十萬八千軍神　二軍千八百師天童子、惣而普天率
土五道冥官、有勢　無勢、殊者法見應三身如來　金剛
界七百餘尊　胎藏界五百餘尊　二萬灯明佛　三萬灯明
佛　過去千佛　現在千佛　未來千佛　惣而十萬恒沙
諸佛善逝　普賢　文殊　觀音地藏　龍樹　藥師王　上
梵建　意德大勢　不休息大力法誦　常啼妙見妙音等及
至微塵數菩薩摩訶薩埵悉奉觀請、別而日域崇廟天照大
神　內外兩宮　諸末社等、八幡大菩薩　王城鎭守賀茂
上下　松尾　平野　稻荷　祇園　春日　日吉　住吉
丹生　貴布禰天滿大自在天神御部類眷屬、吉田　廣田
立田　梅宮山王廿一社、多賀大社　諸神　赤山新羅大
明神　三保五所　八所大明神　護法善神　建部兵主
三上自堅吉諸大明神　大和　三輪　石神　布留　水分
出雲大社　前　中　吉備津宮　宇佐八幡宮　嚴嶋等諸
大明神　熊野三山十二所權現　若一王子　九十九所
一萬金剛童子　十萬眷屬　山內諸神　金峯山嚴王權現
三嶋　鹿嶋　熱田　八釼　諏訪之上下宮大明神　子守
勝手、殊者間東守護　伊豆箱根兩所權現、富士山大權
現　立山大菩薩　白山妙理大權現　月山　朝界　出羽

羽黒山、時者飯繩大權現　油日大明神　河合牛天王
松尾大明神　櫻宮和光利物荒木一宮大明神、惣而吾國
六十餘州　郡數五百九十二　郷數四千百三四十二郷
等、所有影向觀請之諸神　祇衆十七萬一千三十一社、
上ニ者有頂天、下ニ者金輪際至迄、悉奉請驚、急赤魔
王魔民者雖爲國家外道、皈邪正一如　并鬼神横道故先比
叡山大天狗之父好善月光王　十萬五千眷屬　熊野山大
天狗　金毘羅赤女　九萬九千眷屬　愛宕山太郎王子
榮術房　九億四萬三千四百九十眷屬、　鞍馬山榮威僧
正房六萬八千眷屬　筑波山戸隱神通　智羅天狗　四十
四萬一千眷屬、富士・箱根九郎王子　豐俗天狗　五十
萬五千眷屬、白山　立山通達天狗　六萬一千眷屬、羽
黒白耆之命師天狗、七萬三千眷屬、相模大山　彦山仁
迷天狗、五萬四千眷屬、日光　淺間嶽飛長天狗、二萬
五千眷屬、金峯山道俗天狗、四萬三千眷屬、其外東方
八萬四千眷屬、南方八萬四千天狗、西方八萬四千天狗、
北方八萬四千天狗、中央八萬四千天狗　善皆房　善智
房　魔訶智房　大天魔三千三百祖目駒形酒王子等至迄
各各令招請皆指集而垂照覽正路給、　則此旨僞私曲有
之者、今生而者白癩黒癩重病八萬四千毛吼、四十二骨
節、遂御罰、弓箭之冥加盡七代子ゝ孫ゝ迄沒終來世者
爲先　等活地獄　衆合地獄　叫喚地獄　大叫喚地獄
焦熱　無間地獄被墮在西雖經未來永劫深山叉不可有者
也、
仍靈社上卷起請文狀如件、

寛永十八年辛巳十二月十四日　　入來院伯耆守重國〔判〕◎（花押）

町田弥兵衞殿

225 （本文書ハ二九二號文書ト同文ニツキ省略ス）

226 （本文書ハ一七五號文書ト同文ニツキ省略ス）

227 「御文庫十二番箱四拾壹卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

貴札忝致拜見候、然者御手前御領分金山、弥無懈怠出申

之由承候、就夫八月ゟ十月迄御仕置急度被仰付、則目錄御上ヶ被成候、　公義ゟ御仕置被仰付候樣ニと思召、老中迄被仰入候、奉得其意候、委細之段者右各ゟ可被申入候、將又御國之鱧子壹箱被懸御意、忝奉存候、寔遠路之處、每度色〻御心入之至、御禮難申(盡)候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「慶長十八年」極月十九日　　土井大炊頭
利勝〇(印)

松平薩摩守樣
貴報

◎松平薩摩守樣　　利勝
貴報

猶以印判御免可被成候、以上、

「御文庫拾九番箱三十八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶〻右衞門佐儀、右之樣子存候ニ付、加判申事ニ候、
已上、

態令啓入候、

一爰元　虎壽樣御兄弟御無事被成御座候間、可御心易候、

一若君樣(闕字)御頭之小瘡、頃被遊御平愈、從諸大名衆爲御祝、御樽肴被成御進上、方〻より注進御座候間、松平伊豆守殿へ右衞門佐致伺候得御意候得者、　薩州樣御留守之儀候條、御祝物上り候事ハ入間鋪由被仰候ニ付、進上不申候、

一來春二三之(闕字)御丸就御普請、從大名衆色〻御進上共御座候、關藏人殿よりも書立共參候、先年御本丸御普請之時之半分上り可申由候、其ニ付此方御進上も可爲何色哉與、折角致談合候、從御國可被召上物者、來春筈ニ合申間敷候間、此元にて買調可申由、相談仕候、先松之七寸角・六寸角、長さ二間半程之木を、千本歟、千五百本歟調可申與、直成等聞せ申候、先年者松角二千本被成御進上候、其半分あて可申與談合申候、落着之儀者追而可申入候、打續金入之儀迄出來候、御國も飢饉之由相聞得候、御借銀返辨可難成與、心遣千萬ニ候、

一甲斐右京殿・平田清右衞門殿を以、金山之儀被仰上候、隱岐様御下向前ニ而候つれ(共)、節々被召寄細ニ御相談之上、書物なと讃岐守殿被成御内談、御なをし候て被下候間、御當番松平伊豆守殿へ御使兩人我々も致同心、去ル十一日ニ申上候、具被聞召上、書物被成御請取候、其後菟角之儀無御座候間、去ル十九日從　讃岐守殿　虎壽様へ鷹之鴈被進候、御禮爲御使右衞門佐參候處、被成御逢、金山之出合未無御座由、被成御物語候、御返事延引ニ而者金山を御留置候條、堀子之衆も痛、人數も散り可申與笑止ニ存候、餘之事ニ爰元にて少之御祈念共仕候、御返事次第兩使差下可申候、

一九州御國廻之　上使松田善右衞門尉殿より新庄右近殿まて、屋久・種子へ渡海時分之儀、四季之内何時分能候哉、於罷成者薩广之家老衆へ御尋候而給候様ニ與、爲被仰由、從右近殿承候間、去ル十八日　上使御三人へ兩人參、遠國へ御國廻御大儀之通申入候、何も御留守故、家老衆迄申置候、善右衞門尉殿家老衆被申候者、御國之繪圖、いかにも細ニ郡分迄入念候様ニ與被申候、此元ニ而者郡分なと不罷成候間、御方ニ而可被仰付候、常之繪圖者此方へ御座候間、指出可申候、來春者はやき事も可有御座候、御油斷被成間敷候、被成御國廻之道筋之次第、兼日相定候ハてハ、不自由成國にて候通可申上候、

一薩州様來春御上洛時分之儀、其後とかく之出合無御座候、弥正月之末ニ被成御打立可爲肝要與奉存候、

一道春へ御書并燒酒一壺・なし物一壺被遣候、從諸大名系圖之儀ニ付、進物共おもく被成之由承及候間、致談合、卷物五ッ相添、御判紙參候條、◎(闕字)御書も認なをし申候、御系圖細書從御國參候、皆々見せ申候處ニ、何も彼方へ被留置、細御見屆候而、地書被相調候、無隙候處被入精、殊之外急ニ相調候、尤之儀多候、委清右衞門尉殿にて可申入候事、

一蜜柑去ル十六日ニ參候、如例年箱ニ入差上申候、

一若君様へ御はま弓從大名衆被成進上候、御矢臺もなし

地蒔繪なとにて御座候、此方も左様ニ調申候、
一來年御供衆之日記、御先ニ可被召上候、殊外宿賦隙入
申之由、物奉行衆被申候、又此使被召上及申間敷候、
恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」十二月廿一日　　新納右衞門佐◎〈花押〉
久詮〔判〕
川上因幡守◎〈花押〉
久國〔判〕

鎌田治部少様
山田民部少様
顕娃左馬頭様
下野守様
彈正大弼様　参人ゝ御中

「末紙ニ封面略ス」
▽◎彈正大弼様
下野守様　◯　久國
顕娃左馬頭様　参
川上因幡守

229

「御文庫拾九番箱三拾八卷中」「光久公御譜中ニあり」

〆　　新納右衞門佐△

十二月廿一日ノ狀、勝目才左衞門午ノ正月十八日ニ持下候、
一若君様御小瘡御平愈之事、
一江戸二三□御普請ニ付御進上物之事、
一金山之事、
一上使之事、
一御上洛時分之事、「外スリキレ知レス」

猶ゝ從板倉周防殿　殿様へ參候御狀、京都藏衆より
此元へ被遣候間、今度差上申候、土井大炊頭殿・堀
田加賀守殿よりの御狀、道春よりの御返札、何も差
下申候、可有御披露候、已上、
右之狀相認候處、從阿部豐後様御用之由被仰ニ付、今朝
右衞門佐罷出候前ニ、以喜入攝津守、來春　御參府時分
之儀、被得御意候、其刻御序無御座候間、追而可被仰出
之由候、爲其首尾今度◎〈闕字〉御奉書被遣之由、豐後様被仰候、
如此◎〈闕字〉御參勤尤ニ奉存候、此由可被成御披露候、此次而

ニ豊後様被仰候者、かりうた爲防船、勢樓船可被成御用意歟與、被得御意候、井上筑後殿へ被成御尋候處、勢樓舟者入間鋪由被仰候間、其御用意、可爲御無用候、大鐵炮之儀新鋪被召立にてハ無之由候間、取合可被申哉與被仰候、是も筑後殿へ細ニ被成御相談、重而可被仰之由候、然時者兩條共ニ先ゝ御ひかへ被成可然存候、能ゝ承合、追而可申上候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」十二月廿一日

新納右衞門佐◎(花押)
久詮(判)

川上因幡守◎(花押)
久國(判)

鎌田治部少様
山田民部少様
頴娃左馬頭様
下野守様
彈正大弼様
參人ゝ御中

「末ニ封面アリ略」
▽◎彈正大弼様
下野守様
山田民部少様
參
久國
川上因幡守
新納右衞門佐
◯
△

巳ノ十二月廿一日ノ狀午ノ正月十八日ニ勝目才右衞門持下候、

一御參府之儀ニ付御奉書事、

一かりうた舟の用意勢樓大鐵炮之儀御申、先ゝ□ひかへ候へとの儀也、

230

「御文庫拾九番箱三十八卷中」「光久公御譜中ニ在リ」

猶ゝ細嶋へ早ゝ繪圖御持せ、御使者被遣尤候、以上、

態申入候、

一九州御國廻之上使松田善右衞門尉殿・蒔田數馬殿・蜷川喜左衞門尉殿より、兩人御國之繪圖持參仕候へ、可被成御談合由承候故、昨日致伺公候處、數馬殿於御宿ニ巨細被聞召候而被仰候ハ、先ゝ屋久・種子之海上難渡にて候時分も可入由、先年之上使口から具被聞召候、先兩嶋を被召廻、其以後御國を可有御廻由候、二

月二日三日ニ江戸御立候而、直ニ細嶋へ御下着候而、佐土原・飫肥御覧候而、志布志・肝付方根占・佐多邊迄被成御通、それより種子へ御渡、屋久・永良部被召廻、山川へ御歸帆候て、其元之御衆へ以御熟談之上、大隅方か、薩广方よりか、御國之御勝手、又上使勝手にても能様ニ可被成御廻候、三人者御同心にて可被成御廻由被仰候、勿論甑島へも可爲御渡海候、其座ニ御陸衆之様成人一人被居候繪圖をも見せ被成候、菟角之儀不被申候、定彼人可被參と存候、屋久・種子へハ人數少ゝ可被召列被仰候、

一如右相定候而被仰候間、今朝相良主計助殿を以、松田善右衞門尉殿御功者にて候間、御供人數賦之儀なと、得御意候處、直被成御相人數書立御出し候、其時又ゝ被仰候ハ、屋久・種子渡海時分入儀候間、三月者罷渡度候、左候者江戸二月初ニ可罷立哉與、年寄衆へ請御意候へ者、左様ニ候て尤ニ被思召候、　公方様被聞召上候ても、替儀有間敷候由被仰出候間、弥左様ニ御落着候通被仰候間、萬事其御心得可爲肝要候、

一御宿等先年之如上使、士衆之宿ニ者可爲無用候、いかにもかろく誘候へ、其外御馳走ふり少も無之様ニ、返ゝ可申下由被仰候、從此方申候者、御宿ニ可罷成家居無御座在所共御座候、ヶ様成所者柴かこひをも仕候ハてハ、御宿有間敷由申候へ者、其儀も可爲無用候、家居可有之在所を被聞召合、御宿賦可被成之間、必新敷御宿なと不被成誘様ニ可申下由、遮而被仰候、

一乍不申、屋久・種子へ御渡海舟之儀、無御油斷可被仰付候、

一萬事を被差置、屋久・種子之御渡海を可被成御急由被仰候、爰元を二月初ニ被成御立、直ニ細嶋へ可爲御下向由候、然時者二月中ニ御國へ可被成御着候、能ゝ御用意之儀被成御肝煎候ハてハと存候、爲其申入候、恐惶謹言、

「朱カキ」
「寛永十八年」十二月廿六日　　新納右衞門佐◎（花押）
久詮〔判〕

鎌田治部少様
山田民部少様
顕娃左馬頭様
下野守様
彈正大弼様　人々御中

川上因幡守　◎（花押）
久國（判）

巳十二月廿六日の狀、午ノ正月十八日ニ御道具衆持下、上使可被成御下儀也、
飛脚ノ名立山吉左衛門・末原甚左衛門、

231

「光久公御譜中」
「正文在文庫」

爲歳暮之祝儀、小袖十到來、欣思召候、猶土井大炊頭可述候也、
「朱カキ」
「寛永十八年」十二月廿七日　◯「黒印」

薩广侍從殿

▽◎
薩摩侍從殿
△

「末ノ封面ニ」
彈正大弼様
下野守様
顕娃左馬頭様
山田民部少様
鎌田治部少様　參

▽◎
◯
△

久國

川上因幡守
新納右衛門佐